

〈論 文〉

プラトンの『国家』における支配，統治ならびに公共部門

—— 知識人の人間観ならびに社会観 (8) ——

Domination, Reign, and the Public Sector in Platon's 『Πολιτεία』

—— High-Brow Views with Human Nature and Social Relationship (8) ——

久保田 義 弘

要旨

本稿では、正義を実現する国家とはどのような国家像であるのかを考察する。その際、プラトンが対話編『国家』で展開する正義論ならびに国制（政治体制）を手がかりにしてその国家像について検討する。

本稿の第 2 章では、第 1 章のプラトンの哲学あるいは哲学者についての現実認識を踏えて、国制の混乱・崩壊の原因が支配者層を構成する人々の中の支配権を巡る抗争にあるというプラトンの想定を基盤とし、支配者間の団結・連帯を実現するための要件を前提にし、プラトンが最も強く押し出している理知的な支配者とその支配者を社会において育成するための教育プログラムについて考察する。プラトンの成長段階に応じた教育プログラムの特徴は、次の 6 段階の成長段階

- (1) 幼児から 10 歳頃（教養教育ならびに体育教育（健康管理教育））
- (2) 10 歳頃から 20 歳頃（学術教育）
- (3) 20 歳頃から 30 歳頃（研修教育（予選された者の教育））
- (4) 30 歳から 35 歳頃（哲学的問答法の教育（言論修練教育））
- (5) 35 歳頃から 50 歳頃（体験教育）

(6) 50 歳以後（支配者として活躍あるいは哲学に専念）に分けて、支配者（守護者）を踏まえた教育プログラムで、育成される支配者は、理知的で、かつ守護者（軍人）としての体験教育を受けた支配者である。政務を審議し計画する支配者（政治家）の職位につく年齢の 50 歳超まで、支配者としての教育を受けた人間である。これがプラトンの理想とした国制、すなわち哲人王制のもとでの支配者・統治者である。このプラトンの支配者養成の教育プログラムを検討する。

本稿の第 3 章では、正義について、様々な観点から考察する。ギリシャ人の正義、正義の社会的有用性、正義と知者、正義と支配者、正義と利益、正義と分を守る、正義と国家、正

義と善、正義と幸福などについて考察し、その中でも、正義と国制（最優秀支配制、寡頭制、民主制、ならびに僭主独裁制）の関係を検討し、特に、ソフィストと知られるトラシユマコスの正義論（強者の利益が正しい）を巡って、正義が支配者（現実の国制）にとって何であったのかについてに認識を深める。

本稿の第4章では、プラトンが正義とは何かを明らかにするために、新たに建設された国家を取り上げ、その国家は、金儲けする階層（農民や、鍛冶職人、織物職人など）、支配者層（政策を計画し審議する人々）、そして支配者を補助する階層（軍人）から構成されるが、それぞれの階層が自身の職務に専念し、他の階層の職務（仕事）を侵さないことが正義であり、そして、プラトンが新たに建設する国家では、知恵、勇気、節制、そして正義が実現し、さらにその国家で生活する各個人においても4つの徳が実現することを説明する。

キーワード：全国民の利益（幸福）、正義、守護者（支配者）、国制（優秀者支配制、寡頭制、民主制、僭主独裁制）、国民（金儲けする階層、支配階層、補助者層）、魂（理知的部分、気概の部分、欲望的部分）、分を守る、四つの徳（知恵、勇気、節制、正義）。

## はじめに

プラトン（Πλάτων, Plátōn）（前427年-前347年）は、イデア論や想起説を提唱した哲学者、ソクラテスを対話者の一人にして数多くの対話編を著した思想家・文筆家（詩人）、講師料などの金銭を得て青年に人生の処世術（生きる技術）を講義したソフィストの教義に対する反論あるいは対抗した問答術に卓越した思想家、政治家になる希望あるいは夢を抱いて政治・国家について考察した国家論者、またソクラテスを心から信頼し敬愛したソクラテスの愛弟子であった。

本稿では、プラトンの国家論、すなわち国家の統治のあり方を正義とは何か、あるいは全国民の幸福を達成する国家とは何かについて、プラトン自身による対話編『国家』<sup>1</sup>を通して

---

<sup>1</sup> 本稿で引用に使用する文献は、プラトン著（藤沢令夫訳）『国家』であるが、これは上下本として翻訳され、『国家（上）』（第1巻から第5巻）と『国家（下）』（第6巻から愛10巻）に分冊されている。本稿の引用もこの翻訳に倣って行った。この対話編は、プラトンが50歳から60歳にかけて執筆されたと言われている。前375年頃を中心とする10年の間に執筆されたと言われている。

また、対話が設定されている時代は、前430年から前420年の10年間の間であろうと思われる。この時代設定は登場人物から推測するのであるが、ソフィストのプロタゴラス（Πρωταγόρας, Protagoras）（前490年頃生-前420年頃没）が、『国家（下）』600C（第10巻第4章、355ページ6行目）において取り上げられていること、またソフィストのプロディコス（Πρόδικος, Prodicus）（前465年頃生-前415年没）についても取り上げられていることから、前420年以前であると考えられる。また、プラトンの二人の兄アデイマ

考察する。プラトンは、哲人王制を彼の理想とする国家あるいは統治体制として、ソクラテスを対話者の一人として考察している。プラトンは、支配者が哲学者（哲人王制）、あるいは哲学者が支配者になる国家を目標として、国家あるいは国制あるいは統治体制を考察している。また、プラトンの建設する国家あるいは支配体制下において全国民が幸福であるかどうかを考察するだけでなく、さらに現実の国制（民主制、寡頭制、あるいは僭主独裁制）を考察し、その上で、それぞれの統治下の国民がどのような生活を過ごすかについても考察する。哲学者が支配者に相応しいとするプラトンの見解に疑問を抱き、批判的な人々もいる。哲学者が支配者になることに疑問を抱く理由の一つは、現在の間接民主制の下では国民の代表によって政治が行われているため、哲学と政治はそれぞれ異なった学問領域であると思われるからであろう。しかし、プラトンは、哲学者も支配者（守護者）も物事の真実在を求め、人間あるいは国民の幸福を目指す点では共通していることを示し、哲人王が存在しうることを説くことによって、現実にはプラトンの求める哲人王が存在しないとしても、その存在の可能性を提唱する。プラトンは、彼の建設する国家において、正義とは何か、その正義が実現する国家において、さらに、幾つかの条件を課すことによって、安定した支配体制が実現する可能性を説いている。

プラトンは、国家の特徴とそのひとりひりの国民の性格の間には類似した関係があると見ている。プラトンは、新たに建設される国家を構成する3つの部分（階層、あるいは階級）として、「国家において、金儲けを業とするもの、統治者を補助する任をもつもの、政策を審議する任に当たるもの」<sup>2</sup>の3種族（階層、階級）を置いている。「金儲けを仕事とする種族、補助者の種族、守護者の種族が国家においてそれぞれ自己本来の仕事を守って行なう」<sup>3</sup>ことが正義になる、すなわち、各自が自身の仕事に専念することによって、正義が保たれる。それぞれ自己本来の仕事を守って行なう場合、「このような本務への専心は、さきとは反対のものであるから、〈正義〉にはほかならないことであり、国家を〈正しい〉国家たらしめているものである」<sup>4</sup>とプラトンは規定している。プラトンは、職業を天職と考えていたのかも知れない。この見解は、ウェーバーの職業観に類似している。

そして、個人にあっては、その魂（精神）は「<sup>ことわり</sup>理を知るところのもの」<sup>5</sup>としての「理知的

ントスとグラウコンが、ソクラテスの対話者になっていて、『国家（上）』368A（第2巻第10章、141ページ12行目）に「君たちがメガラで名を上げたとき、グラウコンを恋している男が君たちのために作った」とあるが、二人がメガラで武功を上げたのは、トゥキディデスの『戦史（中）』巻4の72（200から201ページ）にあるメガラで戦えば、前424年である。対話をもたれた年代は、前430年から前420年の間であろう。他の説に前411年頃と設定する考えもあるが。

<sup>2</sup> 前掲書『国家（上）』441A（第4巻第15章、359ページ8から9行目）。

<sup>3</sup> 前掲書『国家（上）』431C（第4巻第11章、337ページ11から12行目）。

<sup>4</sup> 前掲書『国家（上）』431C（第4巻第11章、337ページ12から14行目）。

部分」<sup>6</sup>、「恋し、飢え、渇き、その他のもろもろの欲望を感じ興奮するところのもの」<sup>7</sup>としての「欲望的部分」<sup>8</sup>、そして「〈理知的部分〉の補助者であることを本性とするもの」<sup>9</sup>としての「気概の部分」<sup>10</sup>の3部分から構成されるとしている。その3階層（階級）から構成される『国家』における「正義」ならびに個人における正義とは何であろうかについて考察し、それぞれの職人が自身の専門を果たすとき、すなわち大工職人はその技術に合った本分を、戦士（守護者）は支配者の掟を従って勇敢に国を守り、支配者（守護者中の守護者）は、被支配者を幸福にすることによって、社会としての正義が実現し、また個人にあっては、魂の3つがそのなすべきことをなして、始めて、個人における正義が実現する。

プラトンは、マックス・ウェーバー同様に、政治を「国家の指導、またはその指導に影響を与えようとする行為」<sup>11</sup>であると捉えて、支配の観点から『国家』の有り様を考察している。ウェーバーは、支配について、家父長や家産領主のおこなった「伝統的支配」、非日常的な天与の資質（カリスマ）がもっている権威で、人格的帰依と信頼に基づく支配としての「カリスマ的支配」、そして「合法性」による支配（合理的支配）の3つに分けて捉えている<sup>12</sup>。プラトンの哲人王制の支配は、「カリスマ的支配」に落ち着くのであろうか。

## 第1章 プラトンの現実認識から新たな国家の建設へ

### 第1節 プラトンの支配者と実際の支配者

#### 第1項 実際の支配者批判

プラトンは、彼の時代に現存していたあらゆる国制は、「どれひとつとして哲学的素質に値

<sup>5</sup> 前掲書『国家（上）』439D（第4巻第14章、355ページ7行目）。

<sup>6</sup> プラトンは、魂のこの部分を〈学びを愛する部分〉あるいは〈知を愛する部分〉とも呼んでいる（前掲書『国家（下）』581B（第9巻第7章、299ページ14行目）参照）。この部分は、物を学ぶとろの部分で、「その全体がつねに、真実がいかにあるかを知ることへと向かっていて、金銭や評判のことなどには、三つの部分のうち最も関心をもたない部分」である（前掲書『国家（下）』580B（第9巻第7章、299ページ11から12行目））。

<sup>7</sup> 前掲書『国家（上）』439D（第4巻第14章、355ページ9から10行目）。

<sup>8</sup> プラトンは、この部分を〈金銭を愛する部分〉あるいは〈利得を愛する部分〉とも呼んでいる（前掲書『国家（下）』581A（第9巻第7章、299ページ1から2行目）参照）。この部分を〈金銭を愛する部分〉と呼ぶのは、欲望がなによりも金の力によって遂げられるからである。また、この部分を〈利得を愛する部分〉と呼ぶのは、「この部分がもつ快楽と愛は利得を目ざしているというふうに言う」（前掲書『国家（下）』581A（第9巻第7章、298ページ14行目））。

<sup>9</sup> 前掲書『国家（上）』441A（第4巻第15章、359ページ11から12行目）。

<sup>10</sup> この部分は、「その全体がつねに、支配し勝利し名声を得ることへと突き進む」と説明する（前掲書『国家（下）』581A（第9巻第7章、299ページ4から5行目））。また、この部分を〈勝利を愛する部分〉あるいは〈名誉を愛する部分〉と呼んでいる（前掲書『国家（下）』581B（第9巻第7章、299ページ7行目））。

<sup>11</sup> マックス・ウェーバー著（脇圭平訳）『職業としての政治』（8ページ8から9行目）参照。

<sup>12</sup> 上掲書『職業としての政治』（11ページ4から14行目）参照。



するものはない<sup>13</sup>と見ている。プラトンは、「現今の多くの国々」における統治を「夢まぼろしの統治」<sup>14</sup>と認識し、「現在多くの国々を統治しているのは、影をめぐってお互いに相戦い、支配権力を求めて党派抗争にあけくれるような人たちであり、彼らは支配権力をにぎることを、何か大へん善いこと（得になること）のように考えている」<sup>15</sup>と認識している。プラトンは、支配者の間での権力争いを皆無にするあるいは最小限にとどめる国家を建設することによって、支配者だけでなく、その他の全国民も幸福になる国家が実現すると信じて、新しい国家を建設している。

## 第2項 プラトンの支配者

プラトンの建設する国家<sup>16</sup>では、支配者になるべき人々の間では、「支配権力を積極的に求めることの最も少ない人間であるような国家、そういう国家こそが、最もよく、内部的な抗争の最も少ない状態で、治まる」<sup>17</sup>と信じ、物欲や人間の相互不信あるいは金銭欲から生じるであろう争い事から支配者同志の足並みが乱れることを避けようとしている。たとえば、現実の国家が理想郷（哲人王支配の国家）から逸脱し、寡頭制や僭主独裁制あるいは民主制に陥るのも支配者同志の争いが引き金になっていると認識している。新たに建設される国家では、「支配の地位につくことを万やむを得ない強制と考えて、そこへ赴く」<sup>18</sup>支配者たちの育成を目指し、「この点は、現今のどの国における支配者たちとも正反対のこと」<sup>19</sup>になることをプラトンは目指している。当時のギリシヤの都市国家の支配者とは、全く逆の支配者を新設国家（すなわち、彼の対話編『国家』）に育成しようと試みている。

プラトンは、支配者に正しい教育を与え、物欲に駆られる支配者の出現をできる限り最小にするために、支配者たちの「誰も、万やむをえないものをのぞいて、私有財産というものをいっさい所有してはならない」<sup>20</sup>ことを第一の変革としている。この変革の一環として、また生活の糧も「ちょうど1年間の暮らしに過不足のない分だけを受け取るべき」<sup>21</sup>としている。守護者には節度ある戦士が必要とする分量の糧（一年間分の糧）が国民からその任務

<sup>13</sup> 前掲書『国家（下）』497B（第6巻第11章、58ページ3から4行目）。

<sup>14</sup> 前掲書『国家（下）』520C（第7巻第5章、121ページ10行目）参照。

<sup>15</sup> 前掲書『国家（下）』520D（第7巻第5章、121ページ11から13行目）。

<sup>16</sup> 本稿で、プラトンの建設した（建設する）国家と言うとき、プラトンの対話編『国家（上）』357Aから480A（第2巻から第5巻）で提案している国家を意味する。

<sup>17</sup> 前掲書『国家（下）』520D（第7巻第5章、121ページ15から16行目）。

<sup>18</sup> 前掲書『国家（下）』520E（第7巻第5章、122ページ9から10行目）。

<sup>19</sup> 前掲書『国家（下）』520E（第7巻第5章、122ページ10から11行目）。

<sup>20</sup> 前掲書『国家（上）』416D（第3巻第22章、285ページ5から6行目）。

<sup>21</sup> 前掲書『国家（上）』416E（第3巻第22章、285ページ10から11行目）。

への報酬として提供される。さらに、第一の変革に関連して、「国民のうちでただ彼らだけは、金や銀を取り扱い触れることを許されないし、また金銀をかくまっている同じ屋根の下に入ることも、それを身に着けることも、金や銀の器から飲むことも、禁じられなければならない」<sup>22</sup>と課される。プラトンは、貨幣が争いごとの温床であると見ているがゆえに、貨幣の所有を支配者の間では禁止している。最後になるが、プラトンは、支配者たちには、「戦地の兵士のように、共同食事に通って共同生活をする」<sup>23</sup>と課している。プラトンは、支配者たちが私的に土地や家屋を所有し、貨幣を保有し使用すると、「外からの敵よりもずっと多くの国内の敵を、ずっとつよく恐れながら」<sup>24</sup>、全生涯をおくると説き、この段階では、「彼ら自身も他の国民も、すでに滅びの寸前までひた走っている」<sup>25</sup>と語る。プラトンは、第一の変革として、支配者の間で物質と金銭をめぐる争いを回避させるための充分条件を提示しているが、この条件が必要かどうかについては一層の考察と検証が必要である。

プラトンは、自由人の女性にも男性と同じように、音楽・文芸による教育と体育による教育を与えることを主張し、女性も男性と同じように戦争に参加し、様々な役職につくことを主張している。プラトンは奴隷の労働による生産を前提にはいたが、今日のジェンダー問題をいち早くも解決することを夢見ていたのかも知れない。

この女性と男性の平等意識を前提にして、プラトンの支配者の間での争いを避けるための第二の変革は、支配者の間では「妻女も子供も共有である」<sup>26</sup>ことを求める。支配者たちは、第一の変革から共同生活をするのであるから、そこでは彼の妻女も子供も共に生活することになる。その妻女や子供を共有にするを第二の変革としてプラトンは押し出している。プラトンは、この共有の可能性ならびに有益性に確信をもって考察している訳ではない。その共同者のなかで、誰と誰の間で子供を作るのかとういう問題について苦しい主張をしている。プラトンは、結婚を神聖化<sup>27</sup>し、優秀な者を残すために、結ばれる者は優秀な男と優秀な女が先にあるとしている。このことは、国家の支配者層を育成しその数を維持するために必

<sup>22</sup> 前掲書『国家（上）』417A（第3巻第22章、286ページ2から5行目）。

<sup>23</sup> 前掲書『国家（上）』416E（第3巻第22章、285ページ12行目）。

<sup>24</sup> 前掲書『国家（上）』417B（第3巻第22章、286ページ10から11行目）。

<sup>25</sup> 前掲書『国家（上）』417B（第3巻第22章、286ページ11から12行目）。

<sup>26</sup> 前掲書『国家（上）』457D（第5巻第7章、403ページ10から11行目）。また、プラトンは、「われわれは何らかの祭典と供養の式を法に制定して、そうした儀式的なかで花嫁と花婿をめあわせることにしなければならない。そしてわれわれの詩人たちには、そのようにして行われる結婚にふさわしい讃歌を作らせよう。他方、結婚の数については、これをわれわれは支配者たちの裁量にまかせることになるだろう」と説明している（前掲書『国家（上）』460A（第5巻第8章、409ページ14から410ページ1行目））。

<sup>27</sup> プラトンは、相互がけじめをもって交わるために、「次の措置として、結婚をできるだけ神聖なものとすることになるだろう。しかるに神聖な結婚とは、最も為になる結婚がそれであろう」と説明する（前掲書『国家（上）』458E（第5巻第8章、406ページ11から12行目））。

要であるとプラトンが考えていたことによる。たとえば、「若者たちのなかで、戦争その他の機会にすぐれた働きを示す者たちには、他のさまざまな恩典や褒美とともに、とくに婦人たちと共寝する許しを、他の者よりも多く与えなければならない」<sup>28</sup>とプラトンは考えている。また保育・育児についても、プラトンは苦しい主張を繰り返している。たとえば、「すぐれた人々の子供は、その役職の者たちがこれを受け取って囲い（保育所）へ運び、国の一隅に隔離されて住んでいる保母たちの手に委ねられるだろう。他方、劣った者たちの子供や、また他方の者たちの子で欠陥児が生まれた場合には、これをしかるべき仕方<sup>29</sup>で秘密のうちにかくして去ってしまうであろう」<sup>29</sup>と説明する。さらに、プラトンは子供をもうけるに適した年齢があるとしている。女性は「20歳から始めて40歳になるまで国のために子供を生むべきであり、男の場合は『疾駆の盛り』<sup>はやがけ</sup>を過ぎてから後、55歳まで国のために子供をもうけるべきだ」<sup>30</sup>と主張する。この年齢においては、「体力も知力も最も最盛期」であるからとプラトンは説明する。新たに建設される国家（プラトンの国家）では、子供は親を知ることはないので、大人は共同生活している男の子を息子と呼び、女の子を娘と呼び、子供達は男親を父と呼び、子供達はお互いに兄弟と呼び姉妹と呼び合った。また子供達は大人を父あるいは母と呼ぶ。これとどうように、守護者（支配者）の間では、彼らは皆身内の者となり、その内の誰かがよそ者となることはなく、相互に「守護者仲間」<sup>31</sup>と呼ぶ。そのように呼び合うことを可能にしているのは、守護者（支配者）は土地や家屋などの私有財産を持っていないことから生まれると考えられる。

プラトンの第三の変革は、支配者の育成課程の変革であった。プラトンにとっては、支配者も大衆も国民である。支配者は、多くの国々では君主と呼ばれ、あるいは民主制では執政官と呼ばれる。

新しく建設される国家での支配者として哲学者を求めるプラトンの対話編『国家』第5巻第17章(473D)<sup>32</sup>において、「哲学者たちが国々において王になって統治する」あるいは「現在王と呼ばれ、権力者と呼ばれている人たちが、真実にかつじゅぶんに哲学するのでないか

<sup>28</sup> 前掲書『国家(上)』460B(第5巻第9章, 410ページ11から13行目)。

<sup>29</sup> 前掲書『国家(上)』460C(第5巻第9章, 411ページ5から8行目)。また、保育する保母が育児の世話を仕切るが、「母親たちの乳が張ったときには保育所へ連れてくるが、その際どの母親にも自分の子がわからぬように、万全の措置を講ずるだろう。そして母親たちだけでは足りなければ、乳の出る他の女たちをみつ付けてくるだろう。また母親たち自身についても、適度の時間だけ授乳させるように配慮して、寝ずの番やその他の骨折り仕事は、乳母や保母たちにやらせるようにするだろう」と説明している(前掲書『国家(上)』460CからD(第5巻第9章, 461ページ10から15行目))。

<sup>30</sup> 前掲書『国家(上)』461A(第5巻第9章, 412ページ9から11行目)。この引用で、疾駆の盛りを過ぎた年齢とは、男の結婚適齢期は血気が鎮まった20歳過ぎを言っている。

<sup>31</sup> 前掲書『国家(上)』463B(第5巻第11章, 420ページ1行目)。

<sup>32</sup> 前掲書『国家(上)』473D(第5巻第17章, 452ページ3から8行目)参照。

ざり、すなわち、政治的権力と哲学的精神とが一体化されて、多くの人々の素質が、現在のようにこの二つのどちらかの方向に別々に進むのを強制的に禁止するのでない限り」<sup>33</sup>、「国々にとって不幸のやむときはないし、また人類にとっても同様だ」<sup>34</sup>と説かれる。その見解<sup>35</sup>は、哲人王思想として今日でも、よく知られているが、プラトンは、哲学と政治を異なった学問領域と考えられていたが、その両者の融合を試みる。その可能性を考え、政治的権力と哲学的精神を融合させ、疲弊したギリシヤの現状を変革できるのではないかと認識していたと思われる。プラトンは、国家の支配権力を求めて起こる党派抗争に明け暮れ、支配権を握ることが得になると見る現行の支配者を国家から排斥することを念頭に、上で既に引用したように、支配者となるべき人達が、支配権力を積極的に求めることの最も少ない国家、そういう国家こそが、最もよく、内部的な抗争の最も少ない状態になり、国家が治まると考えて、哲学者が支配者である国制を築き上げたのである。これと反対の人間を支配者にもつ国家は、その反対であると語っている。

プラトンは、正しい教育（音楽・文芸による教育と体育による教育）を与え、さらに守護者の私的所有の禁止ならびに妻女と子供の共有を課すことによって、国家の国民の間で苦楽の共有をするようになる。これは、「誰か一人が幸福であったり不幸であったりするとき、みなが一致して同じように」<sup>36</sup>、全員がそれぞれに自分のことのように、どうような幸福あるい

<sup>33</sup> 前掲書『国家（上）』473D（第5巻17章、452ページ3から7行目）参照。

<sup>34</sup> 前掲書『国家（上）』473D（第5巻第17章、452ページ7から8行目）。

<sup>35</sup> プラトンは、『ゴルギアス』484Cから485D（122ページ14から125ページ5行目）において、「哲学というものは、たしかに、結構なものだよ、ひとが若い頃に、ほどよくそれに触れておくぶんにはね。しかし、必要以上にそれにかかざらっていると、人間を破壊させてしまうことになるのだ。なぜなら、せっかくよい素質をもって生まれて来ても、その年頃をすぎてもまだ哲学をつづけていたのでは、立派なすぐれた人間となって、名声をうたわれる者となるのに、ぜひ心得ておかなければならないことがらを、どれもみな心得ないでしまふにきまっている」と言わせ、「だから、そんな状態で、公私いづれにもせよ、何らかの行動に出るようなことがあれば、物笑いの種になるだけであろう」と言わせ、また「若い年頃の者が哲学をしているのを見れば、ほくは感心するし、それはふさわしいことだと思う。そしてそういう人間には、何か自由らしさがあるように思うのだ。これに反して、この年頃に哲学をしないような者は、自由市民とは思えず、将来においても決して、立派なよい仕事をする見込みの全然ない者だと思う。しかし、実際、いい年になってもまだ哲学をしていて、それから抜けでようとしなない者を見たりするとき、ソクラテスよ、そんな男はもう、ぶん殴ってやらなければいけないとほくは思うのだ」と語らせている。そして、「一番正しいのは、哲学と政治の両方にたずさわることだと思う」とカリクレスに語らせている。プラトンは、カリクレスが実務と名声をととは違って、この世の名声や名誉に博することが善だとは考えていなく、真理を究める知を大切にしている。

カリクレス（Χαρικλῆς）（前5世紀）はアテナイの政治家であった。彼については、トゥキュディデス『歴史（下）』第7巻の20（182ページ12から14行目）に、紀元前413年のこととして、「この時季にペロポネスの周域の30隻の船を放った。この船団の司令官にはアポドロスの子カリクレスが任命された」とある。このカリクレスは、前404年から前403年の30人僭主政治体制のメンバーであったと思われる人物と同じであると思われる。

は不幸を共有する。プラトンは共に共感することが私的所有権の禁止と妻女と子供の共有によって可能になると考えている。たとえば、二つの条件を課すと、国家において、その国のだれかの苦しみや楽しみはその国の他の誰かの苦しみあるいは楽しみと共に感じられることが可能になる。プラトンは、「人々を助け護る任にある者たちの間での、子供と妻女の共有ということは、国家にとって最大の善をもたらす原因である」<sup>37</sup>と主張する。プラトンは、身体の「苦楽の共有ということが国家にとって、最大の善である」<sup>38</sup>と主張する。プラトンは、国民が苦楽を共にすることが幸福であるとして、これを善と考えている。

もし国民が苦楽を共有しているならば、私的に所有することから起こる一切の騒動と訴訟や裁判ごとは国家内では起こらないであろう。さらに暴行や殴る<sup>39</sup>などからも解き放される。国家には平和が維持され続けるであろう。プラトンは、私的所有の禁止<sup>40</sup>と妻女と子供の共有をかすことになって、その相互の間に平和に過ごすことをもたらし、その上で、守護者たちの間で「争いを起こさなければ、その他の国民がこの人たちに対して、あるいはお互いどうしに対して、離反するおそれがまったくない」<sup>41</sup>とプラトンは言う。

守護者の間で、争いが起こらないときには、「守護者たちをまさに守護者たらしめ、国家をできるかぎり最も幸福な国家たらしめていることに専念していることであって、国のなかの一つの階層にだけ目を向けて、これを幸福にしようとしているのではない」とプラトンは主張している（『国家（上）』466A（第5巻第13章、428ページ6から8行目））。決して支配する階層だけが幸福になることが、守護者達の任務とはしていない。国民全体の幸福が支配者（守護者たち）の任務である。

<sup>36</sup> 前掲書『国家（上）』463E（第5巻第11章、421ページ12から13行目）。

<sup>37</sup> 前掲書『国家（上）』464B（第5巻第12章、423ページ1から2行目）。

<sup>38</sup> 前掲書『国家（上）』464B（第5巻第12章、422ページ12から13行目）。

<sup>39</sup> 私的所有が禁止されているので、泥棒や窃盗や恐喝などの不正行為はこの国家では起こらないが、喧嘩や暴行や殴りなどは起こり得る。プラトンは、〈恐れ〉と〈つつしみ〉がそうさせないように目を光らせると言う。すなわち、「〈つつしみ〉のほうは、自分の親であるかもしれない相手に手出しすることを禁じ、〈恐れ〉のほうは、もし手を出せばその人のために他の人々が、あるいは息子として、あるいは兄弟として、あるいは父親として助けにかけつけるだろうと恐れることによって」と説明している（前掲書『国家（上）』465B（第5巻第12章、425ページ13から16行目））。

<sup>40</sup> プラトンの私的所有の禁止や妻女の共有に関して、アリストテレスは、「国は一つになることが或る程度以上進んでいけば、もはや国でさえないというもとなるのは明らかである。何故なら国はその本性上一種の多数であって、より以上に一つになれば、国は国たることを止めて家になるだろうし、家は人になるであろうから」とプラトンの所有論ならびに共有論に批判的である（アリストテレス著『政治学』1261a10から20（第2巻2章、68ページ16から18行目））。

<sup>41</sup> 前掲書『国家（上）』465B（第5巻第12章、426ページ5から7行目）。



## 第2節 哲学者とソフィストへの批判

プラトンは、支配者（守護者たち）の任務を国民全ての幸福（たとえば、苦楽を共有し、平和裏に生活すること）を実現することであると、その支配者（守護者）として哲学者をあてがうことを考えるが、しかし、プラトンが哲人王の支配が他の国制に優ることを立証するためには幾つかの壁（ハードル）があった。その第一の壁は、ソフィストのハードルであった。

プラトンは、哲学者を知の愛好者である<sup>42</sup>とし、あらゆるものへの愛好者と同様に、あらゆる知を愛する人であるとし、「哲学者（愛知者）もまた、知恵を欲求する者として、ある種の知恵は欲求するがある種の知恵は欲求しないと言うのではなく、どんな知恵でもすべて欲求する人である」<sup>43</sup>と哲学者を規定し、「どんな学問でも選り好みせず味わい知ろうとする者、喜んで学習に赴いて飽くことを知らない者は、これこそまさに、われわれが哲学者（愛知者）である」<sup>44</sup>と哲学者を説明し、さらに哲学者を「真実を観ることを愛する人たち」<sup>45</sup>と規定する。また、哲学者は、知を愛し、かつ「生成と消滅によって動揺することなくつねに確固としてあるところの、かの真実在を開示してくれるような学問に対して、つねに積極的に情熱をもつ」<sup>46</sup>と説明し、哲学者の自然素質の根本として、次に具体的な素質を列挙している。

プラトンは、哲学者には哲学的な素質（自然的素質）が必須であり、この自然的素質を兼ね備えていない人は、哲学者には不適であると言う。さらに、哲学者が支配者になるプラトンの論理からすると、哲学的素質のない人は支配者にも適していないことになる。哲学者の自然的素質について、第一に「虚偽を受け入れることなく、これを憎み、そして真実を愛す

<sup>42</sup> 哲学者を単に知の愛好者であると規定するときには、公演を聴講する人や勉強好きなどの好奇心のある人も知的好奇心をもつと考えられるが、そのような人達は、哲学的議論やこれに類似する議論に積極的に関心を示さない。プラトンは、「このような連中や、これに類する事柄の勉強家たちや、さらにまた、こまごまとした技芸の愛好家たちなどをすべて、哲学者であると言うことに」賛成はしていない（前掲書『国家（上）』475E（第5巻第19章、458ページ8から10行目））。

<sup>43</sup> 前掲書『国家（上）』475B（第5巻第19章、457ページ1から3行目）。

<sup>44</sup> 前掲書『国家（上）』475C（第5巻第19章、457ページ12から14行目）。

<sup>45</sup> 前掲書『国家（上）』475E（第5巻第20章、458ページ15行目）。プラトンは、他方で、見物好きの連中や技芸の愛好者たちや実践家は哲学者と見ていない。見世物好きな人達は、美しい声、美しい色、美しい形など、美しく形取られた作品に心を引かれるが、〈美〉そのものの本質を見極めて愛着を寄せることはない。プラトンは、彼らを夢見て生きる人達と言う。夢見る人は、「眠っているときであろうと起きているときであろうと、何かに似ているものを、そのままに似像であると考えずに、それが似ているところの当の実物であると思ひ違ひする」人と説明している（前掲書『国家（上）』476C（第5巻第20章、461ページ1から3行目））。プラトンは、夢見る人の精神のあり方を〈思わく〉と呼び、本性を知っている人の精神のあり方を〈知識〉であると言っている（前掲書『国家（上）』476D（第5巻第20章、461ページ12から15行目）参照）。プラトンは知識と思わくを明確に区別している。

<sup>46</sup> 前掲書『国家（下）』485B（第6巻第2章、21ページ8から10行目）。

る]<sup>47</sup>こと、これに関連して、「ほんとうに学を愛する者は、早々に幼少のころから、あらゆる真実をできるかぎり<sup>あこが</sup>憧れ求める者でなければならない]<sup>48</sup>と云う。第二に「哲学者たるべき魂は、記憶力のよい魂]<sup>49</sup>であること、第三に「生まれつき度を守り優雅さをそなえた精神」]<sup>50</sup>、第四に「ものわかりがよく、度量が大きく、優雅で」]<sup>51</sup>あることを挙げ、そして第五に、「節度ある人間であって、けっして金銭を愛し求める人間ではない」]<sup>52</sup>ことを挙げている。哲学という仕事は「正義と勇気と節制とを愛して」]<sup>53</sup>、哲学的素質をそなえた者でない限り、確実に修めることはできないとプラトンは主張する。哲学者の精神（魂）は、真実在の実相へと導かれ、真実をこそ追求める。哲学者は「一般にあると思われる雑多な個々の事物の上にとどもって、ぐずぐずしているようなことはない」]<sup>54</sup>だけでなく、真実在に触れる機能である「魂の部分—真実在と同族関係にある部分—によって、〈まさに何々であるところのもの〉と呼ばれるべき、それぞれのものの本性にしっかりと触れるまでは、ひたすらに進み、勢いを鈍らせず、恋情をやめることはない。彼は、魂のその部分によって、真の実在に接し、交わり、知性と真実とを産んだうで、知識を得て、まことの生活を生き、はぐくまれて行く」]<sup>55</sup>と説明する。プラトンは、真実在を追求する哲学者が国家の支配者に相応しいと云う。

プラトンは、船の舵取りをする人（支配者に対応する）が操舵術を身に着けている船長であって、決して水夫ではないと説明する。同様に、国家の支配者として、その能力（支配術）を備えている哲学者が相応しいと考えている<sup>56</sup>。しかし、現実のギリシヤ社会では、哲学者

<sup>47</sup> 前掲書『国家（下）』485C（第6巻第2章、22ページ8行目）。そして、プラトンは、真実を愛するのは、知恵であると言う。

<sup>48</sup> 前掲書『国家（下）』485D（第6巻第2章、23ページ4から5行目）。

<sup>49</sup> 前掲書『国家（下）』486D（第6巻第2章、26ページ15行目）。

<sup>50</sup> 前掲書『国家（下）』486DからE（第6巻第2章、27ページ8から9行目）。

<sup>51</sup> 前掲書『国家（下）』487A（第6巻第2章、28ページ3行目）。

<sup>52</sup> 前掲書『国家（下）』485E（第6巻第2章、24ページ2から3行目）。

<sup>53</sup> 前掲書『国家（下）』487A（第6巻第2章、28ページ3行目）。

<sup>54</sup> 前掲書『国家（下）』489B（第6巻第5章、37ページ7から8行目）。

<sup>55</sup> 前掲書『国家（下）』489B（第6巻第5章、37ページ9から13行目）。

<sup>56</sup> 本稿の脚注35の引用（『ゴルギアス』484Cから485D）で示したと同様の問題についてプラトンも指摘し考察している。現実の哲学者は役立たずであり、欠陥をそなえた劣悪な人であるという批判である。もしこの批判やカリクレスの言い分が正しいのであれば、確実に哲人王思想に立脚する国制（統治体制）は崩壊させられる。

プラトンは、哲学者の自然的素養が墮落し、碌でなしで役立たずにしている原因を探っている。プラトンは、そもそもその自然的素養に恵まれた人の数が少ないことを指摘するだけでなく、次に、その素養を墮落させる要因として教育について言及している。自然的素質に恵まれた魂が悪い教育に触れると、悪徳な魂になる。プラトンは、大衆あるいはソフィストによる教育を挙げている。プラトンは、『国家（下）』492B（第6巻第6章、43ページ8から12行目）において、「彼ら大衆が国民議会だとか、法廷だとか、劇場だとか、陣営だとか、あるいはその他、何らかの公に催される多数者の集会において、大勢いっしょに腰をおろし、大騒ぎをしながら、そこで言われたり行なわれたりすることを、あるいは賞讃し、あるいは非難す

は、役立たずと評され、碌でなしと蔑まされていたが、それは、哲学者に素質がないからではなく、大衆迎合し、賃銭を受け取って個人的に教育しているソフィスト（哲学誹謗者）の『知恵』<sup>57</sup>が哲学者を政治における役割を台無しにしていると怒りを込めてプラトンは主張している。プラトンは、ソフィストの『知恵』の教育について、「何が〈美〉であり〈醜〉であるか、何が〈善〉であり〈悪〉であるか、何が〈正〉であり〈不正〉であるかについて、真実には何ひとつ知りもせず」<sup>58</sup>大衆が考えたり欲したりすることを教育しているとソフィストを非難し揶揄し、大衆が「喜ぶものを『善いもの』と呼び」<sup>59</sup>、大衆が「嫌うものを『悪いもの』と呼んで、ほかにはそれらについて何ひとつ根拠をもっていない」<sup>60</sup>とソフィストの知恵について断言する。ソフィストは、大衆が誉めることが、誠に善いことであり美しいことであることのその根拠あるいは理由を検討していない。プラトンは、何故善いのか、何故真実であるのか、を追求しようとする点において、ソフィストを超えていると言える。

## 第2章 哲学の現状と哲学者あるいは支配者の育成

### 第1節 哲学の現状

プラトンは、当時のギリシヤ（アテナイ）における哲学という仕事の取扱には不満であった。その現状にあっては、哲学を手がける人達は、子供や若者になったばかりのころに哲学の最も困難な部分に近づき、その困難な論理的議論に係わる部分を修得することもなく、哲学から離れていくものであった。そうであるにもかかわらず、アテナイでは、その哲学を離れた人達が哲学を学んだ人と看做され、その後、「もし招かれてほかの人々のそういう議論の聴き手になることを承諾でもすれば、それで大したことをしたつもりになっている。哲学的

---

る—どちらの場合も、叫んだり手を叩いたりしながら、極端な仕方ですなされるその中では、個人的な教育は無力であって、若者は「群衆が美しいと主張するものをそのまま美しいと主張し、醜いと主張するものを醜いと主張するようになり、彼らが行なうとおりのことが自分の仕事とするようになり、かくて彼らと同じような人間になる」と説明する（前掲書『国家（下）』492CからD（第6巻第6章、44ページ2から4行目））。プラトンのソフィスト批判は、ソフィストの言うことを聞かない人（若者）をソフィスト達は「市民権を剥奪したり、罰金を科したり、死刑にしたりして、懲らしめている」ことに向けられるだけではなく、またソフィスト達の「ひとりひとりが教えている内容は」、上で示したような「大衆自身の集合に際して形づくられる多数者の通念以外の何ものでもなく、それが、ソフィストたちが『知恵』と称するところのものにはかならない」（前掲書『国家（下）』493A（第6巻第7章、46ページ3から6行目）参照）と指摘している。

<sup>57</sup> 前掲書『国家（下）』493AからC（第6巻第7章、46ページ5から47ページ2行目）参照。ソフィストは、「種々雑多な人々の集まりからなる群衆の気質や好みをよく心得ていることをもって、〈知恵〉である」と考えていた（前掲書『国家（下）』493D（第6巻第7章、47ページ11から12行目））。

<sup>58</sup> 前掲書『国家（下）』493BからC（第6巻第7章、46ページ16から47ページ1行目）。

<sup>59</sup> 前掲書『国家（下）』493C（第6巻第7章、47ページ3行目）。

<sup>60</sup> 前掲書『国家（下）』493C（第6巻第7章、47ページ3から4行目）。

な議論などは、片手間のこととしてなすべきだと思っているわけだ<sup>61</sup>と哲学の(アテナイの)現状にプラトンは不満であった。ゆえに、プラトンは、現状の哲学の取り扱われ方について非難<sup>62</sup>の気持ちを込めて、老年になると哲学に情熱をかたむける人は殆どいなく、多くの人達は二度と哲学に取り組む人はいないと説明する。プラトンは、苛立って、「彼らのはるかによく慣れ親しんでいるのは、むしろ、ちょうどいまのぼくの言い方のように互いに相似た言葉が並ぶよう、わざと工夫した語り方<sup>63</sup>であると、ソフィストたちの教育内容<sup>64</sup>を批判し、また「彼らは、『等しくする』とか『似させる』とかいっても、実際の人間がその言行において、徳の理想にできるかぎり等しくなり、似るようになって、同じそのような国において支配しているのを、一人にせよ多数にせよ、かつて一度もみたことがない<sup>65</sup>とそのソフィストの(哲学)教育が人々の徳を高め、理想の人に似た人々を支配する国制にする<sup>66</sup>ことがなかったことを批判していると思われる。

プラトンは、ソフィストによる、現状の若者たちに対する哲学教育に替えて、哲学的問答(対話)法(ディアレクティケー)を提供し、支配者になるために、必ず修得すべきものとして持ち出す。

<sup>61</sup> 前掲書『国家(下)』498A(第6巻第11章, 60ページ13から15行目)。

<sup>62</sup> プラトンが直接に揶揄批判している哲学者(あるいは哲学の学派)は、ゴルギアスの流れを汲むイソクラテスとその学派であったと考えられる。イソクラテス(Ἰσοκράτης)(前436年-前338年)は、プラトンの同時代人で、アテナイの富裕な家庭に生まれた。プロディコス、プロタゴラスあるいはゴルギアスなどに学んで、修辞学を修めた。彼は、法廷弁論の答弁書の書き手(ロゴグラフォス)として活躍した。彼は、前392年頃に、公開の学校を開設し、政治教育を文章修業を通して教えたと思われる(この点については、藤沢令夫氏の翻訳『パイドロス』の脚注(180ページ「イソクラテス」)を参照)。

プラトンがイソクラテス自身をどのように見ていたのかの一端は、藤沢令夫訳『パイドロス』279A(145ページ13から146ページ6行目)に「イソクラテスは、そのもって生れた素質において、リュシ阿斯流の弁論の水準をはるかに抜いてすぐれているし、その上、人がらも一段と高貴なところがあるようだ。だから、いまに年齢が進むにつれて、もし、彼が現在手がけている専門の言論そのものの領域で頭角をあらわし、かつて言論にたずさわった人たちとくらべて、大人と子供以上の差をつけたとしても、べつに驚くにはあたらないだろう」、そして、「あの男の精神には、友よ、知に対するひとつの切実な欲求が生まれつき宿っている」とイソクラテスに語らせている。多分、プラトンはイソクラテスを自身のライバルと捉えていたのであろう。

<sup>63</sup> 前掲書『国家(下)』498E(第6巻第12章, 62ページ12から14行目)。

<sup>64</sup> 多分、ソフィスト(具体的にはゴルギアスやイソクラテス)の弁論術の修辞法を批判しているのであろう。その教育で、文章の修練に熱を入れた教育であり、その一端が語呂合わせの教えであったと思われる。プラトンはこの語呂合わせに墮していた教育を批判しているのであろう。

<sup>65</sup> 前掲書『国家(下)』498Eから499A(第6巻第12章, 62ページ15から63ページ2行目)。

<sup>66</sup> プラトンは、ソフィスト(具体的にはイソクラテスが設立した学校で)の文章修業による政治教育では、抽象的な思索や細かい点の議論に力を入れたが、実践的ではないことを嘆いているのであろうか。

## 第2節 哲学者ならびに守護者あるいは支配者の育成のための教育プログラム

プラトンは、正しい教育と彼の哲学的問答法によって、支配者＝哲学者の育成プログラムを提示する。支配者（守護者）になる人たちには、私的財産所有が禁止され、かつ、妻女と子供は支配者たちの共有であると想定される。このもとで支配者（守護者たち）の育成プログラムが提示される。

下の（表-1）は、プラトンの教育課程（教育プログラム）の概要である。当時のギリシヤ（アテナイ）におけるその育成教育の現状に不満であったプラトンは、支配者あるいは哲学者に相応しい哲学の修得手順を提案している。

プラトンのその育成教育手順の特徴は、第一に、年齢段階に応じた教育（プラトンは発展段階に応じた教育プログラムを意識していたのかも知れない）、第二に、身体に配慮した教育、第三に、魂の発育の完成度に応じた教育、特に、青年期（30歳から35歳）に論理的な議論に係わる部分の知的訓練教育、第四に、体力が衰えて、政治や兵役の義務から解放されたときに、自由の身となり、片手間の慰みを除いて他の一切を投げ打って哲学に専心する<sup>67</sup>、とプラトンは現状の哲学教育とは異なった手順で哲学を修めることを説いている。次の頁の表にてプラトンのその育成プログラムを説明しよう。

### 第1項 幼児から10歳頃までの教育

この段階では、成人として身に付けている教養と生活習慣の醸成を目標にして教育がなされる。これは、身体のためになされる体育（健康管理教育）と魂（精神）の音楽・文芸による教育（教養教育）から構成される。プラトンは、音楽・文芸による教育を体育による教育よりも優先させ、そして若者たちに音楽・文芸における教育を先に始めている。

#### 1.1 文芸による教育：神々と両親への尊敬、そして勇気、

プラトンは、文芸では言葉の教育、すなわち物語を語り聞かせることよつて教養を魂に埋め込むことをこの教育として取り上げる。言葉による教育には、作り事という言葉と真実の言葉があるとし、前者の作り事という言葉の教育を始めに行う<sup>68</sup>ことを主張する。物語の語りの教育ではプラトンは、第一に、その物語の作り手が善き作り手であるかどうかを監督することを主張している。何故物語の作者を選ぶ必要があるのだろうか。それは、すなわち、物語で語られる人びとや神々の行いなどが子供の魂を造形するからである。

---

<sup>67</sup> 前掲書『国家（下）』497BからC（第6巻第11章、61ページ3から11行目）参照。

<sup>68</sup> 前掲書『国家（上）』376Eから377A（第2巻第17章、171ページ1から5行目）参照。後者の真実の言葉による教育は、哲学的問答法で取り扱われる。



(表-1) プラトンの哲学考察の手順表

区分	教養・教育	具体的な教育内容
幼児から10歳頃	教養教育ならびに体育教育 (健康管理教育)	(1) 音楽・文芸による教育 (教養教育) ならびに (2) 体育 (健康管理) 教育
10歳頃から20歳頃	学術教育	以下の学術教育は、哲学的素質 (哲学者としての自然的素質) のある者に与えられる ; (1) 数論・計算術 (2) 幾何学 および (3) 天文学 (4) 学術教育を修得した者は戦争体験を経験する (この期間は2年から3年間)
20歳頃から30歳	研修教育 (予選された者の教育)	学術教育を修めた者には、哲学的問答法を修めるに耐えうる素質があると判定する。その上で、哲学的問答法に適った素質を持っているか否かを試験する期間。
30歳から35歳頃	哲学的問答法の教育 (言論修練教育)	学術研究の総合化から問答法の修得 : 正義のイデア、美のイデアを超越する善のイデア (実相) の把握
35歳頃から50歳頃	体験教育	戦争に関する事柄の統率やその他の役職などの実務・実践
50歳以後	支配者として活躍 あるいは哲学に専念	善の模範を使い、国家と国民と自身との統治の仕事に就くか、あるいは哲学に専念

プラトンは、大きな物語を選ぶことを勧めている。大きな物語の中には小さな物語を見ることができからである。プラトンは、具体的には、ヘシオドスやホメロス<sup>69</sup>の物語やその他の詩人たちが語った物語<sup>70</sup>を推している。その物語は、「保母や母親たちを説得して、子供

<sup>69</sup> ホメロス (Ὅμηρος, Hómēros) (前8世紀末) は吟遊詩人であり、『イリアス』と『オデュッセイア』の英雄叙事詩の語り手として知られている。プラトンは、「この詩人こそはギリシアを教育してきたのであって、人生の諸事の運営や教育のためには、彼を取り上げて学び、この詩人に従って自分の全生活をとのえて生きなければならない」と語らせている (前掲書『国家 (下)』606E (第10巻第7章, 375ページ10から12行目))。多分、当時のギリシヤでは、ホメロスの英雄叙事詩が教育現場で広く使用されていたのであろう。

<sup>70</sup> 前掲書『国家 (上)』377D (第2巻第17章, 173ページ8から9行目) に、プラトンは「ヘシオドスとホメロスがわれわれに語った物語、そしてその他の詩人たちが語った物語のことだ」と語っている。プラトンは、ホメロスは、詩人の中の詩人であり、悲劇作家の第一人者であることは認めつつも、「ただし、必ず心得ておかなければならないのは、詩の作品としては、神々への頌歌とすぐれた人々への讃歌だけにしか、国のなかへ受け入れてはならない」と語らせる (前掲書『国家 (下)』607A (第10巻第7章, 375ページ15から376ページ1行目))。プラトンは、神々が人を騙し、変身し、そして嘆き悲しむこと、英雄が物欲に陥る叙事詩や叙情詩を若者たちに語ることを非難する。「快く装われた詩神 (ムッサ) をうけいれるならば、君の国には、法と、つねに最善であると公に認められた道理とに代って、快樂と苦痛が王として君臨することになる」と語らせる (前掲書『国家 (下)』607A (第10巻第7章, 376ページ2から3行目))。プラトンは、快樂と苦痛が若者たちに感情豊かな教養を身に付けさせ、素質を与えることはないとしている。

たちにそういう物語をこそ話して聞かせるようにさせる』<sup>71</sup>と主張している。

### （1）神々と両親への尊敬

ヘシオドスやホメロスたちは「人間たちのために作りごとの物語を組み立てては語っている」<sup>72</sup>と言い、彼らの物語において「よからぬ仕方で作りがとがなされる」<sup>73</sup>部分を子供たちに語り聞かせることをプラトンは禁止している。プラトンは、「神々や英雄たちをいかなるものであるかについて、言葉によって劣悪な似すがたを描く」<sup>74</sup>ことを善からぬこととし、具体的にヘシオドスとホメロスの物語のどの箇所がよくないかを指摘している。ヘシオドスの『神統記』（155から160行、26ページ3から6行目）のウラノスの仕事<sup>75</sup>としてヘシオドスが語っていること、クロノスがウラノスにどのように復讐<sup>76</sup>したかを語ること、また、クロノスがやったこと<sup>77</sup>や、その息子から受けたこと<sup>78</sup>についても、子供に聞かせるべきではないこととしてプラトンは挙げている。プラトンがヘシオドスに語ることを禁止するのはなぜであろうか。若くて柔らかい子供達に対して、物語で魂（精神）に原型を捺<sup>お</sup>そうと期待しているときに、酷い話はすべきではないからとプラトンは説明する。「たとえほんとうのことであったとしても、思慮の定まらぬ若い人たちに向けて、そう軽々しく語るべきではない」<sup>79</sup>

ホメロスの英雄叙事詩の解説としては、高津春繁著『ホメロスの英雄叙事詩』を参照。

<sup>71</sup> 前掲書『国家（上）』377C（第2巻第17章、172ページ11から12行目）。

<sup>72</sup> 前掲書『国家（上）』377C（第2巻第17章、173ページ9から10行目）。

<sup>73</sup> 前掲書『国家（上）』377D（第2巻第17章、173ページ14から15行目）。

<sup>74</sup> 前掲書『国家（上）』377E（第2巻第17章、174ページ2から3行目）。

<sup>75</sup> ヘシオドス著（廣川洋一訳）『神統記』（155から157行）（26ページ3から6行目）には、ヘシオドスがウラノスの仕事に当たる語りは「父親<sup>ウラノス</sup>は、その子供が生まれる片端から みな大地の奥処<sup>おくが</sup>に隠してしまい 光（の世界）のなかに上がってこっせなかった」とある。

<sup>76</sup> 上掲書『神統記』（175から180行）（28ページ9から29ページ3行目）には、ウラノスが大地（ガイア）の傍らに身を伸ばし、情愛を求めている折りに、「息子は 待ち伏せの場から左手<sup>ひだりて</sup>をのばし 右手<sup>みぎて</sup>にはするどい歯のついた大きな鎌を執って すばやくわが父の陰部を刈り取り 背後に投げつければ それは後ろへとんでいった」とある。

<sup>77</sup> 前掲書『神統記』（450から465行）（59ページ8から61ページ8）において、クロノスは、自分自身以外のウラノス裔の神々の誰かが王者の特権を獲ることがないようにと図って、レイアの生んだ子供達を呑み込むことがヘシオドスによって語られている。ヘシオドスには「大なるクロノスは これらの子供たちを 呑みこんでしまったのだ その子供たちが 聖い母胎から膝へ生まれ落ちる片端から。己れ以外の栄えある天の裔の神々のたれかが 不死の神々の間で王者の特権を 獲ることがないようにと図って。」とある。ここで、子供たちとは、女神のなかの女神で英雄イアシオンと契ったデメテル、黄金の沓をはくヘラ、地下の館に住み、冷酷な心をもつ強いハデス、轟音<sup>とつおん</sup>とどろかし大地を震わすポセイドン、賢いゼウスである。

<sup>78</sup> 王クロノスがレイアの産み落とすゼウスを呑み込もうとして、ガイアが与える大石をその（ゼウスの）身代わりとして呑み込む。そして、「ひと歳<sup>とせ</sup>が巡ぐると 大地の思慮深い示唆に 欺かれて悪知恵長けた 大なるクロノスは 己が子供を吐き出した 彼の息子の策略と力に 打ち負かされて。」とある（前掲書『神統記』（485から495行）（64ページ2から65ページ4行目）参照）。

と言って、プラトンは、最も罪深い自分の子を殺害する仕業を犯すこと、あるいは父親に復讐するためにいかなることもしてもかまない<sup>80</sup>と、若く思慮も定まらない子供が勘違いすることを気遣って語ることを禁止している。「若い者にこんなことを語り聞かせるべきでもない」<sup>81</sup>とプラトンは主張する。

また、プラトンは、神々が神々と戦争したり、策略をめぐらし合ったり、闘い合ったりする物語も語り聞かせることを禁止している<sup>82</sup>。何故プラトンは禁止させようとするのか。それは、軽々しく憎しみ争い合うことが醜いことを考えさせ、ありとあらゆる敵対行為<sup>83</sup>も神意に反するからであるからである。このような物語において「たとえそこに隠された裏の意味があろうとなかろうと、けっしてわれわれの国に受け入れてはならない」<sup>84</sup>とプラトンは主張する。若い人の心に取り入れられたものは消し去るのは難しいので、若い人（少年）が「最初に聞く物語としては、徳をめぐしてできるだけ立派につくられた物語を聞かせるように、万全の配慮をなすべきだろう」<sup>85</sup>とプラトンは自身の見解を纏めている。

第二に、神々の性格を如何に組み立てるかについての指示をだすのは国家作成者の問題である。作家（詩人）は神の性格がどのようなものであるか知り、その上で、どのように物語を作るべきかを国家の建設者として規制を設ける。神は、真に善き存在であり、そして善き存在は有

<sup>79</sup> 前掲書『国家（上）』378A（第2巻第17章、174ページ12から14行目）。

<sup>80</sup> 前掲書『国家（上）』378B（第2巻第17章、175ページ7から8行目）において、神々に夜この殺害や子による父親への復讐の仕業から、「まさに神々のうちの第一にして最も偉大な方々と同じことをしているまでのことなのだ」と、若者に言わせることになることがないようにすることをプラトンは強く望んでいる。

<sup>81</sup> 前掲書『国家（上）』377B（第2巻第17章、175ページ5行目）。

<sup>82</sup> 前掲書『国家（上）』378C（第2巻第17章、175ページ11から15行目）参照。プラトンは、ホメロスの神々の戦いの語りの例として、松平千秋訳『イリアス（下）』第20歌（54-74）（254ページ1から6行目）に「神ポセイダオンに対しては、アポロン・ポイボスが羽根のある矢を持って当たり、エニユアリオス（アレス）には眼光輝くアテネが、ヘレには遠矢の神（アポロン）の姉（妹）、黄金の矢を持ち声高に獲物を追って矢の雨を降らすアルミテスが、レトには恵みを授ける逞しいヘルメスが、さらにヘパイストスには、神々はクサントス、人間はスカマンドロスと呼ぶ、深く渦巻く大河が立ち向かった」とある。地上では、アカイア勢とトロイア勢が対峙し、ポセイドン（ポセイダオン）・アテネ・ヘレ・レト・ヘパイストスの神々に対して、アポロン・アレス・アルテミス・ヘルメス・クサントス（スカマンドロス）の神々が対峙し、戦っていた。また前掲書『イリアス（下）』第21歌（383-399）（294ページ5から7行目）に、「この時、神々はもはやいつまでも離れたままではおらず、すなわち楯を裂くアレスが戦いの火口を切って、真っ先に青銅の槍をひっさげてアテナイエに躍りかかり、悪罵をはなっている」とある。同書第21歌（423-433）（295ページ16から296ページ2行目）には、「アテナイエは喜び勇んで追いかけて、追いついて逞しい手でアプロディテの胸の辺りを一撃すれば、相手はその場で膝を元気も崩おれ、二人ともものみなを養う大地の上に倒れて横たわった。アテネは勝利に誇り、翼ある言葉をかけていう」とある。この二人ともとあるが、アプロディテとアレスの二人である。

<sup>83</sup> ありとあらゆる闘い（戦い）には、神々と巨人の戦いならびに神々と英雄の戦いを含めている（前掲書『国家（上）』378C（第2巻第17章、175ページ15から176ページ1行目））参照。

<sup>84</sup> 前掲書『国家（上）』378D（第2巻第17章、176ページ10から11行目）。

<sup>85</sup> 前掲書『国家（上）』378E（第2巻第17章、176ページ15から16行目）。

益である。物語を組み立てる作家は、神を善き者・有益な者として組み立てるべきであるとプラトンは主張する。プラトンは、「善いことについては、神以外の何者をも原因とすべきではないけれども、悪いことについては、その原因を他に求めるべきであって、神を原因とみなしてはならない」<sup>86</sup>と主張する。神々に関する第一の規範は、

「神はあらゆることの原因なのではなく、ただ善いことの原因である」<sup>87</sup>。

語り手も物語の作成者（作家、詩人）も、この規範に従って、物語を作らなければならない。次に、プラトンの神々に関する第二の規範は、

「神とは、全き意味において、行為においても言葉においても単一にして真実なものであり、みずから実際に変身することもなければ、また一現<sup>うつ</sup>においても夢においても、幻影によっても言葉によっても兆を送ることによっても—他の者を欺くということはない」<sup>88</sup>。

この規範について説明しよう。神は完全（すぐれたもので美しいもの）であり、最善の状態にあるので、他のものによって変化させられることはない。また、最善の状態にあるので、それ以上に善い状態は存在しない。神は自身より劣った不完全なものに自身を変化させるであろうか。それはあり得ない。ゆえに、神は「自分を変様させようと望むことも、ありえないことになる」<sup>89</sup>、むしろ、「どの神も可能なかぎり最も美しく最もすぐれているからには、つねに単一のあり方を保って自分自身の姿のうちにとどまる」<sup>90</sup>。プラトンは、ホメロスの『オデュッセイア（下）』第17歌（477-478）（142ページ6から8行目）において「実際、神々は遠方からの異国人に身を変え、いかなる姿にもなって、人間の無法な振舞い、正義の行いに目を光らせつつ、町々を巡らせるものなのだ」と語ることは反対である<sup>91</sup>。また、前掲書『オデュッセイア（上）』第4歌（382-424）（103ページ5から105ページ2行目）には、真実を語る海の翁プロテウスというアイギュプトスの神が「さまざまに身を変えて逃れようとするであろう—地上に棲むあらゆる種類の生き物から、水にも燃えさかる火にも変身するであろう。しかし、そなたらはたじろぐことなくしっかりと抑えつけ、さらに強く締め上げてやりなさい」とあるが、プラトンはこの神が変身することは偽りであると主張する。いかなる作家（詩人）も神が姿を変えて現れると我々に語らせてはならないとプラトンは主張する。そのように偽ってはならず、また母親や乳母や老婆も神々がいろいろと多くの異人に変身して徘徊するといったような間違った物語を語り聞かせ、「子供たちをこわがらせてはなら

<sup>86</sup> 前掲書『国家（上）』379C（第2巻第18章、179ページ12から14行目）。

<sup>87</sup> 前掲書『国家（上）』380C（第2巻第19章、182ページ9から10行目）。

<sup>88</sup> 前掲書『国家（上）』382E（第2巻第21章、190ページ8から11行目）。

<sup>89</sup> 前掲書『国家（上）』381C（第2巻第20章、185ページ13から14行目）。

<sup>90</sup> 前掲書『国家（上）』381C（第2巻第19章、185ページ14から15行目）。

<sup>91</sup> プラトンがこの箇所を語り聞かせるのに反対するのは、神が遠方からの異国人に変身するとあるからである。神は単一であるとプラトンは理解している。

ない]<sup>92</sup>とプラトンは主張する。

神は偽らない、また偽る必要もない、そして偽ることを憎むとプラトンは主張する。つまり、「真実に関して魂において偽り、偽りの状態にあり、かくて無知であること、そして魂の内に偽りをもちまた所有していること—これをどんな者でもいちばん受け入れたがらないし、そのような場合の偽りを何よりも憎む」<sup>93</sup>のが神であるとプラトンは主張する。『イリアス(上)』第2歌(1-47)(43ページ1から45ページ5行目)において、神ゼウスが、惑わしの夢に、アカイア勢の統帥であったアガメムノンにトロイア(トロイエ)を陥落させる軍勢を準備させる命を託すが、プラトンは、彼の第二の規範より、神が偽ることはないのであって、この箇所に関する限りでは、ホメロスへの賞讃を拒否している<sup>94</sup>。

プラトンは、上の第一の規範と第二の規範を通して、将来「神々と両親を敬い、またお互の友愛を軽視しないような人間となるべき人々が、早い子供のときから聞くべき事柄であり、他方また聞いてはならない事柄」<sup>95</sup>を神の事柄として主張している。

(2) 死の恐怖を抱かせない物語を聞かせること：勇気の礼讃と恐怖や嘆き(悲嘆)の禁止

プラトンは、物語の語り聞かせにおいて、若い人に死を恐れることを語り聞かせることによって教えることには反対して、そのような物語を聞かせることを禁止している。

この観点から、プラトンは、第一に(第一の要請)、ハデス(冥界)でのことを悪く言わないで、むしろ賞讃することを要請する。彼が生活していたアテナイの現状では、ホメロスなどの物語の語りでは若い人に聞かせているものには、禁止すべきものがあり、そのような物語を若い人に聞かせるべきでないと主張する。誰であれ心に死の恐怖を抱く者は「そもそも勇気ある人間に」なれない<sup>96</sup>とプラトンは考えている。プラトンが削除(抹殺)することを主張している幾つかの物語(詩句)を示す。『オデュッセイア(上)』第11歌(487-503)(300ページ5から7行目)に「世を去った死人全員の王となって君臨するよりも、むしろ地上に在って、どこかの、土地の割当ても受けられず、資産も乏しい男にでも働かれて仕えたい気持だ」とある。これは、アキレウスの亡霊が冥府でのことを思って嘆く一節であるが、プラトンは冥府でのことを悪く語ることを禁止している<sup>97</sup>。また、『イリアス(下)』第23歌(99-107)(339ページ13から14行目)に「冥王の館にもなにか魂や幻のようなものがあるのだ

<sup>92</sup> 前掲書『国家(上)』381E(第2巻第20章, 186ページ12から13行目)。

<sup>93</sup> 前掲書『国家(上)』382B(第2巻第21章, 187ページ16から188ページ2行目)。

<sup>94</sup> 前掲書『国家(上)』383A(第2巻第21章, 191ページ3から4行目)参照。

<sup>95</sup> 前掲書『国家(上)』386A(第3巻第1章, 194ページ2から3行目)。

<sup>96</sup> 前掲書『国家(上)』386B(第3巻第1章, 194ページ9から10行目)参照。

<sup>97</sup> 冥府(ハデス)を悪く語ることは、若者達に死を恐れることになるからである。



な、だが生气はまるでない」とある。このようにアキレウスの朋友パトロクロスの亡霊が彼の枕元で悲嘆に暮れて立っていたが、プラトンは冥界を卑下して語ることに反対する。また『イリアス（下）』第16歌（885-861）（152ページ11から12行目）に「死の終わりが彼を包み、その魂は四肢を抜け出し、己れの運命を歎きつつ、雄々しさ、若さを後に残して、冥王の館さして飛び去った」とある。これはトロイアの戦士ヘクトルとの戦いに敗れたパトロクロスが死んで冥界に入る詩句であるが、死を嘆きながら冥界に入ることにプラトンは異議を唱える。その他にもホメロスの物語から冥府に関する削除すべき詩句を取り上げ、そして「ホメロスその他の作家（詩人）たちに対して、これらの詩句、およびすべてこれに類する詩句をわれわれが削除しても、腹を立てないようにお願いしよう」<sup>98</sup>とプラトンは主張する。何故そのような詩句を削除することを主張するのであろうか。プラトンは「子供でも成人でも、死より隷属のほうを深く恐れる自由な人間とならなければならない人々は、こうした詩句をきくべきではないから」<sup>99</sup>と説明する。

上の第一の要請に関連して、プラトンはその系となる事項を示している。冥界に関する「恐ろしく怖い名前は、すべて斥けられなければならない」<sup>100</sup>と要請する。たとえば、『コキュトス』（歎きの河）とか、『ステュクス』（憎悪の河）とか、『地下の幽鬼』とか、『死骸』とか、その他すべてこの類いの名前で聞くとぞっとするものは斥ける<sup>101</sup>。また、その第二の系として、プラトンは、神々が悲嘆している詩句ならびに名のある人物が悲嘆する姿を語り聞かせる詩句を削除することを要請している。何故であろうか。それは、「国土を守護する任に当てられるために育てているわれわれが言っている人たちに、そうした劣悪な者たちとそっくりのこゝろをすることを嫌悪するようになってもらうため」<sup>102</sup>であるとプラトンは言う。たとえば、『イリアス（下）』第18歌（35-64）（197ページ9から11行目）に「ああ憐れなわたし、非の打ちようもなく、そして強く、勇士らの中でも抜群の息子を産んでからのわたしは、立派な子を産んだのが却って仇になってしまった」とある。これは、アキレウスの母神であるテイスの悲しみの詩句であるが、プラトンは神々の悲嘆の詩句を削除することを要請している。また同書『イリアス（下）』第22歌（131-176）（314ページ10から11行目）に「わたしの可愛がっている男が、城壁のまわりを追い廻されている姿が見える。ヘクトルが憐れでならない」とある。トロイアの戦士ヘクトルが駿足のアキレウスに追われ討たれる箇所であるが、神と人間の父神が歎き悲しむ詩句を削除することをプラトンは要請する。また同書『イ

<sup>98</sup> 前掲書『国家（上）』387B（第3巻第1章、196ページ15から16行目）。

<sup>99</sup> 前掲書『国家（上）』387B（第3巻第1章、197ページ3から4行目）。

<sup>100</sup> 前掲書『国家（上）』387C（第3巻第2章、197ページ7から8行目）。

<sup>101</sup> 前掲書『国家（上）』387C（第3巻第2章、197ページ8から10行目）参照。

<sup>102</sup> 前掲書『国家（上）』388A（第3巻第2章、199ページ13から14行目）。

リアス(下)』第24歌(1-21)(379ページ6から8行目)に「さまざまに思い起こしながら、ある時は脇腹を下に、ある時は仰向けに、またある時は俯伏しては、大粒の涙をこぼす。さてはまた、すっと起き上がると、浜の渚を気の抜けたようにさまよい歩く」とある。これは、朋友であり戦友のパトロクロスの死に接し、嘆いているアキレウスの振る舞いの詩句であるが、プラトンはこれも削除することを要請する。プラトンは、この語りを聞く若い人たちが、「何ら恥じるどころなく、こらえ性もなく、些細なことが身に起こっただけで、大げさに悲しみと嘆きの歌をうたうことになる」<sup>103</sup> ことを回避することを望んでいる。

### (3) 激しい笑いの抑制, 偽りの禁止, 節制と克己心の奨励, 金銭欲・物欲の抑制, そして敬虔

#### 1) 激しい笑いの抑制

プラトンは、神々や名のある人たちが、過度に激しく笑うことを詩句にし語り聞かせることも控えることを要請している。これが、物語の組み立て者にもとめる第二の要請である。というのは、「むやみに笑いたがる人間であってもならない」<sup>104</sup> からである。この要請は、前の要請とは逆の内容になっている。第一の要請とその系では恐れることを禁止したが、この要請では、笑うことを奨励する物語は無条件に受け入れられることができないと考えて、プラトンは無闇に笑うことも控えることを要請している。

#### 2) 偽りの禁止

神々が偽りに関係していないことは既に述べたが、プラトンは、人間が偽りを言うことが許されるかも知れないが、それは、「国の支配者たちだけが、国民なり敵たちのために、それが国家に有益である場合、偽りをいうべきであろう」<sup>105</sup> とプラトンは限定する。プラトンは、国家の支配者が、医者、大工、予言者あるいは専門の職人のうちの誰かが偽りを言っているのを捕えるならば、「国家という、いわばひとつの船を転覆させ滅亡させるような習わしを導き入れる者とみなして、その者を懲らしめることだろう」<sup>106</sup> と言う。プラトンは、国家にあっては真実を大切にすることを主張している。

#### 3) 節制あるいは克己心の奨励

節制あるいは克己心を国家の人々の習慣として求めているプラトンは、物語においては、

<sup>103</sup> 前掲書『国家(上)』388D(第3巻第3章, 202ページ1から2行目)。

<sup>104</sup> 前掲書『国家(上)』388E(第3巻第3章, 202ページ7行目)。

<sup>105</sup> 前掲書『国家(上)』388BからC(第3巻第3章, 203ページ12から13行目)。

<sup>106</sup> 前掲書『国家(上)』389D(第3巻第3章, 204ページ9から10行目)。

節制を育成する詩句を組み立て、それを若い人々に語り聞かせることを勧めている。プラトンは、節制とは「支配者たちに対しては従順であり、そしてみずからは、飲食や愛欲などの快楽に対する支配者であるということ」<sup>107</sup>と言う。

節制に関する幾つかの例を挙げる。『イリアス（上）』第4歌（411-421）（130ページ16行目）に、「戦友よ、おぬしは何もいわずおとなしく控えて、わたしのいう通りにしてくれ」とある。これは、アガ멤ノン王の下で全軍を指揮するディオメデスがアガ멤ノン王に応酬する彼の戦友ステネロスを諫めて語った詩句であるが、プラトンは、ディオメデスの語りを節制の観点から讚美している。また同書『イリアス（上）』第4歌（422-445）（131ページ13から15行目）に「これほどの大軍勢、しかも胸には物言う力を持ちながら、隊長を恐れて一言も発せず、ただ肅々として随うとは、信じがたいほど」とある。これはギリシヤ全軍の戦列の戦場への進軍の情景であるが、プラトンはこれを同様に讚美している。しかし、アキレウスがアガ멤ノン王に向かって「酔いどれめ、面の皮の厚さは犬に劣らぬが、<sup>きも</sup>肝の太さは鹿なみのお人と」<sup>108</sup>の詩句についてはプラトンは善くないと評価している。アガ멤ノン王は支配者であり、アキレウスは彼に仕える身分であることから、この詩句を善くないと言う。

プラトンは、忍耐強さを克己心に含めている。忍耐強さは、若い人の克己心を養うことは確かであろう。プラトンは、前掲書『オデュッセイア（下）』第20歌（1-12）（207ページ11から12行目）に「堪え忍べ、わが心よ。お前は以前これに勝る無残な仕打ちにも辛抱したではないか、あの手に負えぬ凶暴なキュクロプスめが、勇猛な部下たちを<sup>くら</sup>啖った時のことだ」とある。プラトンは、『イリアス（下）』第14歌（292-351）（64ページ10から67ページ11行目）において、思慮深い父神ゼウスが女神ヘレの姿を見て直ぐに愛欲の情念に陥り、われを忘れ正気を失い、「二人が両親の目を盗んで1つ床に入り、始めて抱き合ったその時のように」欲望にとらわれて、「さあ、われわれはここで臥せって愛の喜びを味おうではないか。相手が女神であれ、人間の女あれ、<sup>いと</sup>愛しく思う心が胸に絡みついて、これほどまでどうにもならぬ気持ちにさせられたことはかつてなかった」というゼウスの言行から、克己心を養うことができるであろうかと問う。この詩句は愛欲をかきたてるが、克己心を養うことはないであろう。プラトンは、ゼウスとヘラの愛欲の情念の関する詩句は聞くに堪えないと評価する。

#### 4) 深い金銭欲・物欲の抑制

プラトンは、欲望に関しては、特に金銭欲に言及し、「われわれの人物たちが<sup>わいろ</sup>賄賂を好んだ

<sup>107</sup> 前掲書『国家（上）』389E（第3巻第3章、205ページ1から2行目）。

<sup>108</sup> 前掲書『イリアス（上）』第1歌（223-244）（22ページ2行目）。

り金銭欲が深かったりするのを、許してはならない<sup>109</sup>と主張する。プラトンは、『イリアス(上)』第9歌(496-523)(289ページ7から13行目)に、アトレウスの子(アガメムノン)が怒るだけで何の贈り物をしないのであれば、「わたしもあなたに、怒りを忘れて」、「彼等を救うべく戦ってくれと頼みはすまい」とあり、しかし「現に彼は即刻莫大な贈物をくれるといのであるし、今後それに加える品々についても約束し、名立たる人々を遣わした、とある。これはアキレウスの介添者であるポイニクスのアキレウスへの進言である。プラトンは、この詩句を若い人達に聞かせることには反対である<sup>110</sup>。また同書『イリアス(下)』第24歌(507-595)(403ページ5から407ページ11行目)に、息子ヘクトルの遺体を引取にアキレウスの屋敷に姿を現したプリアモスが「彼の身柄をあなたから譲り受けたく、莫大な身の代を持参しております」、「われらが持参した莫大な身の代はどうか御受納ください」と言っており、プリアモスはアキレウスの憐れみにすぎると、これに対し、アキレウスは悲しみの声を上げ、戦友パトロクロスの霊に向かって「わたしが勇将ヘクトルの遺体を彼の父親に引き渡したことを知っても、腹をたててくれるなよ、見苦しからぬ身の代を払って来たのだから」と誓って、遺体をプリアモスに引き渡した、とある。プラトンはアキレウスをこれほど「物欲がつよい人だということ、われわれは正当なことだと考えないだろう」<sup>111</sup>と解釈している。プラトンは、この詩句は正しくはないと判断している。プラトンは、アキレウスは女神テティスを母親とする半神であることから、アキレウスが物欲で遺体を引き渡すと語るのは、「事実としても認められないだろう」と言い、さらにアキレウスについて「そもそもそれらのことをアキレウスについて主張するということ、また他の人々がそう語るのを信じることは、敬虔なことでもない」<sup>112</sup>とホメロスに厳しい姿勢<sup>113</sup>をとっている。アキレウスは女神の子であ

<sup>109</sup> 前掲書『国家(上)』390D(第3巻第4章, 207ページ14から15行目)。これに関連して、古い諺「<sup>しんもつ</sup>運物は神々を説得し、畏るべき生き立ちを説得する」を引いている(同第3巻第4章, 208ページ2行目)。このような詩句は若い人々に語り聞かせるべきではないとプラトンは言う。

<sup>110</sup> プラトンは、ポイニクスの物欲にアキレウスが動かされるかもしれないと思わせる詩句に反対している。

<sup>111</sup> 前掲書『国家(上)』391A(第3巻第4章, 208ページ7から8行目)。

<sup>112</sup> 前掲書『国家(上)』391A(第3巻第4章, 208ページ13から14行目)。

<sup>113</sup> またプラトンは、憤慨したアキレウスがアポロンに向かって、「わたしを騙されましたな、遠矢の神よ、あなたはどの神よりも残忍なお方だ」、そして「わたしにその力さえあったら、仕返ししたいものだが」(前掲書『イリアス(下)』第22歌(14-24)(307ページ13から308ページ3行目))とホメロスが言ったとしているが、それは真実ではないと主張している。また、河神スペルケオスに捧げることにしていた黄金色の髪を切り取って、その河神ではなく、「わたしは懐かしい故国へは帰れぬのであるから、髪は勇士パトロクロスに持たしてやることにしよう」とホメロスは言っている(前掲書『イリアス(下)』第23歌(138-151)(341ページ13から14行目))が、これも真実ではないであろうとプラトンは主張する。また、同書『イリアス(下)』第24歌(1-21)(379ページ9から12行目)に、アキレウスが「ヘクトルを引き摺るべく車の後ろに結びつけ、今は亡きノイティオスの息子の墓のまわりを、三たび引き摺ってから、陣屋へ帰っては休むが、ヘクトルの遺体は砂塵の中に俯伏して横たわるのを、そのままにしておく」とあるが、プラトンはこ

り、最も思慮節制に富みかつゼウスの孫であるペレウスを父にもちながら、またこの上なく賢いケイロンに育てられているアキレウスが、「物欲に伴われた自由人らしからぬ卑しさと、他方では神々と人間を見くだす傲慢さという、二つの相反する病いを自分の内にもっていた」<sup>114</sup>ことをプラトンは信じてはいない。その上で、「われわれが育成している人物たちが、こんなふう信じるのを許しもしないであろう」<sup>115</sup>と言う。

#### 5) 敬虔

プラトンの考えでは、神々は善であるから、神々は悪の原因ではない。このことから、神々は不敬な所業をなすことはない。プラトンは、作家（詩人）たちに「神々の子はそうした所業をしなかったと言わせるか、あるいは、そういう所業をしたこの者たちは神々の子ではないと言わせるようにして、その両方ともを肯定的に語らせないようにしよう」<sup>116</sup>と要請する。またプラトンは、「神々が悪いものを産むことを」ならびに「半神の英雄たちが人間より何らすぐれてはいないというようなことを」、「われわれの若者たちに信じさせよ」と企てるのも許さないようにしよう<sup>117</sup>と要請している。神々や半神が不敬な所業をしたと信じるならば、「自分自身の悪行に対して、どうしても寛容にならざるをえないであろう」から、プラトンは、上の二つ要請を作家（詩人）に強制しているのである。

#### (4) 語り方と語り手

##### 1) 二つの叙述方法：単純叙述と真似による叙述

プラトンは、物語の内容を語ることを、過去・現在・未来の出来事の叙述であって、その出来事を、その「作者自身の言葉で」語るか、あるいは、あたかも作者が作中の人物であるかのように語るかの二通りの語りがあると言う。前者の語りを「単純な叙述」と呼び、後者の語りを「〈真似〉を通じて行われる叙述」<sup>118</sup>と呼んでいる。プラトンは、この二つの語りを説明する例として『イリアス（上）』第1歌（8-21）（11ページ6から12ページ2行目）には、祭司クリュセスが自分の娘の解放を王アガムノンに懇願するが、アガムノンが腹を立て、

---

の話しも真実ではないと主張する。また、アキレウスがトロイアの12人の優れた息子を切って獣と一緒に火の餌食にした（同書第23歌（161-183）（342ページ11から343ページ2行目））とホメロスは言っているが、プラトンはこれも真実ではないと主張する。

<sup>114</sup> 前掲書『国家（上）』391C（第3巻第4章、209ページ12から14行目）。

<sup>115</sup> 前掲書『国家（上）』391C（第3巻第4章、209ページ9行目）。

<sup>116</sup> 前掲書『国家（上）』391D（第3巻第5章、210ページ6から8行目）。

<sup>117</sup> 前掲書『国家（上）』391D（第3巻第5章、210ページ9から11行目）。

<sup>118</sup> 前掲書『国家（上）』392D（第3巻第6章、214ページ9から10行目）参照。プラトンは、単純な叙述と真似による叙述の両方を用いた語りもあると言う。



クリュセスの願いを却下するので、彼がアカイア勢に呪いをかけることが叙述されているが、この第1歌は、ホメロス自身の言葉で語っている部分と、ホメロスが祭司クリュセスになりきって語る部分から組み立てられている。ホメロス自身の言葉で語っている部分が「単純な叙述」であり、ホメロスが祭司になりきって語る部分が「〈真似〉による叙述」である<sup>119</sup>。物語や創作詩のなかで、あるものは、全体が〈真似〉の方法で組み立てられているのが「悲劇や喜劇がこれにあたる」が、あるものは「作者自身の報告によるもの<sup>120</sup>」であり、そして両方によるもの<sup>121</sup>がある。これらはすべて〈真似〉による叙述に含まれる。

語り方を真似の観点から類型化すると、3通りの類型化がある。第一に、一切〈真似〉による語りはさせない。第二に、あるものは〈真似〉は許されるが、他のあるものは〈真似〉による語り許されない。第三に、〈真似〉がすべての語り許される。プラトンは、守護者になる人々に物語を語り聞かせるに相応しい類型を考察する。

## 2) 語り手：二つの類型

国の守護者たちになる人々に創作詩や物語を語る人の二つの類型をプラトンは提案する。語り手の性格によって語りを二つに分けて、プラトンは、第一種<sup>122</sup>として、生まれが立派で優れた人間が語り手である場合、第二種<sup>123</sup>として、つまらぬ人間が語り手である場合の二通りを挙げる。前者の語りについて説明する。生まれが立派で優れた人が何かを語るときに、物語中の優れた人物の言葉や行為に突き当たると、彼自身はその人物になったつもりで語ったり報告したりしたい気持ちになり、そのような真似をすることを恥じないだろう<sup>124</sup>。他方、物語の中の優れた人が病いや恋や酩酊などにつまづいているのを真似することには積極的にならず、その機会を少なくする<sup>125</sup>と説明し、自分自身に似つかわしくない人間が登場する

<sup>119</sup> プラトンは、ホメロスの作品ぜんたについても、「単純な叙述」と「〈真似〉による叙述」によって組み立てられている言う。「このほか、イリオンのできごと、イタケおよび『オデュッセイア』全体における出来事についても、すべての叙述をほぼこのようなやり方で行なっている」(前掲書『国家(上)』393B(第3巻第6章, 215ページ13から15行目))とプラトンは言う。

<sup>120</sup> プラトンは、この例としてディテュランボスという詩の形式を上げている(前掲書『国家(上)』394C(第3巻第7章, 219ページ5行目))。この詩形式の作家の一人がピンダロスである。

<sup>121</sup> プラトンは、両方のものとして叙事詩の創作を上げている。

<sup>122</sup> プラトンは、第一種類目の語りの特徴を次の様に説明している。「変化抑揚にとほしく、それに適した「音楽の調べとリズムをこの語り方にあたえるとすれば、正しい吟唱のための語りはほとんど同じ調べをとり、単一の音調のうちになされる」と説明する(前掲書『国家(上)』397B(第3巻第8章, 228ページ3から5行目)参照)。

<sup>123</sup> プラトンは、第二種類目の語りの特徴を次の様に説明している。第一種類目とは反対に、「ありとあらゆる音調とリズムを必要とする」、また「ありとあらゆる形の変化抑揚をもっている」と説明する(前掲書『国家(上)』397C(228ページ10から12行目)参照)。

<sup>124</sup> 前掲書『国家(上)』396C(第3巻第8章, 226ページ1から3行目)参照。

場面にあたると、そのより劣った人物に本気になって似せようという気持ちにはならない<sup>126</sup>とプラトンは説明する。

次に、後者の語りについて説明する。生まれのつまらない人間であればあるほど、何もかもを真似することになるだろうし、自分に似つかわしくないとは決して思わないだろう<sup>127</sup>から、彼はあらゆるものを真似しようとする<sup>ら</sup>とプラトンは説明する。プラトンは、「雷鳴だとか、風や電や車軸や滑車の音だとか、また喇叭や笛や牧笛やあらゆる楽器の音だとか、さらには犬や羊や鳥の声までも含めて」<sup>ら</sup>真似ると言い、さらに、この生まれのつまらぬ人の語りについて、「そのすべてが声や身振りによる〈真似〉によってなされるものとなり、叙述を含むとしても、わずかなものとなるだろう」<sup>ら</sup>と説明する。

### 3) プラトンの国家に相応しい語り手（作家）

プラトンは、物語や詩を国の守護者になる人たちに語るときの語り方について提案している。その聞き手は守護者であるが、守護者達は、他のあらゆる仕事から解放され、「国家の自由をつくり出す職人としてきわめて厳格な腕をもった専門家でなければならず、およそこの仕事に寄与することのないような他のいっさいの営みに手を出してはならない」<sup>130</sup>という原則を前提にする。この原則の下で、守護者たちは「ほかのことを何ひとつ仕事として行なってはならないのと同様に、〈真似すること〉も許されない」<sup>131</sup>。もし真似するのであれば、彼に相応しいものを早く子供の頃から真似すべきであるとプラトンは確認する。真似るに相応しいものは「勇気ある人々、節度ある人々、敬虔な人々、自由精神の人々」<sup>132</sup>を挙げ、賤しい性格の物事を行なってはならなし、また真似ることが上手な人間であってもいけない<sup>133</sup>と、そして「劣悪な男たち、臆病な男たち」<sup>134</sup>や「互いに罵ったり嘲ったり、酔ったときにせよ素面のときにせよ汚らしい言葉をはきちらしたり、その他およそこういう連中が言行いず

<sup>125</sup> 前掲書『国家（上）』396D（第3巻第8章、226ページ4から6行目）参照。

<sup>126</sup> 前掲書『国家（上）』396D（第3巻第8章、226ページ6から9行目）参照。

<sup>127</sup> 前掲書『国家（上）』397A（第3巻第9章、227ページ6から8行目）参照。

<sup>128</sup> 前掲書『国家（上）』397AからB（第3巻第9章、227ページ10から12行目）。

<sup>129</sup> 前掲書『国家（上）』397B（第3巻第9章、227ページ11から13行目）。

<sup>130</sup> 前掲書『国家（上）』395C（第3巻第8章、222ページ12から14行目）。

<sup>131</sup> 前掲書『国家（上）』395C（第3巻第8章、222ページ15から223ページ1行目）。

<sup>132</sup> 前掲書『国家（上）』395C（第3巻第8章、223ページ2から3行目）。

<sup>133</sup> プラトンが真似することを具体的に禁止していることは、男でありながら女の真似をすること、奴隷達が仕事をしているのを真似ること、劣悪な男達や臆病な男達を真似ること、鍛冶屋その他の手職人の様子や三段櫂船を漕いでいるところ、さらに馬の嘶きや牛の吼えるところ、河の音や海の波や雷鳴をまねること、などを上げている（前掲書『国家（上）』395Dから396B（第3巻第8章、223ページ13から225ページ8行目）参照）。

<sup>134</sup> 前掲書『国家（上）』395E（第3巻第8章、224ページ5行目）。

れにおいても、自他に対して行なうような過ちをおかしているところ」<sup>135</sup>を決して真似てはならないとプラトンは念を押し、守護者たちは「言葉においても行為においても、気の狂った人々に自分を似せるような慣習をつけてはならない」<sup>136</sup>と主張する。

プラトンは、新たに建設される国家に相応しい語りは、第一種目か、第二種目か、あるいはこの両者の混成されたものかについて考察する。プラトンは、彼の基準<sup>137</sup>を適用し、「すぐれた人物の真似を行う、混合されない様式を受け入れるべき」<sup>138</sup>と結論する。その理由は、新たに建設される国家に合わないからであるが、その国家には「各人が一つのことだけをするのである以上、二面的な人間も多面的な人間もないのだから」<sup>139</sup>とプラトンは説明する。プラトンの建設する国家では、靴作りは靴を作り、その仕事に加えて船長を兼ねることはなく、農夫は農夫であって、農夫の仕事に加えて裁判官を兼ねることはなく、戦士は戦士であって、戦争のほかに金儲けをすることはない<sup>140</sup>。すべての者がそうであるから、語り手が二面的さらに多面的であることはプラトンの国家には相応しくない。プラトンの「われわれのためにすぐれた人物の語り方を真似し、すぐれた人物の語ることを語り」、一人で多くの真似することのない作家（詩人や物語作者）をその国家では採用する。

プラトンは、優れた人を真似る語りで、混合されない様式を受け入れない語りは「変化抑揚にとほしく、もしそれに適した音楽の調べとリズムをこの語り方にあたえたとすれば、正しい吟唱のための語りはほとんど同じ調べとなり、単一の音調のうちになされることになる」<sup>141</sup>と説明する。またそのリズムも一様で斉一なりズムとなる<sup>142</sup>と説明する。

<sup>135</sup> 前掲書『国家（上）』396A（第3巻第8章、224ページ7から9行目）。

<sup>136</sup> 前掲書『国家（上）』396A（第3巻第8章、224ページ9から10行目）。

<sup>137</sup> 本稿でプラトンの基準と言うとき、それは、たとえば、「それぞれの人間は一人で一つの仕事をすれば立派にできるが、一人で多くの仕事をうまくこなすことはできず、あえてそうしようとすれば、たさくさんのことに手を出してすべてに失敗し、どれにおいても名のある者とはなれない」ことを意味する（前掲書『国家（上）』394E（第3巻第7章、220ページ14から16行目））。あるいは、「人はそれぞれのもって生まれた自然本来の素質に応じて、一人が一つずつ自分の仕事を行なわなければならない」ことがプラトンの基準と呼んでいるものである（前掲書『国家（上）』453B（第5巻第4章、388ページ9から10行目））。

<sup>138</sup> 前掲書『国家（上）』397D（第3巻第9章、229ページ5から6行目）。プラトンは、混合された様式を完全に否定しているのではなく、「たしかに楽しいものだし、さらにずっと、子供たちやその養育掛かりの者たちにとって、そして大多数の大衆にとって、いちばん楽しい」と考えている（前掲書『国家（上）』397D（第3巻第9章、228ページ7から9行目））。

<sup>139</sup> 前掲書『国家（上）』397E（第3巻第9章、229ページ12から13行目）。

<sup>140</sup> 前掲書『国家（上）』397E（第3巻第9章、229ページ15から230ページ3行目）参照。

<sup>141</sup> 前掲書『国家（上）』397B（第3巻第9章、228ページ3から5行目）。

<sup>142</sup> 前掲書『国家（上）』397C（第3巻第9章、228ページ6から7行目）参照。

## 1.2 音楽による教育

この教育では、歌と曲調のあり方を考察する。プラトンは、歌は3つの要素からなると言う、第一の要素は、言葉（歌詞）、第二は、調べ（音階）、そして第三はリズム（拍子と韻律）である。始めに、言葉（歌詞）について考察する。歌詞については、物語や詩の言葉と同じように、原則、勇気を讃え、悲嘆し悲しむ言葉を禁止する。

### （1）調べ（音階）：残すべき調べは何か

プラトンは、曲調において、悲しみや嘆きを帯びた調べ<sup>143</sup>は不必要であると主張する。よって、プラトンは「混合リュディア調や、高音リュディア調や、これに類するいくつかのもの」<sup>144</sup>は不必要であると言う。また、プラトンは、「酔っぱらうことや、柔弱であることや、怠惰であることは、国の守護者たちにとって最もふさわしくない」<sup>145</sup>と主張し、柔弱な調べや酒宴用の調べである「イオニア調やリュディア調のある種のものが、『弛緩した』と呼ばれ」<sup>146</sup>、それは守護者たちには相応しくないといい、勇気を表すドリス調と、節度を表すプリュギア調を残すことを主張する。

プラトンは、建設される国家に残す調べを要請している。調べは二つであるが、第一のものは、戦争などの強制された仕事に働く人、また負傷し災難の状況でも毅然として立ち向かう人の声の調子や語勢を適切に真似る調べである<sup>147</sup>。多分、この調べがドリス調（強制的で、不運の内に入り、勇気ある人々の声の調子を真似る調べ）に対応しているのであろう。第二のものは、自発的な行為によって他の人を説いたりして、あるいは他の人が教えたり説得したりするのに従って、思い通りに行なったとしてもその結果に驕ることなく、すべてにおいて節度を守って端正に振る舞って、その結果に満足する人を真似るような調べである<sup>148</sup>。多分、こちらがプリュギア調（自発的で、幸運の内に入り、節度ある人々の声の調子を真似る調べ）に対応しているのであろう。

この二つの調べを残すことになると、多くの弦を使うことも、またあらゆる調べ（音階）

<sup>143</sup> 調べ（音階）の基本的な種類は、リュディア調、イオニア調、ドリス調、プリュギア調の4つである。これに、高い（緊張した）あるいは弛緩した（ものうい）の変様を付して、（1）混合リュディア、（2）高リュディア、（3）弛緩したイオニア調、（4）弛緩したリュディア調、（5）ドリス調、（6）プリュギア調の6つの調べとなる。

<sup>144</sup> 前掲書『国家（上）』398E（第3巻第10章、233ページ2行目）。この引用で、「高音」というのは、緊張したという意味である。

<sup>145</sup> 前掲書『国家（上）』398E（第3巻第10章、233ページ8から9行目）。

<sup>146</sup> 前掲書『国家（上）』398E（第3巻第10章、233ページ12行目）。ここで、弛緩したとは、ものうい、と同じ意味合いであろうと思われる。

<sup>147</sup> 前掲書『国家（上）』399AからB（第3巻第10章、234ページ3から6）参照。

<sup>148</sup> 前掲書『国家（上）』399BからC（第3巻第10章、234ページ7から12行目）参照。

も歌や曲調に含める必要はない<sup>149</sup>とプラトンは主張する。そうであれば、「三角琴やリュディア琴などの、およそ多くの弦を持ち、多くの転調を可能にするようなすべての楽器を作る職人を、われわれは育てはしないだろう」<sup>150</sup>とプラトンは言う。また、笛を作る職人やその演奏者は国家に入れるべきか。プラトンは、琴ではリュラとキタラが残され、笛では一種の牧笛を牧人が持つことになると言う。

## (2) リズム (拍子や韻律)

プラトンは、複雑なりズムや、多種多様な脚韻<sup>151</sup>を避けて、秩序ある生活ならびに勇気ある人の生活へのリズムについて考察する<sup>152</sup>。その際に、曲調やリズムを歌詞(言葉)に合わせることを原則とする。プラトンによると、語りに調べやリズムを合わせるとき、「すぐれた語り」と、すぐれた調べと、様子の優美さ(気品)とすぐれたリズムとは、人の良さ(エウエーテア)に伴うもの<sup>153</sup>となる。ここで人の良さとは、「その品性(エートス)が良く(エウ)美しくかたちつくりされている心のこと」<sup>154</sup>である。

プラトンは、若者たちが将来に自分の任務を果たす人間となるならば、あらゆるところに人の良さを追い求めるべきであろうと主張する。リズムの劣悪さと様子の見苦しさと調べの劣悪さは、「悪しき語り方と悪しき品性の兄弟であり、それと反対のものは反対のもの一節度あるすぐれた兄弟」<sup>155</sup>とプラトンは説明する。

<sup>149</sup> 前掲書『国家(上)』399C(第3巻第10章、235ページ3から4行目)。

<sup>150</sup> 前掲書『国家(上)』399D(第3巻第10章、235ページ6から7行目)。三角琴もリュディア琴も、他の国から移入したもので多弦的な琴であった。

<sup>151</sup> 脚韻の基本型は3種類である。韻律の構成単位は、長音節と短音節の組み合わせからなる。その組み合わせは、(1)2:2の比のパターン、(2)3:2の比のパターン、そして(3)2:1の比のパターンの3型である。(1)の型の例は、ダクテュロス(長音節、短音節、短音節)やスポンダイオス(長音節、長音節)やアナパイストス(短音節、短音節、長音節)の組み合わせである。(2)の型は、パイアーン(長音節、短音節、短音節、短音節)やクレティコス(長音節、短音節、長音節)の組み合わせである。(3)の型は、トロカイオス(長音節、短音節)やイアンボス(短音節、長音節)の組み合わせである(前掲書『国家(上)』訳者注(497ページの237ページ5行目の注)参照)。

<sup>152</sup> 前掲書『国家(上)』399Eから400A(第3巻第11章、236ページ13から15行目)参照。プラトンは、どのような生活がどのリズムに対応しているのかについてはダモンに相談するといっている(前掲書『国家(上)』400B(第3巻第11章、237ページ10行目)参照)。またプラトンは、「賤しさや、傲慢さや、狂気や、またそのほかの悪にふさわしい脚韻にはどんなのがあるか、そしてどんなリズムをそれと反対のもののために残すべきか」につて考察することを説いている(前掲書『国家(上)』400B(第3巻第11章、237ページ10から12行目))。プラトンは、行進曲のリズム「複合的エノプリオス」あるいは叙情詩の英雄律「ヘーローオス」のリズムとしてダクテュロスやスポンダイオスを挙げている(前掲書『国家(上)』400B(第3巻第11章、237ページ13から238ページ2行目)参照)。

<sup>153</sup> 前掲書『国家(上)』400DからE(第3巻第11章、239ページ8から9行目)。

<sup>154</sup> 前掲書『国家(上)』400E(第3巻第11章、239ページ11行目)。

<sup>155</sup> 前掲書『国家(上)』401A(第3巻第11章、240ページ5から6行目)。



### （3）音楽・文芸による教育の意義

音楽・文芸による教育は重要であるが、プラトンの考えを示しておこう。リズムと調べとが、心（魂）の奥底には入り、魂を染み渡っていき、正しく育つときには、気品ある優美さをもたらし、人を気品ある人間に形作る。音楽による教育でリズムと調べが人間の優美な品性を形作り、そして、正しい教育（文芸による教育で美しいものや正しいものについての教養教育）を与えられる者は、美しくないものや欠陥のあるものを感知して、それを嫌悪し、美しいものこそを魂に迎え入れながら、その美しいものから糧を得て育てられて、美しく優れた人になるであろうし、他方、醜いものは正当にそれを批判し、それを憎むであろう<sup>156</sup>。そして、ロゴスによる哲学的問答法をも飲んで迎え入れるであろう。

また、プラトンによると、節制や勇気や自由闊達さや高邁やすべてそれと類するもの、他方これと反対のもの実際の姿が繰り返し現れるたびに、それを識別し、実際の姿も似姿もともに認識できるようになるまでは、音楽・文芸に習熟した者とはなっていないことになる<sup>157</sup>。

### 1.3 体育による教育

プラトンは、体育の内容としては、鍛錬そのものより、また体の強靱さを目的にするよりは、「自分の素質のなかにある気概的な要素に目を向け、それを目覚めさせるためにこそ行う」<sup>158</sup> ことを重要視している。この点では、一般の競技者たちが体力づくりのために食事や鍛錬をするのとは違う<sup>159</sup>。プラトンは、体育が身体を鍛錬し、体力をつけるという意味での身体を世話するものとして捉えるのではなく、音楽・文芸と同様に「魂のことを最も重要な目的」<sup>160</sup> とすると捉えている。

#### （1）単純素朴な食と生活の提案

プラトンは、体育教育については大まかな規範をおいている。第一に、守護者たちは酔っ払うことを慎む、第二に、運動選手並みの体力を維持しなければならないが、運動選手のような不健康を<sup>161</sup> 避けて、単純素朴な食べ物を提案している。戦争の競技者<sup>162</sup> としての守護

<sup>156</sup> 前掲書『国家（上）』401D（第3巻第12章、241ページ14から242ページ7行目）参照。

<sup>157</sup> 前掲書『国家（上）』402C（第3巻第12章、243ページ8から16行目）参照。

<sup>158</sup> 前掲書『国家（上）』410B（第3巻第17章、265ページ12から13行目）。

<sup>159</sup> 前掲書『国家（上）』410B（第3巻第17章、265ページ13から14行目）参照。

<sup>160</sup> 前掲書『国家（上）』410C（第3巻第17章、266ページ5行目）。

<sup>161</sup> プラトンは、運動選手たちが不安定な健康状態にあると認識していたと思われる（前掲書『国家（上）』404A（第3巻第13章、249ページ1から3行目）参照）。

<sup>162</sup> 例えば、不眠で過ごし、目や耳を鋭く働かせなければならず、戦地では飲み水や、その他一般に食べ物や、

者たちは、安定した健康の維持が必要である。プラトンは、健康のためには魚料理や香料料を避けるだけでなく、「シュラクサイの御馳走やシリケアの多彩な料理」<sup>163</sup>など、また同様に「アッティカの菓子」<sup>164</sup>をとることを非難する。また、健康管理のためには、守護者たちは遊女を愛人に持つことを非難する。というのは、戦争の競技者として活動する守護者たちは「不眠で過さねばならないし、目や耳をできるだけ鋭く働かさなければならないし、戦地においては、飲み水や、その他一般に食べ物や、また炎熱と酷寒などの多くの変化を経験しながら、安定した健康を保たなければならない」<sup>165</sup>からである。プラトンは、戦士たちの食事は単純素朴を推奨している。

プラトンが守護者になる人達に単純で素朴な食生活を勧めるのは、音楽において「多様さは放埒を生むということだったが、ここではそれは病気を生むのであり、他方単純さは、音楽においては魂の内に節度を生み、体育においては身体の内健康を生む」<sup>166</sup>からである。プラトンは、贅沢な食事を体の体育（健康管理）の面から避けることを推奨している。

## (2) 病気と体育：ヘロディコスの療法かアスクレピオスの療法か

怠惰や贅沢な食と生活のために、「『風膨れ』(鼓腸)だとか、『垂れ流し』(カタル)だとかいった」病名<sup>167</sup>がつけられる病気が起こっていることをプラトンは嘆いている。このような病気は以前<sup>168</sup>にはなかったとプラトンは見ている。プラトンは、医術が変化してきていることを述べる。病気に付き添って自身を守る療法（流儀）に変化してきているとプラトンは見ている。ヘロディコス<sup>169</sup>は「自分の病気につきっきりだったが、それは不治の病이었다の

また炎熱と酷寒などを経験しながら、安定した健康を保たなければならない(前掲書『国家(上)』404B(第3巻第13章, 249ページ6から9行目)参照)。

<sup>163</sup> 前掲書『国家(上)』404D(第3巻第13章, 250ページ14から15行目)。

<sup>164</sup> 前掲書『国家(上)』404D(第3巻第13章, 251ページ4行目)。

<sup>165</sup> 前掲書『国家(上)』404B(第3巻第13章, 249ページ6から9行目)。

<sup>166</sup> 前掲書『国家(上)』404E(第3巻第13章, 251ページ10から12行目)。

<sup>167</sup> 前掲書『国家(上)』405D(第3巻第13章, 253ページ10行目)。

<sup>168</sup> プラトンによると、「そんな病名はアスクレピオスの時代にはなかったものだ」とある(前掲書『国家(上)』405E(第3巻第14章, 253ページ14から15行目))。アスクレピオス(Ἀσκληπιός, Asklēpios)はギリシア神話に登場する名医であり、アスクレピオスはアポローンとコロニスの子とされている。彼の子供達が、トロイア戦争でギリシア軍に従軍したポダレイリオスとマカオンである。

<sup>169</sup> ヘロディコス(Ἡρόδοτος, Herodotos)(紀元前5世紀)はセリュンブリア生まれのトラキアの医者であった。彼の名は、プラトンの対話編『プロタゴラス』ならびに『パイドロス』で言及されている。『プロタゴラス』316DからE(31ページ3から6行目)において、「またときによると、体育術までもがこの偽装に使う人々がしばしばあることに、私は気づいている—たとえばタラスの人イッコスがそれであり、また現になお誰にも劣らぬソフィストとして存命しているセチュンブリアのヘロディコス、もっともメガラの人であったこの男がそうである」と紹介されている。ここでは、プラトンは、ヘロディコスを体育術の仮面を被ったソフィストであるとプロタゴラスに語らせている。また『パイドロス』227D(11ページ1から2行目)に「君

で、思うに、自分を全治させることもできなかつたし、いっさいの仕事のための時間を諦めて、ひたすら療養のうちに生涯を送った<sup>170</sup>とある。プラトンは、そのような療法には疑問を持っている。それぞれの国民には、是非ともなさねばならない仕事が定められていて、一生病気の治療をしながらすごす暇は誰にもないと確信している<sup>171</sup>。プラトンは、「職人たちはそういう精神が生きているのが見られるけれども、金持ちで幸福だと思われている連中については、そうではないということ<sup>172</sup>に不快さを感じている。大工職人が長期の療養を命じられたときは、「自分には病気などしている暇はないし、それに、病気のことを注意を向けて、課せられた仕事をなおざりにしながら生きていても何の甲斐もない<sup>173</sup>」と言って、「そのような医者には別れを告げて、いつもの生活へと立ちかえり、健康を回復して、自分の仕事を課しながら生きて行く。またもし彼の身体がそれに堪えるだけの力がなければ、死んで面倒から解放される<sup>174</sup>と職人氣質につてプラトンは説いている。この気質を、職人には「課されたひとつの仕事があって、それをしなければ生きていく甲斐がない<sup>175</sup>」こととして讃えている。他方、プラトンは、職人氣質を避けていて、そのような仕事は何一つ課されて持っていないのが金持ちである<sup>176</sup>と認識する。プラトンは、ヘロディコスの療法のように、長期に渡り身体に対する過度の気遣いは、国の職人の仕事の遂行に大いに妨げになる<sup>177</sup>と考えている。プラトンは、長期療法を社会的には不健全であると判断していると思われる。

### （3）金持ちと徳生活：ポキュリデスの格言<sup>178</sup>

プラトンは、「この徳の修練ということこそは、金持の人が心掛けなければならない仕事で

---

が、メガラまで散歩の足をのばし、ヘロディコスの流儀にならって城壁に着いてはまた引き返すとしても、ぜったいに君からははなれない」とある。ここでヘロディコスの流儀とあるのが、これは彼による鍛錬法あるいは養生法であると思われる。

<sup>170</sup> 前掲書『国家（上）』406B（第3巻第14章、254ページ13から15行目）。

<sup>171</sup> プラトンは、一人一つずつの仕事をおこなわなければならない（本稿でプラトン基準といっていること）のであるから、生涯を病気療養にあてることはできないと見ている。

<sup>172</sup> 前掲書『国家（上）』406C（第3巻第14章、255ページ9から10行目）。

<sup>173</sup> 前掲書『国家（上）』406DからE（第3巻第15章、256ページ2から6行目）。

<sup>174</sup> 前掲書『国家（上）』406E（第3巻第15章、256ページ4から6行目）。

<sup>175</sup> 前掲書『国家（上）』407A（第3巻第15章、256ページ9から10行目）。

<sup>176</sup> 前掲書『国家（上）』407A（第3巻第15章、258ページ12から14行目）参照。

<sup>177</sup> 前掲書『国家（上）』407B（第3巻第15章、257ページ11から13行目）において、体育の範囲を超えた、身体に対する過度の気遣いは、「家をととのえる仕事のためにも、出征のためにも、国の中の官職で坐ってする仕事のためにも、厄介な邪魔になります」とプラトンは語らせている。

<sup>178</sup> この格言は、「暮らしの糧がすでに充分になったなら、そのときには徳を修めなければならない」である（前掲書『国家（上）』4067A（第3巻第15章、257ページ1から2行目）。ポキュリデスは、前6世紀のミレトスの詩人である。

あって、それを怠る場合には生きるに値しないというべきではないのか、あるいは、病気のお守りをするのは、大工その他の技術にとっては、その仕事への注意集中の妨げになる<sup>179</sup>と説明する。そして、病気のお守りということがある限り、あらゆる場合に、「徳が修められるのを妨げることになる<sup>180</sup>とプラトンは説明する。

プラトンは、アスクレピオスが病気の治療に付ききりになることが徳の修練の妨げになることを知っていたので、健康な身体をもってはいるが局所的な病気（傷をしたとか季節の病気）に罹った人々に医術を教え、そして薬や切開によって治療し、「市民としての仕事をそこなわないようにと、ふだんと同じ生活法を命じ<sup>181</sup>、他方では、「内部のすみずみまで完全に病んでいる身体に対しては、養生によって少しずつ排泄させたり注入したりしながら、惨めな人生をいたずらに長びかせようと試みなかったし、また、きっと同じような病弱に違いない彼らの子供を生まれさせなかったのである<sup>182</sup>と説明している。

#### (4) 優れた医者と優れた裁判官

優れた医者は、子供の頃から医術を勉強し、できるだけ「たちの悪い病気の身体と親しく接し、また自分自身も生まれつきあまり健康でなく、ありとあらゆる病気を経験したほうが、それだけ有能な医者になれる<sup>183</sup>とプラトンは言う。医者は、自分自身の身体によって身体を治療するのではなく、「魂によって身体を治療するのであって、魂はそれ自身が悪くなったり現に悪くあったりしながら、何かの面倒をよく見てやると言うことは不可能なのだ<sup>184</sup>と説明する。

優れた裁判官は、優れた医者とは異なっている。裁判官は魂によって魂を支配するのが仕事であるから、ゆえに、裁判官の魂には、「若いときから邪悪な魂のあいだで育てられてこれと親しくつき合い、みずからあらゆる不正事を犯す経験をつみ<sup>185</sup>、その結果、「他人の不正事を<sup>186</sup>「自分自身のことにもとづいて鋭く推察できるようになる<sup>187</sup>ことは許されない。逆に、裁判官の魂は、「やがて美しくすぐれた魂となって、正義を健全に判定すべきであるならば、若いときは悪い品性には無経験で、それに染まないようにしていなければならない<sup>188</sup>

<sup>179</sup> 前掲書『国家（上）』407A から B（第3巻第15章、257ページ5から8行目）。

<sup>180</sup> 前掲書『国家（上）』407C（第3巻第15章、258ページ2行目）。

<sup>181</sup> 前掲書『国家（上）』407D（第3巻第15章、258ページ10行目）。

<sup>182</sup> 前掲書『国家（上）』407D から E（第3巻第15章、258ページ11から14行目）。

<sup>183</sup> 前掲書『国家（上）』408E（第3巻第16章、261ページ10から12行目）。

<sup>184</sup> 前掲書『国家（上）』408E（第3巻第16章、261ページ15から262ページ1行目）。

<sup>185</sup> 前掲書『国家（上）』409A（第3巻第16章、262ページ4から5行目）。

<sup>186</sup> 前掲書『国家（上）』409A（第3巻第16章、262ページ5行目）。

<sup>187</sup> 前掲書『国家（上）』409A（第3巻第16章、263ページ6から7行目）。

とプラトンは主張する。

裁判官というものは、「若い人ではなく年寄りでなければならず、不正がどのようなものかを選別して学んだ人でなければならない」<sup>189</sup>し、また「不正というものを、自分自身の魂のなかにある自分自身のものとして認識したのではなく、他人の魂のなかの他人のものとして、それが本来どのように悪いものであるかということ、自分自身の経験ではなく知識を用いて見抜くように、長い間の訓練をつんだ人でなければならない」<sup>190</sup>とプラトンは主張する。知恵のある裁判官とは、不正というものがどのように悪いものであるかということ、自分自身の経験ではなく、知識を用いて見抜くように訓練を積んだ人である。徳は、教育されることによって、徳自身と悪徳との知識を把握する<sup>191</sup>。

#### （5）医者と裁判官のあり方を国の法として制定

プラトンは、優れた医者のあり方と優れた裁判官のあり方を制定する国家の法が、「身体と魂の両面においてすぐれた素質をもつ者たちの面倒をみるであろうが、そうでないものについては、身体の面で不健全な人々は死んで行くにまかせるだろうし、魂の面で邪悪に生まれつき、しかも治癒の見込みがない者たちはこれをみずから死刑に処するだろう」<sup>192</sup>と結論を出す。また若者たちは、「単純な種類の音楽・文芸を自分の教養として身につけるならば、司法による裁きを必要とする事態におちいることのないよう、みずからを戒めるような人間になることは明らか」<sup>193</sup>と主張する。

#### 1.4 音楽・文芸による教育と体育による教育からの調和した魂

国の守護者になる人びとは、調和した魂を持っている必要がある。調和した魂は、体育教育と音楽・文芸による教育の適切な組み合わせによって実現され得る。体育による教育は、魂の粗暴や頑固に関係するが、逆に音楽・文芸による教育は、その柔弱や温順に関係する。体育教育に偏りすぎると、その魂は粗暴になる。魂の粗暴さは、その気概に関係するが、正しく教育されると、勇気ある魂になる。逆に、必要以上に緊張を強いられると頑固で険しい性格になる。また、温順さは魂の理性に係わる部分に関係するが、正しく教育されると、穏やかな魂になり温順な性格になる。だが、物憂い知的活動を過度に弛めると、魂を柔弱にす

<sup>188</sup> 前掲書『国家（上）』409A（第3巻第16章、262ページ7から9行目）。

<sup>189</sup> 前掲書『国家（上）』409B（第3巻第16章、262ページ14から16行目）。

<sup>190</sup> 前掲書『国家（上）』409B（第3巻第16章、262ページ16から263ページ3行目）。

<sup>191</sup> 前掲書『国家（上）』409DからE（第3巻第17章、264ページ4から6行目）参照。

<sup>192</sup> 前掲書『国家（上）』410A（第3巻第17章、264ページ11から14行目）。

<sup>193</sup> 前掲書『国家（上）』410A（第3巻第17章、265ページ3から5行目）。



る。調和した人の魂とは、「節度があり、また勇気がある」<sup>194</sup> ことである。

気概的な要素と知を愛する要素のため、音楽・文芸と、体育とが授けられた。これらはけっして、魂と身体のために一副次的な効果は別として一与えられたのではなく、いま言った二つの要素（気概的要素と知を愛する要素）のために、それらが適切な程度まで締められたり弛めたりすることによって、互いに調和し合うようにと与えられたものである<sup>195</sup>。

気概を磨き、知を愛する力を強くするために、幼児から10歳までに授けられた音楽・文芸による教育と体育による教育が若い人々に与えられた。その教育によって、教養が身につく、次の学術研究と哲学的問答法を吸収する素養が養われたと思われる。

## 第2項 10歳頃から20歳頃

### 2.1 哲学者の自然的素質と学術研究に適した性格

プラトンは、学術研究を学ぶためには、学ぶ人に素質を求めている。本稿の第1章第1節第2項において、プラトンが必要とする哲学者としての自然的素質を示したが、プラトンは、この自然的素質を兼ね備えていない人は、哲学者には不適であると言う。それらは、

- (1) 虚偽を受け入れることなく、これを憎み、そして真実を愛する人
- (2) 哲学者たるべき魂は、記憶力のよい魂の人
- (3) 生まれつき度を守り優雅さをそなえた精神の人
- (4) ものわかりがよく、度量が大きく、優雅な人

さらに、正義と勇気と節制とを愛して、哲学的素質をそなえた者でない限り、哲学を確実に修めることはできない。哲学者の精神（魂）は、真実在の実相へと導かれ、真実をこそ追い求める。哲学者は、雑多な個々の事物の上にとどもって、ぐずぐずしているようなことはなく、魂の部分（真実在と同族関係にある部分）によって、それぞれのものの本性にしっかりと触れるまでは、ひたすらに進み、勢いを鈍らせず、恋情をやめることのない人である。魂のその部分によって、真の実在に接し、交わり、知性と真実とを産んだうえで、知識を得て、まことの生活を生き、はぐくまれて行く人である。プラトンは、真実在を追求する哲学者が国家の支配者に相応しいと主張する。

さらに、国家の支配者になるためには、幾つかの学術研究を修めることをプラトンは要請している。その教育を受けるのに適した素質をプラトンは提示している。それを列挙すると、

<sup>194</sup> 前掲書『国家（上）』411A（第3巻第17章、267ページ15行目）。調和しない人は、臆病であり、粗暴である。

<sup>195</sup> 前掲書『国家（上）』411Eから412A（第3巻第18章、270ページ8から12行目）参照。

(1) 鋭敏であること<sup>196</sup>（即ち、難渋して学ぶようではだめである）

(2) もの憶えがよい (3) 根性がしっかりしている (4) あらゆる意味で苦労好き

これらすべての素質を備えた人が学術研究を修める。プラトンは、「そうでなければ、誰にせよ、いったいどうして身体の苦労に堪えぬいたうえて、さらにこれだけの学習と訓練をやりとげる気になるだろうと思うか」<sup>197</sup>と学術研究や哲学的問答法を修める厳しさを説いている。

## 2.2 学術研究

最初に、プラトンの学術研究について的一般論を示しておこう。学術研究する人達は、奇数や偶数とか、さまざまな図形とか、これに類することが既に実在していると仮定（想定）して、結論に整合的に（矛盾することなく）到達する<sup>198</sup>。つまり、可視界<sup>199</sup>にける原物（実物）を仮設として想定し、目差す結論に矛盾することなく到達する。この論理過程では、研究者は目にみえる形象（原物・実物）を補助的に使用する<sup>200</sup>が、研究者が思考しているのは、

<sup>196</sup> プラトンはその理由を、「魂は、体育においてよりも、手ごわい学科のなかで怯みくじけることのほうが、はるかに多いから」あるいは、「その苦労は、魂にとって、身体と共同のものではなく自分だけが引き受けるものであるだけに、より固有のものだから」と言う（前掲書『国家（下）』535B（第7巻第15章、167ページ2から4行目）参照）。

<sup>197</sup> 前掲書『国家（下）』535C（第7巻第15章、167ページ7から8行目）。

<sup>198</sup> 前掲書『国家（下）』510CからD（第6巻第20章、98ページ10から15行目）に「奇数と偶数とか、さまざまな図形とか、角の三種類とか、その他これと同類の事柄をそれぞれの研究に応じて前提して、これらは既知のもののみならず、そうした事柄を仮設として立てたうえて、これらのものについては自分自身に対しても他の人々に対しても、もはや何ひとつその根拠を説明するにはおよばないと考えて、あたかも万人に明らかであるかのように取り扱う」とある。そして、「自分たちがとりかかった考察の目標にまで、整合的な仕方まで到達する」とある（前掲書『国家（下）』510D（第6巻第20章、98ページ15から16行目））。プラトンが指摘している学術研究は、現在の経済学での論証にも十分に適用できる方法論である。

<sup>199</sup> プラトンは、感覚で捉える世界（可視界）と思惟で捉える世界（可知界）の二つの世界で事物・事柄を感じ、認識すると考えている。感覚では、事物をあるもの（実在）としてとらえることはなく、思いなしとしての似姿（似像）と似姿から原物（実物）を確信する。しかし、見えるものから真実在を知ることはできない。可視界では、事物は常に生成消滅するものとして映る。この感覚の世界から、事物の真実在を知るには思惟し、さらに知性を活動させる必要がある。事物の真実在をプラトンはイデア（ものそのもの）と呼んでいる。

またプラトンは、可知界の方が真実性（あるいは明確性）において可視界より高いと言う。そして、可視界における似姿に対応する部分を影像知覚（間接知覚）、原物・実物の部分を確信（直接知覚）と名付けている。他方、可知界における部分では、学術研究に対応する部分を悟性的思考（間接知）、哲学的問答法に対応する部分を知性的思考（直接知）と名付けた。これらの四つの部分で、知性的思考が最も真実性が高く、似姿に対応する部分である影像知覚（間接知覚）が最も真実性が低いとされている（前掲書『国家（下）』511E（第6巻第21章、102ページ1から8行目）参照）。

<sup>200</sup> プラトンは、「彼らは目にみえる形象を補助的に使用して、それらの形象についていろいろと論じる」（前掲書『国家（下）』510D（第6巻第20章、99ページ2から3行目））が、ただし、その場合、「彼らが思考し

その補助的な形象ではなく、形象が照らし出す実体（真実在）<sup>201</sup>である。

プラトンは、学術研究では、ほんとうの知識には達し得ないと考えている。プラトンは、ここに学術研究の限界があると指摘している。学術研究では、目に見える原物・実物を仮設として想定し、その仮設そのものについて問わない（疑わない）<sup>202</sup>。上で示したように、学術研究では仮説から出発して考察するのであるから、対象そのものについての本当の知を得ることはない<sup>203</sup>。この意味で学術研究は、本当の意味で知識に達していない。こように、学術研究によってだけでは本当の知に至らないが、それでも、対象と仮設を関係づけることによって、学術研究を知性による把握のもとに置かれるとプラトンは考える。このような心のあり方を、プラトンは、「〈悟性的思考〉（間接知）と呼んで、〈知性的思惟〉（直接知）とは区別」<sup>204</sup>している。プラトンは、学術研究をそのものの認識においてどのように位置づけているのであろうか、それは、〈思わく〉と〈知性〉との何か中間的なところに置かれる。

#### （1）第一番目の学科：数論と計算術

「計算したり数えたりする能力を、軍人にとって必要欠くべからざる学科と定めるべき」<sup>205</sup>とプラトンは考える。これとの関係でも数論や計算術は学術研究に入れる必要があるが、プラトンは「そもそも人間であるためにもすでに、必要欠くべからざるもの」<sup>206</sup>と考える。プラトンが数論や計算術を重要であると考えるのは、この学術研究が知性を目覚めさせる研究であるところにある。プラトンは、感覚というものはあてにならないので、ある対象が〈一〉つなのか〈二〉つなのかを感覚で捉えきれないときには、知性の活動を必要とすると考える。同じものがある状況では軽く感じ、また他の状況では重く感じられることが魂に伝えられるとき、その対象が一つのものなのか、二つのものであるのかを認識・識別する必要がある。このとき、プラトンは「魂は思惟（計算能力）と知性を助けに呼んで、報告されているそれぞれ

---

ているのは、それらの形象ではなく、それを形象とする原物について」である（前掲書『国家（下）』510D（第6巻第20章，99ページ3から5行目））。

<sup>201</sup> として論証しているものについては、「彼らの論証は四角形そのもの、対角線そのもののためになされるのであって、図形に描かれる対角線のためではなく、その他同様である」とある（前掲書『国家（下）』510D（第6巻第20章，101ページ5から6行目））。

<sup>202</sup> プラトンは、このことを「さまざまな仮設がそのまま始原にはかならない」と言う（前掲書『国家（下）』511C（第3巻21章，101ページ6から7行目））。

<sup>203</sup> プラトンはこの点を「彼らは始原にまでさかのぼって考証するのではなく、仮説から出発して考察するがゆえに」、「対象についてほんとうの〈知〉をもつに至らない」と考えている（前掲書『国家（下）』511D（第6巻第21章，101ページ8から10行目））。

<sup>204</sup> 前掲書『国家（下）』511D（第6巻第21章，101ページ13行目）。

<sup>205</sup> 前掲書『国家（下）』522E（第7巻第7章，129ページ2から3行目）。

<sup>206</sup> 前掲書『国家（下）』522E（第7巻第7章，129ページ5から6行目）。

のものが一つのものなのか、二つのものであるのかを、しらべてみようとするだろう<sup>207</sup>と言う。思惟と知の働きによって、それぞれが一つであり、合わせて二つであれば、魂はその二つのものを識別して認識<sup>208</sup>し、あるいは、両者が区別されていなければ、一つとして区別する。

たとえば、小指、薬指、中指をそれぞれ一本ずつ見るときには指であるとは認識できても、中指なのか、小指なのか、あるいは薬指であるかを区別することはできないであろう。この区別をするためには、大きい（大）とは、また小さい（小）とは何かを思考することになる。プラトンは、可視界<sup>209</sup>では、指は一つであるが、同時に、3本の指としても現れる。このとき、魂は困惑し、知性の活動を要請する<sup>210</sup>。このとき、〈一〉つは何であるかを問うことになる。この〈一〉つについて学ぶことは、「実在の観想へと魂を向け変えて導いて行く」<sup>211</sup>ことになる。

視覚の世界では、同じものを一つと見ながら同時にまた無限に多いと見るという性質は、数（たとえば〈一〉）のもつ性質である。数のこの性質が、思考を通じて数（たとえば〈一〉）とは何かへと引き込む。可視界では知ることができないことを思惟する世界へと引き込む。ここにおいて、数論や計算術なる学問の必要性が説かれる。すなわち、「戦士にとっては、軍団を編成するためにそれを学ぶ必要があるし、哲学する者にとっては、生成界から抜け出して実在に触れなければならないがゆえに、それを学ばなければならないのであって、そうでなければ、思惟の能力ある者とはけっしてなれないからである」<sup>212</sup>とプラトンは確信して説く。さらに「われわれの国の守護者は、まさに戦士にして哲学するものなのだ」<sup>213</sup>と語る。

プラトンは、学問としての数論あるいは計算術について次のように纏めている。「この学問は魂をつよく上方へ導く力をもち、純粹の数そのものについて問答するように強制するの

<sup>207</sup> 前掲書『国家（下）』524B（第7巻第7章、133ページ10から11行目）。

<sup>208</sup> この点についてプラトンは、「もしそれぞれが一つで、両者が合わさって二つであるとすれば、魂はその二つのものを、区別されたものとして知のはたらきのうちにとらえることになるだろう。なぜなら、区別されていなければ、二つとしてではなく、一つとして考えたはずだから」と説明する（前掲書『国家（下）』524B（第7巻第7章、133ページ16から134ページ2行目））。

<sup>209</sup> 前掲書『国家（下）』523CからD（第7巻第7章131ページ8から132ページ4行目）参照。

<sup>210</sup> プラトンはこのことを、「魂は困惑に追いこまれ、自己の内では知性の活動を呼び起こしながら探究のやむなきに至り、〈一〉とはそれ自体としてそもそも何であるのかと、問わざるをえなくなるだろう」と説明する（前掲書『国家（下）』524D（第7巻第8章、136ページ5から7行目））。

<sup>211</sup> 前掲書『国家（下）』525A（第7巻第8章、136ページ8から9行目）。プラトンは、「視覚の世界では、同じものを一つと見ながら同時にまた無限に多いと見る」（前掲書『国家（下）』525A（第7巻第8章、136ページ11から12行目））。またプラトン著（田中美知太郎訳『パルメニデス』129Bあるいは144E（13ページ10行目、68ページ5から9行目）にも同様の記述がある）参照。

<sup>212</sup> 前掲書『国家（下）』525B（第3巻第8章、137ページ6から9行目）。

<sup>213</sup> 前掲書『国家（下）』525B（第3巻第8章、137ページ11行目）。プラトンは、守護者になかに戦士（軍人）を含めている。ここで守護者と言っているのは、多分に戦士を想定しているであろう。

であって、目に見えたり手で触れたりできる物体のかたちをとる数を魂に差し出して問答しようとしても、けっしてそれを受つけない<sup>214</sup>と纏める。可視界から可知界へと入り込むことを説き、プラトンは、数は思惟によってのみ考察され、他のどのような仕方によっても取り扱えないものとして数を考えている。

### (2) 第二番目の学科：幾何学

プラトンは、戦士が幾何学を学ぶ必要のあることは明らかであると考ええる。「陣営の構築や、要地の占拠や、軍隊の集合と展開や、その他戦闘の最中や行進のときに軍隊がとるさまざまな隊形などのことにかけて、幾何の心得があるとないでは、同じ人でも差異が出てくる<sup>215</sup>とプラトンは戦士には幾何学が必要であることを説く。

幾何学が知ろうとするものは、ときによって生成したり消滅したりする個々のものではなく、常にあるものである。幾何学をそのものを認識する知識であるとプラトンは考える。四角形そのもの、あるいは対角線そのものを知るのが幾何学であって、幾何学は「知ることを目的として研究されているはず<sup>216</sup>と言い、さらに、「魂を真理へ向かって引っぱって行く力をもつものだということになるだろうし、哲学的な思考のあり方をつくり上げて、いまは不当に下に向けているものを、上方に向けるようにさせる力をもつものだということになるだろう<sup>217</sup>とプラトンは現状の幾何学に関する取扱に批判的である。

### (3) 第三番目の学科：立方体

プラトンは、第三番目の学科として3次元の立方体を入れるべきである<sup>218</sup>。しかし、プラトンは、この学科を入れることに戸惑いを感じている。現状の立方体の取扱を見る限りでは、それを第三番目の学科にするのは時期尚早であるとプラトンは判断する。そのような判断理由をプラトンは2つ上げる。その第一は、立方体の研究は、国家から尊重されていない

<sup>214</sup> 前掲書『国家(下)』525D(第7巻第8章, 138ページ10から13行目)。

<sup>215</sup> 前掲書『国家(下)』526D(第7巻第9章, 141ページ9から11行目)。

<sup>216</sup> 前掲書『国家(下)』527B(第7巻第9章, 143ページ1から2行目)。

<sup>217</sup> 前掲書『国家(下)』527B(第7巻第9章, 143ページ11から14行目)。ここで、プラトンは、現実の幾何学者の姿勢が下向きであって、真実を求める(上を見て)ものでは無いと言っている。この点については、プラトンは、現実の幾何学者の言葉、『四角形にする』とか、『(与えられた線上に図形を)沿えて置く』などから、「自分たちの語る言葉はすべて行為のためにあるかのように」言うことを非難している(前掲書『国家(下)』527AからB(第7巻第9章, 142ページ13から143ページ2行目)参照)。プラトンは、幾何学を思惟する学問と見ている。プラトンは、即ち、幾何学も善の実相を観得することに寄与すると考える。

<sup>218</sup> 前掲書『国家(下)』528B(第7巻第10章, 146ページ9から11行目)に「順序としては、二次元のつぎには三次元を取り上げるのが正しい。そしてこれは、立方体の次元や一般に深さを分けもつものについて考えるものである」と第三番目の学科について述べている。



いこと、その第二は、立方体の研究を指導する研究者が現れないこと、あるいは、譬えその指導者が居たとしても、その研究能力をもった人達の誇り高さのために、その指導が進められないことを挙げている<sup>219</sup>。プラトンは、第三番目の学科に立方体の学術研究を加えることを期待し、そして、「国家が国全体をあげて、この研究を尊重しながら指導監督に協力するならば、研究者たちもそれに従うだろうし、問題そのものも持続的かつ集中的に探究されて、事柄がいかにあるかの真実が明らかにされるようになるだろう」<sup>220</sup>と期待している。

#### （4）第四番目の学科：天文学

プラトンによると、目に見える天空を飾る模様（星）は、目に見えるもののうちでは最も美しく、最も正確であるが、だがその模様は目に見えぬ実在を指差して学ぶ模型にすぎない<sup>221</sup>。プラトンは、真実の天空には遥かに及ばないと言い、真の天空は視覚によって捉えることは出来ないものであると言う。プラトンの考える真の天空とは、「真に実在する速さと遅さが、真実の数とすべての真実の形のうちに相互の関係において運行し、またその運行のうちに内在するものを運ぶところの、その運動のこと」<sup>222</sup>である。プラトンは、この運動は「ただ理性（ロゴス）と思考によってとらえるだけであり、視覚によってはとらえられないもの」<sup>223</sup>と説明する。

プラトンは、幾何学に通じた人ならば、天空の模型（図形）を見て、「等しいものや、二倍のものや、その他何らかの正確な数量的関係のあり方を、そうした図形の内に直接とらえるつもりで本気でこれをしらべるのは、滑稽なことだと考えるであろう」<sup>224</sup>と厳しく批判的である。また、真の天文学者ならば、月やその他の星が「つねに齊一なあり方を保って進行しつづけ、けっしていささかも逸脱することがない」と考える人、そしてそれについての真理をあらゆる手段をつくしてそこに求めようとする人を、奇妙な考えの人であるとみなすだろう<sup>225</sup>とプラトンは現実の天文学のあり方に批判的である。それに対して、プラトンは天文学のあり方について次のように提案する。「ちょうど幾何学を研究する場合と同じようにして、〈問題〉を用いることによって天文学を追求し、天空に見えるものにかかずらうのはやめ

<sup>219</sup> 前掲書『国家（下）』528B（第7巻第10章、146ページ14から147ページ3行目）参照。

<sup>220</sup> 前掲書『国家（下）』528C（第7巻第10章、147ページ3から6行目）。

<sup>221</sup> 前掲書『国家（下）』529DからE（第7巻第9章、151ページ5から8行目）参照。

<sup>222</sup> 前掲書『国家（下）』529D（第7巻第11章、150ページ14から151ページ1行目）。ここでプラトンが言っている真実の数とか真実の形とは何を意味するのか不明である。そうではあるが、プラトンは、天空を図形と表し、その中で数量的な関係が真実であると見做す現状での天文学には不満を持っている。

<sup>223</sup> 前掲書『国家（下）』529D（第7巻第9章、151ページ1から2行目）。

<sup>224</sup> 前掲書『国家（下）』529Eから530A（第7巻第9章、151ページ9から11行目）。

<sup>225</sup> 前掲書『国家（下）』530B（第7巻第11章、152ページ4から6行目）。

ることになるだろう—もしわれわれがほんとうの意味で天文学研究に参加することによって、魂の内に本来そなわっている知の機能が無用の状態から救って、役に立つものにしようとするのならば」とプラトンは語る（前掲書『国家（下）』530BからC（第7巻第11章，152ページ8から12行目））。

目に見える天空は真実の天空ではなく、天空の模型によって星と星の関係から真理をその幾何学的な図形で説明しようとする姿勢をプラトンは、魂の内に内在する知の機能が無用の状態にすると考えている。

## 2.3 20歳頃から30歳：予選された者の教育（研修教育）

### （1）体験教育

学術研究を修め、哲学的問答法を学ぶ前に、子供達に体験教育を行う。その体験とは、馬上にて戦争の見学やそれに類した経験である。この期間は2年から3年ほどである。子供達がこの体育に義務づけられた期間に、どのような人柄を示すかも審査項目の一つとされる。この体験教育が終了した後に、「すべてのこれら苦労や学習や恐怖のなかで、いつも最もすぐれた適性を示す者があれば、その者を選び出して登録しておかなければならない」<sup>226</sup>とプラトンは提案する。プラトンは、「20歳となった若者のなかからとくに選び出された者たちは、他の者にまさる榮譽を受けることになるだろう」<sup>227</sup>と説明する。

### （2）総合的視力の育成

選抜された若者は、この2から3年の間で、少年期に個々に修めた数論や幾何学や天文学などの学術研究を総合化して、それぞれの学問が持っている相互の間の結びつき、また真実在との関連性を、全体的な立場から綜観させる。この期間に哲学的問答法に適した素質は身についたかどうか審査される。プラトンは、綜観する能力が「哲学的問答法に適した素質であるかどうかを試すための、最も重要な決め手となるものだ。なぜなら、総合的な視力をもつ者は、哲学的問答法の能力をもつ者であり、そうでない者は、その能力のない者だから」<sup>228</sup>と説明する。

30歳になったとき、予選された若者の中に、総合的視力を具えて、さらに学問において、また戦争その他の任務において確固とした人物がいたならば、もう一度、その素質と学問と任務において適った人達を、予選された人達のなかから選抜する。そして、「彼らを、哲学的

<sup>226</sup> 前掲書『国家（下）』537A（第7巻第16章，172ページ9から10行目）。

<sup>227</sup> 前掲書『国家（下）』537C（第7巻第16章，173ページ2から3行目）。

<sup>228</sup> 前掲書『国家（下）』537C（第7巻第16章，173ページ9から11行目）。

問答法の力によって吟味しながら、どの人間が目その他の感覚にとらわれずに、真理を伴侶としつつ実在そのものに至りうる者であるかを、よく見なければならぬだろう」<sup>229</sup>とプラトンは説明する。

### 第3項 30歳から35歳頃

この期間で選ばれた若者たちは言論の修練に与る。プラトンによると、その期間は4から6年ぐらい<sup>230</sup>とされている。実際には、4と6の中間の5年を、言論を持続的かつ集中的に修練する期間とする。また、プラトンが、30歳をすぎた若者に言論の修練を持続的集中的に行わせるのは、余りにも若いときに言論の味を覚えさせないためである。プラトンは、「年端も行かぬ者たちがはじめて議論の仕方の味をおぼえると、面白半分<sup>いざな</sup>にそれを濫用して、いつももっぱら反論のための反論に用い、彼らを論駁する人々の真似をして自分も他の人たちをやっつけ、そのときそのときにそばにいる人々を議論によって引っぱつて引き裂いたりしては、小犬のように歓ぶものだ」<sup>231</sup>と懸念し、言論の濫用を警戒する。若者が論駁し論駁されることから、「何度も何度もいろいろの仕方で論駁されたあげく、自分が教えられてきたことはなにも美しいことではなく、醜いことなのかもしれないと考えざるをえないようになり、さらに〈正しいこと〉や〈善いこと〉や、これまで最も尊重してきたさまざまな事柄についても同じことを経験する」<sup>232</sup>と、彼の生き方は追従者たちが誘う甘い生活のほうに向かう。それゆえに、プラトンは、若者が言論の濫用に陥らないように、言論を修練する者に哲学を修めるに適した素質を備えた人々に限っている<sup>233</sup>。

#### （1）哲学問答法をおさめるに適した性格

哲学者ならびに学術研究に適した素質については、すでに第2章第2節第2項の2.1で示したことであるが、ここで確認することにしよう。哲学問答法をおさめるには、第一に、幾つかの学術研究を修めるに適した素質があることをプラトンは要請している。その教育を受けるのに適した素質を列挙すると、

<sup>229</sup> 前掲書『国家（下）』537D（第7巻第16章、174ページ1から3行目）。

<sup>230</sup> 前掲書『国家（下）』539D（第7巻第18章、180ページ8から10行目）に、「言論の手練にあずかる期間としては、持続的かつ集中的にそれに専念して他のことはいっさい行わず、ちょうど先の身体の鍛錬に対応するようなやり方で修練とするならば、そのときの2倍か年数があれば充分ではないか」とある。ここで2倍の年数とは、4から6年を意味する。

<sup>231</sup> 前掲書『国家（下）』539B（第7巻第17章、178ページ16から179ページ4行目）。

<sup>232</sup> 前掲書『国家（下）』538DからE（第7巻第17章、177ページ7から11行目）。

<sup>233</sup> プラトンは、「現在のように誰でも行き当たりばったりの、まったく不適当な者がそこへ赴くことがあってはならない」と批判的である（前掲書『国家（下）』539D（第7巻第17章、180ページ4から5行目））。

①鋭敏であること (即ち、難渋して学ぶようではだめである)

②もの憶えがよい ③根性がしっかりしている ④あらゆる意味で苦勞好き<sup>234</sup>

さらに第二に、哲学的な素質 (自然的素質) が必須であり、この自然的素質を兼ね備えていない人は、哲学者には不適であると言う。本稿第1章第2節で示したように、プラトンは、哲学者を知の愛好者であるとするかぎり、あらゆるものへの愛好者と同様に、あらゆる知を愛する人であるとし、「哲学者 (愛知者) もまた、知恵を欲求する者として、ある種の知恵は欲求するがある種の知恵は欲求しないと言うのではなく、どんな知恵でもすべて欲求する人である」と哲学者を規定し、「どんな学問でも選り好みせず味わい知ろうとする者、喜んで学習に赴いて飽くことを知らない者は、これこそまさに、われわれが哲学者 (愛知者) である」と哲学者を説明し、さらに哲学者を「真実を観ることを愛する人たち」と規定する。哲学的素質のない人は支配者にも向いていないことになる。その上で、哲学者の自然的素質について、

①虚偽を受け入れることなく、これを憎み、真実を愛すること、

②哲学者たるべき魂は、記憶力のよい魂であること、

③生まれつき度を守り優雅さをそなえた精神で、

④ものわかりがよく、度量が大きく、優雅で、

⑤けっして金銭を愛し求める人間ではない

ことを挙げ、さらに、哲学という仕事は正義と勇気と節制とを愛して、哲学的素質をそなえた者<sup>235</sup>でない限り、確実に修めることはできない。上で示した一つ一つの素質は、真実在に与る魂にとって、必要不可欠であるとプラトンは言う。また哲学者の精神 (魂) は、真実在の実相へと導かれ、真実をこそ追い求めるものであり、そして哲学者は一般にあると思われる雑多な個々の事物の上にとどもって、ぐずぐずしているようなことはないだけでなく、魂の部分によって、〈まさに何々であるところのもの〉と呼ばれるべき、それぞれのものの本性にしっかりと触れるまでは、ひたすらに進み、勢いを鈍らせず、恋情をやめることはない。彼は、魂のその部分によって、真の実在に接し、交わり、知性と真実とを産だうえで、知識を得て、まことの生活を生き、はぐくまれて行く。プラトンは、真実在を追求する哲学者が国家の支配者に相応しいと言う。

<sup>234</sup> プラトンは、苦勞好きについて体育を好み狩猟を好み、身体を動かす苦勞と、人の話しを聞きこと、自分を探求することのいずれも厭わないことを言っている (前掲書『国家 (下)』535D (第7巻第15章, 168ページ2から6行目) 参照)。

<sup>235</sup> プラトンは、自然的素質について、「生来の自然的素質において記憶がよく、ものわかりがよく、度量が大きく、優雅で、真理と正義と勇気と節制とを愛して、それらと同族の者でないかぎり、けっしてじゅぶんに修めることのできないような仕事なのだ」と纏めている (前掲書『国家 (下)』487A (第6巻第2章, 28ページ2から5行目))。

## （２）哲学的問答（対話）法

この問答法を修練することが、この期間（30歳から35歳頃の期間）の目的である。ここでは、可視界からの思わくから解き放され、可知界において事物の実相を究めることが目標である。

プラトンの可知界は、思惟によって知られる世界<sup>236</sup>であるが、学術研究は、可知界の一部分である。プラトンが〈悟性的思考〉（間接知）と名付けた部分である。可知界のもう一つの部分は、プラトンに名付けられた〈知性的思惟〉（直接知）部分である。後者が哲学的問答法に関係する。学術研究と哲学的問答法には認識方法に大きな違いがある。

学術研究では、多くの仮設（仮定）が置かれて、結論を論理的に引き出すが、その様々な仮定の意味する内容は問題にしない。他方、哲学的問答法は、様々な仮設を最終的には取り払い、そもそもの原因（始原）<sup>237</sup>にまで遡って解明する思惟活動<sup>238</sup>である。ひとたび原因（万有の始原）が明らかにされると、次には、逆に「始原に連絡し続くものをつぎつぎと触れたどりながら、最後の結末に至るまで下降して行くのである」<sup>239</sup>が、その際「おおよそ感覚されるものを補助的に用いることはいっさいなく」<sup>240</sup>、ただ「〈実相〉そのものだけを用いて、〈実相〉を通して〈実相〉へと動き、そして最後に〈実相〉において終わる」<sup>241</sup>とプラトンの哲学的問答法の手順を説明している。このことから、学術研究によって考察される結果（論理的結果）より、哲学的問答法によって観得されたものの方がより明瞭（明確）にされ、知識となる。学術研究においては、さまざまな仮説をおいて考察されるがゆえに、対象についての本当の知識を得ることはない。哲学的問答法では、対象が原因（始原）に関係づけられ、知性による把握がなされ、本当の知識を観得する。

支配者になる予定の若者がこのロゴス（理）を修めることになる。この問答法では、あらゆることが実相に基づき、万物の始原から説明されることになる。これは、プラトンが洞窟の比喩で説いている似姿から、実相を究めることに通じると考えられる。善によって、美しいことが正しいことが照らし出されることになる。その正しいことや美しいことを修めることは支配者に是非必要であることは間違いないであろう。

<sup>236</sup> 学術研究をとして、人は事物（事柄）の真実在を思惟によって知ることができる。プラトンのアイデア（実相）の世界を知ることができる。その世界は、多くの仮設に支えられた世界である。プラトンは、事物（事柄）の実相を超えたものとして善のアイデア（善の実相）を思い描いていた。多分、哲学的問答（対話）法によって、プラトンは善のアイデアを知ることができると信じていたのかもしれない。

<sup>237</sup> プラトンの洞窟の比喩で、太陽にあたるのが万物の始原である。

<sup>238</sup> 前掲書『国家（下）』511B（第6巻第21章、100ページ8から13行目）参照。

<sup>239</sup> 前掲書『国家（下）』511B（第6巻第21章、100ページ14から15行目）。

<sup>240</sup> 前掲書『国家（下）』511BからC（第6巻第21章、100ページ15から16行目）。

<sup>241</sup> 前掲書『国家（下）』511C（第6巻第21章、100ページ16から101ページ1行目）。



## (3) 善のアイデア

プラトンは、哲学的問答法を通して事物・事柄を思惟することによって、人々が思わくから<sup>242</sup> 解き放された、真実在に到達しうることを示した。思わくされるものの〈思わく〉とは、可視界で経験される影あるいは影像あるいは似姿を見ることに等しく、それに対し、何かを思惟する可知界では、人々は事物・事柄の〈実相〉(真実在)<sup>243</sup> に到達することができる。さらに、プラトンは、事物の真実在(アイデア)の原因が、善のアイデア(善の実相)であると言う。プラトンは、「認識の対象となるもろもろのものにとっても、ただその認識されるということが、〈善〉によって確保されるだけでなく、さらに、あるということ・その実在性もまた、〈善〉によってこそ、それらのものにそなわらうようになるのだと言わなければならない」<sup>244</sup> と〈善〉と実在との関係を説いている。この上で、プラトンは、「〈善〉は実在のさらにはかなたに超越してある」<sup>245</sup> と善の優越性を強調する。先に言及したように、プラトンは〈善〉については説明するが、その存在を示していない。

プラトンは、〈善〉についてどのように考えているのであろうか。プラトンは、〈善〉は快樂であると言う人もいる、また知識であるという人もいると言っていると語るだけにすぎない。明確な判断を下していない。

次に、〈善〉の働きにつて説明しよう。〈善〉は、可視界における太陽に譬えられる。可視界では、太陽(の光)が見るもの(視覚)と見られるもの(対象・事物)に働き、その光で両方を照らすと、人は、見るもの(視覚)によって、見られるもの(事物)を見る。確かに、太陽は視覚ではないが、視覚の原因ではある。また太陽自体が視覚の対象である。他方、可知界では、〈善〉は知るものと知られるものに関係している。〈善〉は、認識される対象(知られるもの)には真理性を与え、認識する主体(魂)には認識機能(知力)を提供する。〈善〉は、認識と真理の原因となるが、同時、それ自身は認識の対象である。しかし、〈善〉は、認識や真理とは別のものであり、それらよりも一層美しい<sup>246</sup>。プラトンは、認識や真理と較べ

<sup>242</sup> 可視界では、事物(事柄)の真実在ではなく、影や水面に映る像や影像として説明される似姿(似像)である。これは真実ではなく、人の思わくによって描かれた像にすぎない。これから、真実在(真実)を知るためには、思惟の活動が必要になる。

<sup>243</sup> プラトン著(田中美知太郎・池田美恵共訳)『パイドーン』73Cから76D(137ページ9から145ページ8行目)において、想起によって類似した事物を知ることや、魂の不滅性を持ち出し、事物を知ること、あるいは認識することのプロセスを考察している。さらに、魂が不滅性であり非合成物であることから、『ものそのもの』の存在を説いている(同書『パイドーン』78DからE(151ページ5から17行目)参照)。

<sup>244</sup> 前掲書『国家(下)』509B(第6巻第19章、94ページ10から13行目)。

<sup>245</sup> 前掲書『国家(下)』509B(第6巻第19章、94ページ13から14行目)。

<sup>246</sup> 前掲書『国家(下)』508E(第6巻第19章、93ページ7から9行目)に「認識と真理とはどちらもかくも美しいものであるけれども、〈善〉はこの両者とは別ものであり、それらよりもさらに美しい」とプラトンは信じている。

て、〈善〉のあり方はもっと貴重なものと考えている。しかし、それ以上の証明は与えていない。

#### 第4項 35歳頃から50歳頃

##### （1）体験教育

この期間（15年間）に戦争に関する事柄の統率やその他の役職などの実務・実践を踏む。言論の修練を終えた者たちは、戦争に関する事柄の統率などの、若い者に適した役職の義務を果たし、彼らが経験の点でも、他の人々におくれをとることのないようにするためである<sup>247</sup>。同時に、若者達が実際の業務のなかで、もう一度、「あらゆる方向への誘惑に対して確固として自己の分を守りつづけるか、それとも動揺してわきへそれることがあるだろうか」ということを、試されなければならない<sup>248</sup>と支配者の選抜に慎重になっている。

##### （2）到達点：支配者へのみち

15年後に、50歳になったならば、彼らを最後の目標に導く。そして彼らが「〈善〉そのものを見てとったならば、その〈善〉を範型（模範）として用いながら、各人が順番に国家と個人々と自分自身とを秩序づける仕事のうちに、残りの生涯を過ごすように強制しなければならない<sup>249</sup>とプラトンは言う。各人は交替に国家の政治に従事することに苦勞を捧げ、国家のために支配者の役割をはたさねければならない。この役割を「何かすばらしい仕事とみなすのではなく、やむをえない強制的な仕事とみなし<sup>250</sup>、そして「つねにたえず他の人々を自分と同じような人間に教育し、自分にかわる国家の守護者を後にのこしたならば、彼らは〈幸福者の島〉へと去ってそこに住まうことになる<sup>251</sup>とプラトンは言う。

最後に、国家は彼らの為に、記念碑を建て犠牲を捧げる儀式を行い、「ビュティア（デルポイ）の神託がよしとされるなら神霊（ダイモーン）として祀り<sup>まっ</sup>、そうでなければ祝福された（エウダイモーン）神的な人々として<sup>252</sup>讃えるとプラトンは言う。

#### 第5項 50歳以後

支配者として活躍あるいは哲学に専念する。善の模範を使い、国家と国民と自身との統治

<sup>247</sup> 前掲書『国家（下）』539E（第7巻第18章、180ページ13から15行目）参照。

<sup>248</sup> 前掲書『国家（下）』539Eから540A（第7巻第18章、181ページ2から4行目）。

<sup>249</sup> 前掲書『国家（下）』540B（第7巻第18章、181ページ11から13行目）。

<sup>250</sup> 前掲書『国家（下）』540B（第7巻第18章、181ページ15から16行目）。

<sup>251</sup> 前掲書『国家（下）』540B（第7巻第18章、182ページ1から2行目）。

<sup>252</sup> 前掲書『国家（下）』540C（第7巻第18章、182ページ4から5行目）。

の仕事に就くか、あるいは哲学に専念する。

#### 第6項 何故支配者は哲学者である必要があるのか

##### (1) 守護者ならびに哲学者に適した素質が求められる

プラトンは、守護者に適した人間はどのような人であると考えているかを確認する。守護者とは、国の法律の制定や日常的に公務を果たし、国を守護する人であるが、その守護者として盲人は不適である。というのは、真実在を認識できない人々や魂に模範を示すものがない人々や美しいもの・正しいもの・善いものについてこの世の法を制定し保全し守護することのできない人々は<sup>253</sup>、守護者(支配者)には不適である。ここで、プラトンは、真実在を認識することができる<sup>254</sup>人々、さらにまた、徳性において見劣りのしない人々が守護者(支配者)に適していると考え<sup>255</sup>。国の指導者となるべき者は、哲学者に適した素質を備えた人間に限るとプラトンは主張する。哲学者に適した生まれ付きの素質については既に十分に説明した。

プラトンは、新国家を建設する者が行うべきことを説明する。第一になすべきことは、素質のある者たちが〈善〉の実相(最大の学問)を範として示せるようになるまで引き上げ、〈善〉を見るようにする<sup>256</sup>。次に、彼らが〈善〉をみたならば、再び下に降りて、市民に混じって共に生活する。このようにするのは、国の中で一部の人々が幸福になることではなく、「国全体のうちにあまねく幸福を行きわたらせる」<sup>257</sup>ことが狙いであるからである。プラトンは、支配者のみならず個々の人々も「公共の利益」<sup>258</sup>に寄与することを求めている。

プラトンは、哲学者が降りて行き、市民(大衆)と共に生活し、哲学者が大衆を導くことを期待している。プラトンは、「君たちを、君たち自身のためにばかりでなく他の国民のためにも、いわば蜜蜂の群のなかの指導者・王者となってもらうために生み出した」<sup>259</sup>と哲学者の役割を説く。そのために、「君たちは他の国の哲学者たちよりも、もっとすぐれた、もっと完全な教育を受けて、哲学と実践の両方に参与しうる能力をより多くもった人間となったのである」<sup>260</sup>とプラトンは説得を続ける。最高の学問を修め、真実在ならびに美なるものや善あるものを知る者達が支配者として国を治めると、「けっして夢まぼろしの統治とはならな

<sup>253</sup> 前掲書『国家(下)』484CからD(第6巻第1章, 19ページ14から20ページ2行目)参照。

<sup>254</sup> 前掲書『国家(下)』484D(第6巻第1章, 20ページ10行目)参照。

<sup>255</sup> 前掲書『国家(下)』484D(第6巻第1章, 20ページ5から9行目)参照。

<sup>256</sup> 前掲書『国家(下)』519CからD(第7巻第4章, 118ページ11から15行目)参照。

<sup>257</sup> 前掲書『国家(下)』519E(第7巻第5章, 119ページ11行目)。

<sup>258</sup> 前掲書『国家(下)』520A(第7巻第5章, 119ページ13行目)。

<sup>259</sup> 前掲書『国家(下)』520B(第7巻第5章, 120ページ14から16行目)。

<sup>260</sup> 前掲書『国家(下)』520BからC(第7巻第5章, 120ページ16から121ページ2行目)。

いであろう』<sup>261</sup>とプラトンは主張する。というのは、「現在多くの国々を統治しているのは、影をめぐってお互いに相戦い、支配権力を求めての党派的抗争にあけくれるような人たちであり、彼らは支配権力をにぎることを、何か大へん善いこと（得すること）のように考えている』<sup>262</sup>ような現在の統治を正すことができるであろうと真摯に考えている。

プラトンは、プラトン自身の支配者像を次のように説明する。支配者となるべき人達が、支配する権力を求めることのもっとも少ない人間である。何故そのような支配者を推すのであろうか。そのような国家こそが最も内部抗争の少ない状態で国が治まると確信しているからである。

「彼らはめいめいが、支配の地位につくことを万やむを得ない強制と考えて、そこへ赴くことでしょう。この点は、現今のどの国における支配者たちとも正反対』<sup>263</sup>である。プラトンの批判する支配者の姿は、今日の国々の支配者の姿にも、共通していると思われる。

## （2）プラトンの洞窟状の住まいの比喩

洞窟状の住まいの中に生活する囚人（束縛され身動きのできない囚人）は、振り向くこともできず、洞窟の正面にある洞窟の一部に映るものを真実であると思ひこむ。これも当然かも知れない。しかし、その中で生活する一人の囚人が向きをかえて洞窟状の住まいの入り口の方に目を向けると、その囚人は火の光を認め、壁に映る像が人間や器物の影（影像）であることを知る。さらに、その囚人がその入口の方に登り、洞窟の外に身を出すと、彼は太陽の光で目が眩むことになる。プラトンは、「太陽の光のもとまでやってくると、目はざらざらとした輝きでいっぱいになって、いまや真実であると語られるものを何ひとつとして、見ることができないのではなからう』<sup>264</sup>と説明している。よって、その囚人が上方の世界の事物を見ようとするならば、順に、影あるいは影像、そして実物を直接見上げるようにするであろう。そして、その後、「天空のうちにあるものや、天空そのものへと目を移すことになるが、それにはまず、夜に星や月の光をみるほうが、昼間太陽とその光を見るよりも楽だろう』<sup>265</sup>と説明する。「最後に、太陽を見ることができるようになるだろう』<sup>266</sup>とプラトンは説明する。そして、その太陽は影あるいは影像でなく、「太陽それ自体を、それ自身の場所において直接しかと見てとって、それがいかなるものであるかを観察できるようになるであろう』<sup>267</sup>

<sup>261</sup> 前掲書『国家（下）』520C（第7巻第5章、121ページ10から11行目）。

<sup>262</sup> 前掲書『国家（下）』520CからD（第7巻第5章、121ページ11から13行目）。

<sup>263</sup> 前掲書『国家（下）』520E（第7巻第5章、122ページ9から10行目）。

<sup>264</sup> 前掲書『国家（下）』516A（第7巻第2章、108ページ7から9行目）。

<sup>265</sup> 前掲書『国家（下）』516AからB（第7巻第2章、108ページ14から16行目）。

<sup>266</sup> 前掲書『国家（下）』516B（第7巻第2章、109ページ2行目）。

<sup>267</sup> 前掲書『国家（上）』516B（第7巻第2章、109ページ3から5行目）。

とプラトンは説明する。そして、太陽が四季と年々の移り変わりをもたらし、目に見える世界を管轄し、そして洞窟で目に見えていたすべての原因となっていると推論する。

この比喩は、囚人が向きを変えることによって、闇を見ていたことから光の方へ向きを変えることになる。この方向の転換によって、影あるいは影像（思わく）から真実在（実相）を知ることを意味する。向きを変えて、洞窟を登ることは、上に昇ることであり、それは真実在に近づくことを意味し、火の光が影をもたらしていたことを推察し、さらに昇り、洞窟の外に出て、太陽の光をたよりに洞窟の外にある事物（天空の星やあらゆる物体）を知り、太陽がすべてを照らし出し、その原因であること知る。

真実在を知り得るのは哲学者であり、その哲学者が理性による支配者にもっとも適しているとプラトンは主張する。

### 第3章 国家と正義

#### 第1節 財産と幸福

##### 第1項 財産と老人の幸福

「老いという敷居にさしかかっている」<sup>268</sup> ケパロス<sup>269</sup>に、高齢に達した心境をソクラテスが問う。彼は、一般の老人を代表して、次のように語る。老人には若い頃の快樂がないことを嘆き、「かつては幸福に生きていたが今は生きてさえいないかのように、なげき悲しむ」<sup>270</sup> 老人が多数いると語る。ケパロスは、女との交わりや酒宴や陽気に騒ぐことあるいは愛欲の情念からの解放を「無上の歓びとしているのだ。たとえてみれば、狂暴で猛々しいひとりの暴君の手から、やっと逃れおおせたようなもの」<sup>271</sup>と彼の心境を語っている。ケパロスは、多くの老人とは違って、年を重ねて老年に達することが不幸の原因ではなく、「端正で自足することを知らぬ人間でありさえすれば、老年もまたそれほど苦になるものではない」<sup>272</sup>と語る。

<sup>268</sup> 前掲書『国家（上）』328E（第1巻第2章、22ページ13行目）。この一節は、ホメロス著（松平秋平訳）『イリアス（下）』第22歌（25-76）（309ページ14目）には、「老いのしみいに立つこのきら幸薄き男」とある。また、ヘシオドス著（松平秋平訳）『仕事と日』330から335（50ページ12行目）には、「苦しみの老いのしみいに立つ年老いた父」とある。プラトンは、当時最大の二人の詩人の言葉を引用して、老いの心境を語っていると思われる。

<sup>269</sup> ケパロスは、ペリクレスの招きによって富裕な居留民として外港街ペイライエウスで生活していた。ケパロスは、弁論作家リュシアスの父であった。また、後に対話編『国家』で、ソクラテスの対話者になるポレマコスの父でもあった。

<sup>270</sup> 前掲書『国家（上）』329AからB（第1巻第3章、23ページ8から9行目）。

<sup>271</sup> 前掲書『国家（上）』329C（第1巻第3章、24ページ7から9行目）。この言葉をケパロスはソクラテスの名言から借用し使っている。

<sup>272</sup> 上掲書『国家（上）』329D（第1巻第3章、25ページ1から2行目）。



そして、彼は「老年ではなく、人間の性格なのだ」<sup>273</sup>と切り切っている。ケパロスは、老齡が不幸の原因ではなく、端正で自足することを知ると、様々な欲望から解放され、その心に自由と平和が与えられると語っている。この端正とは、女との交わりや酒宴や陽気に騒ぐことあるいは愛欲の情念からの解放されることであり、自足とは何の苦勞もなく飲食ができ健康な生活を送ることであると考えられる。

ソクラテスは、一般の老人の心境あるいは思いに寄せて、ケパロス自身が老年期を楽に堪えているのは彼の人間性あるいは性格ではなく、彼が財産をもっているからではないかと問う。「人物が立派でも、貧乏していたら、老年はあまりらくではないし、また、人物が立派でなければ、金持ちになったからとて、安心自足することはけっしてないだろう」<sup>274</sup>と彼の返答は、老年には財産が必要であるが、老年の生活が安心自足するには財産だけではなく、人物が立派であることも要件になることを含意している。

確かに、老齡者に限ったことではないが、人間が安心自足な生活のためには、人物が立派であることも必要である。それでは、何故、金儲けによって富をなしたケパロスが実利的観点からのみ語らずに、人物が立派なことも幸福に関係あると語り得たのであろうか。

ソクラテスは、財産と立派な人物のいずれ（あるいはいずれも）が人の幸福に不可欠か否かを考察する。ソクラテスは、ケパロスに老年における財産保有の効用を問う。すなわち、財産をもっていてよかったことで、一番大きなこと<sup>275</sup>を問うと、ケパロスは、あの世での罰を案じて、「ハデス（冥界）のことが前よりもよく見えるからでもあろうか、とにかく疑惑と恐れにみたされるようになり、これまで誰かに不正をおかしたことがあったかどうか、あれこれ数え上げ、調べるようになる」<sup>276</sup>と、死を直前にした人の心境について語る。彼は、自分の生涯において不正を犯していないことを幸福の要件に入れている。それ故に、その生涯に多くの不正を見出す者は「幾度となく眠りから覚めては恐れにふるえたり、暗い不安につきまともわれて生きることになる」<sup>277</sup>が、他方、何一つ不正を犯した覚えのない者には、「つねに楽しくよき希望があって、『老いの身を養って』くれる」<sup>278</sup>と続ける。生涯において不正を侵した覚えのないことが幸福であるためには必要であると語る。正しく敬虔に生涯を送った人間、すなわち立派できちんとした人間には、「お金の所有が最大の価値をもつ」<sup>279</sup>と語り、ケ

<sup>273</sup> 前掲書『国家（上）』330A（第1巻第4章、26ページ7から8行目）。

<sup>274</sup> 前掲書『国家（上）』330A（第1巻第4章、26ページ7から8行目）。

<sup>275</sup> 前掲書『国家（上）』330D（第1巻第5章、27ページ13から15行目）参照。

<sup>276</sup> 前掲書『国家（上）』330E（第1巻第5章、28ページ8から10行目）。

<sup>277</sup> 前掲書『国家（上）』330Eから331A（28ページ11から13行目）。

<sup>278</sup> 前掲書『国家（上）』331A（第1巻第5章、28ページ14行目）。プラトンは、詩人ピンダロス（Πινδαρος）（前522年／前518年-前442年／前438年）の一節から引いている。その一節とは、甘い希望が その人につき添って 心をはぐくみ 老いの身を養う、である。

パロスは、「たとえ不本意ながらにせよ誰かを欺いたり嘘を言ったりしないとか、また、神に対してお供えすべきものをしないままで、あるいは人に対して金を借りたままで、びくびくしながらあの世へ去るといったことのないようにすること、このことのために、お金の所有は大いに役立つのである」<sup>280</sup>と説明する。そして、ケパロスは、「富は、理をわかまえる者にとって最大の効用をもつ」<sup>281</sup>と結ぶ。

人間の幸福には、欲望に係わる部分としての財産と理性に係わる理との調和（バランス）の必要性を説いているのであろう。幸福の要件には、正しいこと、敬虔であること、そして財産（富）のすべてが不可欠であろう。経済学では、取引する人（主体）が、虚言することなく詐欺行為のないことを、すなわち正しい行為をすることを前提にする。プラトンは、将に、この正しいこととは何かが社会で実現しづらく、不正が横行する社会に心を痛めている。経済学が基本的に長らく前提にしている正義とは何か、あるいは正義の社会的効能に、プラトンは既に前4世紀頃に目を向けていたのであった。

## 第2節 正義をめぐる論議

### 第1項 ギリシヤ人の正義

本章第1節で見たように、端正で自足した生活を人が送るには、その要件として財産（お金）が必要であるが、しかし、財産があっても、不正を犯していると自覚する人は死後の世界（ハデス）で罰を受けるかも知れないことに怯えることになる。その恐怖から解放されるためには、この世で正しい<sup>せい</sup>生を生きることが必要となる。このケパロスの問題提起を引き受けてプラトンは、正義とは何か、不正とは何かについてを考察する。プラトンは、（当時の）ギリシヤ人の正義とは何か、不正とは何かについて認識を深めることから始め、ギリシヤの賢者の言葉から、その正義とは何であったかを紡ぎ出す。

ケパロスの問題提起において、正義とは無条件に正直な態度のことであるかどうかであった。つまり、正義とは、「ほんとうのことを言う正直な態度のことであり、誰かから何かをあずかった場合にそれを返すことである」<sup>282</sup>と無条件に言えるのか、それとも、そのような態度が「時と場合によっては、正しかったり正しくなかったりすることもありうる」<sup>283</sup>のかである。プラトンは、この問題についての考察をポレマコス<sup>284</sup>の家に集まった人々の対話<sup>285</sup>を

<sup>279</sup> 前掲書『国家（上）』331B（第1巻第5章、29ページ5から6行目）。

<sup>280</sup> 前掲書『国家（上）』331B（第1巻第5章、29ページ8から11行目）。

<sup>281</sup> 前掲書『国家（上）』331B（第1巻第5章、29ページ13行目）。理とは、知恵あるいは知識のことであるが、プラトンは、理（理知）を究める人とは、哲学者（哲学的思考を身に着けた人）のことを指しているのだろうか。プラトンは、人間の魂の理知部分を指しているであろう。

<sup>282</sup> 前掲書『国家（上）』331C（第1巻第5章、29ページ16から30ページ1行目）。

<sup>283</sup> 前掲書『国家（上）』331C（第1巻第5章、30ページ3から4行目）。

通して進める。ここで、ソクラテスに、無条件かあるいは条件付きか（時と場合によってか）と疑問を投げかけさせて、もし条件付きである場合には、あずかったものを返すことは、正義でありえないこともあり得ることを説いている。つまり、借りたものを返却する相手が、正気な者から狂人に変身していたような場合には、その狂人に借りていた刃物や武器を返すのは正しいとはいえないと説くのであった。これに対して、ポレマルコスは、「それぞれの人に借りているものを返すのが、正しいこと」<sup>286</sup>であると反論する。

ポレマコスのこの言葉は、実は、「賢くて神のような」<sup>287</sup> 詩人シモニデスの言葉であるが、この言葉の解釈として、「人は本来、自分の友に対して、何か善いことをなし、悪いことはけっしてなさぬということを、借りとして負っているという」<sup>288</sup> こととポレマコスは説く。この説明で、友という言葉に疑念を抱くソクラテスは、そのものを借りていた人が敵であるとき、その敵に何を返すことになるかと問う。その敵に相応しいものを返すことになると思われるが、「相手に本来ふさわしいものを返し与えるのが正しい」<sup>289</sup> とポレマコスは説明する。

ポレマコスとソクラテスの対話を通して、プラトンは、正義とは「友と敵に対して、利益と害悪を与える技術」<sup>290</sup> を結論して引き出す。ソクラテスの同時代のギリシヤ人の正義とは、ポレマコスの解釈が正しければ、友には善い（利益）ことを与え、敵には悪い（害悪）

<sup>284</sup> ポレマコスは、ケパロスの息子で長男であった。プラトンの『パイドロス』257B（85 ページ 11 行目）において、ポレマコスについて「彼の兄ポレマコスが、すでに哲学のほうに心を向けておりますのと同じように、彼をこの愛知のいとなみのほうに向かわせてください」と取り上げられている。ここで、彼とは、ポレマコスの弟リュシアスである。またポレマコスは、前 404 年に 30 人政権（30 人寡頭政治）に財産を没取され、処刑されている。

<sup>285</sup> 対話編『国家』の全対話がポレマコスの家で行われた。ポレマコスは、『国家』の冒頭から判断するに、ソクラテスと親しかったと思われる。

<sup>286</sup> 前掲書『国家（上）』331E（第 1 巻第 6 章、31 ページ 10 行目）。プラトンは、この一節は、詩人シモニデス（あるいはシモニデース）(Σιμωνιδης)（前 556 年頃-前 468 年）から引いていると書いているが、この断片は、現在、残っていないようである。これがシモニデスの詩の断片（の一節）であるかどうかは分からない。またプラトンは、彼の対話編（藤沢令夫訳）『プロタゴラス—ソフィスト—』339A（26、94 ページ）において、シモニデスの詩を引いている。その詩は、ソフィストのプロタゴラスの語りを通して、シモニデスがテッサリアのスコパスに献じた詩である「まことにすぐれた人になることこそはむずかしい」を引いている。この詩の解釈を廻るソクラテスとプロタゴラスの間答について、ヒッピアス（Ἰππίας）（前 5 世紀の中頃（前 460 年頃）生、没年はソクラテスの没年（前 399 年）頃）を仲裁者にして描いている。プラトンが生活していた時代には、詩が教養の源泉であったのかも知れない。

<sup>287</sup> 前掲書『国家（上）』331E（第 1 巻第 6 章、31 ページ 13 行目）。

<sup>288</sup> 前掲書『国家（上）』332A（第 1 巻第 6 章、32 ページ 11 から 13 行目）。

<sup>289</sup> 前掲書『国家（上）』332C（第 1 巻第 7 章、33 ページ 11 行目）。

<sup>290</sup> 前掲書『国家（上）』332D（第 1 巻第 7 章、34 ページ 12 行目）。プラトンは、正義を一種の技術として捉えている。正義が技術の一種であるという規定は、正義が生産されるものであることを意味しているのかと解釈されうる。プラトンの論理では、正義は、社会的にあるいは個人的に生産されうると考えているのかも知れない。

ことをなすこと<sup>291</sup>と解釈される。しかし、プラトンは、これを詩人シモニデスの解釈として示された正義論には賛同しない。同時代のギリシヤ人の正義論に異論を唱える。シモニデスの詩を、友には善をなし敵には悪をなすと、解釈することにプラトンは納得しない。彼は、友とは誰か、また敵とは誰かに疑念を抱き、善人と思われている人を友と言ひ、悪人と思われる人が敵になるのではないかと説明する。同時代人のギリシヤ人の正義論を「人は相手を善い人間だと思ふ場合に、その人間を友として愛し、悪い人間だと思ふ場合に、敵として憎む」<sup>292</sup>のではないかと問う。ここで大切なのは、友と思うときに友となり、敵と思うときに敵となることである。プラトンは、人間の判断には誤りが有り得ると指摘し、「よく判断を誤り、実際には善い人間でないのにそう思ったり、あるいはその反対だったりすることが、しばしばあるのではないか」<sup>293</sup>と認識論を展開する。

人間の判断に誤りがある限り、事実として「善い人間が敵であり、悪い人間が友である」<sup>294</sup>という場合も生じる。この場合には、悪い人間を利し善い人間を害することも有り得る。この懸念から、同時代のギリシヤ人の正義論に、「悪い人間が益し、善い人間が害するのが正しいことなのであろうか」<sup>295</sup>と反論する。この悪人が友で善人が敵とする正義論とは矛盾である。そうすると、「善い人間が敵であり、悪い人間が友である」は否定されることになる。結局、正義とは「不正な人間を害し、正しい人間を益する」<sup>296</sup>ことになる。

このように、人間の判断が誤りに陥ることの可能性がある限り、詩人シモニデスの言葉から引き出される正義をもとにするポレマコスの正義論には矛盾が内包する。その矛盾を回避するためにポルマルコス「善い人間だと思われ、しかも実際にそうであるような者が〈友〉である」<sup>297</sup>と修正し、その上で、「善い人間だと思われてはいるけれども、実はそうではないような者は、友であると思われているだけで、ほんとうの友ではない」<sup>298</sup>とし、友となるのは必ず善い人間であり、敵となるのは悪い人間であると訂正する。このように友あるいは敵を

<sup>291</sup> プラトン著 (藤沢令夫訳) 『メノン—徳について—』 71E (13 ページ 5 から 7 行目) において、メノンは男の徳を「国事を処理する能力をもち、かつ処理するにあたって、よく友を利して敵を害し、しかも自分はなにひとつそういう目にあわぬように気をつけるだけの能力をもつこと」と言っている。また、クセノボン著 (佐々木理訳) 『ソクラテスの思い出』 第 2 巻第 3 章 14 から 15 (86 ページ 15 から 16 行目) において「敵には先んじて害を加え、友には先んじて善を施す男が、最高の賞讃に値するものと思われる」とある。プラトンが生活していた同時代のギリシヤ人には、友を利し敵には害を加えるということが一般的であったと考えられる。

<sup>292</sup> 前掲書『国家 (上)』 334C (第 1 巻第 8 章, 41 ページ 5 から 6 行目)。

<sup>293</sup> 前掲書『国家 (上)』 334C (第 1 巻第 8 章, 41 ページ 7 から 8 行目)。

<sup>294</sup> 前掲書『国家 (上)』 334C (第 1 巻第 8 章, 41 ページ 10 から 11 行目)。

<sup>295</sup> 前掲書『国家 (上)』 334C (第 1 巻第 8 章, 41 ページ 13 から 14 行目)。

<sup>296</sup> 前掲書『国家 (上)』 334D (第 1 巻第 8 章, 42 ページ 7 から 8 行目)。

<sup>297</sup> 前掲書『国家 (上)』 334E (第 1 巻第 8 章, 43 ページ 5 行目)。

<sup>298</sup> 前掲書『国家 (上)』 335A (第 1 巻第 8 章, 43 ページ 6 から 7 行目)。

訂正し、ポレマルコスはその正義論を、すなわち友には善いことを与え、敵には悪いことをなすことが正しいという正義論とされた。また、この正義論が当時のギリシヤ人達のものであった。

## 第2項 正義とその社会的有用性

詩人シモニデスの言葉、つまり「それぞれの人に借りているものを返すのが、正しいこと」をめぐる対話から引き出されたポレマコスの（修正された）正義論（友には善いことを与え、敵には悪いことをなすことが正しい<sup>299</sup>）に同意し、次に、正義の人の役割について考察する。プラトンは、ポレマコスの正義から、正義の人とは、友を利し敵を害する能力<sup>300</sup>あるいは技術のある人であるという見解を提示し、そして正義の人を、医者や料理人や舵取り人（船長）と比較し、正義の人の社会的有用性を提案する。たとえば、戦いにおいて、敵を攻撃し、味方とは協力する能力を持つ人が正義の人になると解釈する。この解釈からすると、戦いのない社会における<sup>301</sup>正義（正義の人）の有用さはどうなるのであろうか。このとき、「戦っていない人々には正義の人は無用である」<sup>302</sup>のか否かと問う。平和なときにおいても正義の人は有用であり、正義の人は、医者や船長や料理人などと同じように社会的に有用<sup>303</sup>であると言う。医者や船長の技術は、その技術を使用するときに有用さが示され、正義の人の有用さは守り保管するときに現れると言う。たとえば、取引の際に貨幣（その際に使用される金や銀）を使用するが、このとき正義の人の有用さは、「お金をあずけたり保管したりしなければならぬとき」<sup>304</sup>に現れ、正義とは「友と敵に対して、利益と害悪を与える技術」<sup>305</sup>と規定し、さらに正義の人は、何かを保管し預かるときに、社会的に有用であると説明するが、しかし、この場合には、正義は、何かを保管する時には有用であるが、しかし、その何かを使用するときには、正義の人は無用になる。

この点についてのプラトンの見解を見てみよう。プラトンは、何かを使用するときには、その道の専門家（医者や船長や靴職人など）の方が正義の人よりも社会的に有用<sup>306</sup>であると

<sup>299</sup> これは、『友に益し敵を害すのが正しいことだ』である（前掲書『国家（上）』336A（第1巻第9章、47ページ13行目））。

<sup>300</sup> この能力とは、戦いにおいて相手を攻撃することであり、味方に協力することである。

<sup>301</sup> この社会について、ソクラテス（つまりプラトン）は、「契約」すなわち、「いっしょに組んで何かをすること」と捉えている（前掲書『国家（上）』333A（第1巻第7章、36ページ12から15）参照）。

<sup>302</sup> 前掲書『国家（上）』332E（第1巻第7章、35ページ12行目）。

<sup>303</sup> 前掲書『国家（上）』332Cから332E（第1巻第7章、34ページ1から35ページ4行目）参照。

<sup>304</sup> 前掲書『国家（上）』333C（第1巻第7章、38ページ3行目）。ポレマコスの規定からすると、貨幣（金や銀）を保有する時には、相手に取られないように金や銀を守り、金や銀を預けている者にことを行う人は正義の人である。

<sup>305</sup> 前掲書『国家（上）』332D（第1巻第7章、34ページ12行目）。



主張する。たとえば、鎌を使用する場合には、正義よりも葡萄を刈り込む技術の方が有用である<sup>307</sup>。だが、鎌を守って保管する場合には、正義のほうが有用である。これを踏まえて「正義とは、それぞれのものの使用にあたっては無用、不用にあたっては有用なもの、ということになる」<sup>308</sup>とポレマコス主張する。あらゆるものの使用に当たっては、そのものの専門家の技術が使われるので、正義という技術はものの使用においては不用になるという主張である。

ソクラテス（すなわちプラトン）は、このポレマルコスの正義の有用さに納得しない。お金を守ることが正義であるならば、お金を盗む<sup>309</sup>ことも正義になり、そして、保管するときに正義が有用となるという規定から、「正義の人の正体は、一種の盗人であると判明した」<sup>310</sup>と結論を導き出し、正義とは、友を利し敵を害するためのものであり、盗みの術の一種であると引き出した。しかし、この規定は、盗人が正しい人であることを正当化することになるので、ポレマルコスは、正義の人が一種の盗人であるというソクラテスの結論には反対した。

守る人が盗人である可能性を考慮して、再び、ポレマルコスは、正義とは、友を利し敵を害することを保持して、その上で、友とは誰か、あるいは敵とは誰かをより正確に折り込んだ正義の定義を示している。ポレマコスは、「善き人間であるところの友に対しては善くしてやり、悪しき人間であるところの敵には害を与える」<sup>311</sup>ことを正義であると修正した。

ポレマコスの修正あるいは訂正においても、友を利し、敵を害することが正義とされている。敵は悪であるから、害するのが正しいと言うのがポレマコスの正義であろう。この定義

<sup>306</sup> たとえば、友や敵が病んでいるときには、友に善をなし敵に悪をなすことができるのは、医者である。このとき使用されるのは医術であって、正義ではない。難破状態にある船に善いことと悪いことをなせるのは船長（舵取り人）である。このとき使用されるのは航海術であって、正義ではない。この点で注意しなければならないのは、プラトンは貨幣のもっている機能を充分に理解していない点である。プラトンは金や銀を価値尺度としては認めているが、交換の媒介手段であることの社会的有用性を認識していない。金や銀が交換の媒介手段として使用される社会では、交換に要する時間をかなり短縮できることによる利益をプラトンは認識していない。この点を認識しているならば、取引において貨幣を保管している人は、売り手にも買い手にも、利益を与えることができた。この場合には、貨幣は友にも相手（敵）にも利益をもたらす者となるであろう。正義の人は、友にも敵にも利益を与える。このことは、貨幣の保有においても、その使用においても、貨幣（金や銀）の保有者は正義の人で有り得ることを示している。

<sup>307</sup> 前掲書『国家（上）』333D（第1巻第7章、38ページ10から12行目）参照。

<sup>308</sup> 前掲書『国家（上）』333E（第1巻第7章、39ページ2から3行目）。

<sup>309</sup> プラトンは、軍隊の有能な守り手は、相手から情報や計画を盗む取り手でもあることから、お金の守り手はお金の盗み手であると譬えている。筆者には、この比喩は、やや強引な気がする。

<sup>310</sup> 前掲書『国家（上）』334A（第1章第8章、40ページ8行目）。プラトンは、拳闘や闘技等の闘いにおいて相手を打つことに最も能力のある人は、守ることにかけて最も有能であると想定して、戦いにおいて敵の計画を盗むことにかけて最も有能な盗人は、軍隊の最も有能な守り手であると引き出し、お金を守ることにすぐれている人は、お金を盗むことにも有能であるという結論を引き出している。

<sup>311</sup> 前掲書『国家（上）』335A（第1巻第8章、43ページ15から16行目）。

では、社会に存在する敵（悪）を正すことはできない。悪を害することが正しいのであれば、悪は更に悪化することになることが正しい事になる。ポレマコスの正義では、正しいこと、あるいは正義は、社会に蔓延る悪を根絶やしにすることであることにはならない。プラトンの正義を廻る考察は終わらない。

### 第3項 正義と知者

ポレマルコスの修正あるいは訂正された正義においても、正義の人が敵を害することが正しいとしている。プラトンは、これに異議をとるが、正義の人が敵を害することに疑問を投げかける。プラトンは、二点から疑問を抱く。第一は、人間は害されると、善くなることはなく、逆に、さらに悪くなるのではないか、第二に、正義の人は人を害するであろうか、たとえその人が敵であったとしても正義の人は害することはないのではないだろうか、この二点である。プラトンは、前者については、「人間は害されると、人間としての善さ（徳）に関して、前よりも悪くなるのではないか」<sup>312</sup>と、後者については、「正しい人間は、自分が身につけているその〈正義〉によって、人を不正な者にすることができるだろうか」<sup>313</sup>と指摘する。正義の人は、正義（の技術）によって、人を不正な者にすることができるであろうか、否、できない。プラトンは、「一般的に言って、善き人間は、その善さ（徳）によって、人を悪い人間にすることができるだろうか」<sup>314</sup>と反問し、「害するということは、善き人のはたらきではなくて、その反対の性格の人ののはたらきなのだ」<sup>315</sup>とプラトンは結ぶ。すなわち、「相手が友であろうが誰であろうが、およそ人を害するということは、正しい人のすることではなくて、その反対の性格の人、すなわち不正な人のすることなのだ」<sup>316</sup>と結論する。

ソクラテス（すなわちプラトン）は、詩人シモニデスの一節「それぞれの人に借りているものを返すのが、正しいこと」<sup>317</sup>を再び引いて、これを「正しい人間は敵に対しては害をなし、友に対しては益をなすことを〈借り〉として義務づけられている」<sup>318</sup>と解釈する人がいる

<sup>312</sup> 前掲書『国家（上）』335C（第1巻第9章、45ページ1から2行目）。

<sup>313</sup> 前掲書『国家（上）』335CからD（第1巻第9章、45ページ14から15行目）。

<sup>314</sup> 前掲書『国家（上）』335D（第1巻第9章、45ページ15から16行目）。

<sup>315</sup> 前掲書『国家（上）』335D（第1巻第9章、46ページ8行目）。

<sup>316</sup> 前掲書『国家（上）』335D（第1巻第9章、46ページ13から15行目）。この考えは福音書で示されたイエスの考えに類似している。たとえば、『ルカによる福音書』第6章第27節から31節に、「敵を愛し、憎む者に親切にせよ。のろう者を祝福し、はずかしめる者のために祈れ。あなたの頬を打つ者にはほかの頬をも向けてやり、あなたの上着を奪いとる者には下着をも拒むな。あなたに求める者には与えてやり、あなたの持ち物を奪う者からは取りもとそうとはするな」とある。プラトンと同様に、敵に対して害をなすことを禁止している。敵を害することは正しい人のなすことではないとプラトンは言い張っている。

<sup>317</sup> この言葉は、詩人シモニデスのものであった。

<sup>318</sup> 前掲書『国家（上）』335E（第1巻第9章、47ページ2から3行目）。

が、そのような解釈は誤り<sup>319</sup>で、その解釈は知者のものではないと結論する。その解釈は間違っている。というのは、正しい人は人を害することはできないからである。正しい人はどのような人をも害することはできないのである。すなわち、正しい人は、相手が友であろうとも敵であろうとも、人を害することできない。正義は人間としての徳の一つであるからである。また、プラトンは「もしシモニデスなり、ピアスなり、ピッタコスなり、あるいはその他いやしくも知者として祝福されている人たちの誰かがそんなことを言ったなどと、主張する者がもしいたら、ぼくと君とは力を合わせて、その者と戦わなければなるまい」<sup>320</sup>と説いて、プラトンは、知者が誰に対しても害をなさないことを確信する。

プラトンは、『友を益し敵を害するのが正しいのだ』と主張するのは、「ペリアンドロスか、ベルディッカスか、クセルクセスか、テバイのイスマニアスか、とにかくお金を持っていて、自分に大した力があると思こんでいる人の言った言葉だろう」<sup>321</sup>と言って、これも正義や

<sup>319</sup> というのは、正しい人は、相手を害することによって、その人を不正な人にするにはできない。

<sup>320</sup> 前掲書『国家(上)』335E(第1巻第9章、47ページ8から11行目)。この引用文に引かれている知者ピアス(Biaç)は、一般に、ギリシヤの七賢人の一人として知られている。ディオゲネス・ラエルティオス著(加来彰俊訳)『ギリシヤ哲学列伝(上)』第1巻第5章ピアス(77から82ページ)において、ピアスを紹介している。ディオゲネスによると、ピアスはブリエネの人で、サテュロスによって七賢人の筆頭にあげられている。また、彼の金言として「たいていの人間は劣悪である」を紹介している(前掲書『ギリシヤ哲学者列伝(上)』(81ページ16行目)。また、ピッタコス(Πιττακός)(前650年頃-前570年没)は、レスボス島の僭主メラクロスを武力で倒し、ミュティレネの支配者になった。彼もギリシヤの七賢人の一人である。ピッタコスについても、ディオゲネス・ラエルティオス著(加来彰俊訳)『ギリシヤ哲学列伝(上)』第1巻第4章ピッタコス(70から76ページ)において紹介されている。ディオゲネスによると、「ミュティレネの人びとはピッタコスをたいへん尊敬していて、国の統治を彼の手ゆだねた。彼は10年間支配者の地位につき、国制を秩序あるものにした上で、支配の座を降りたが、その後もう10年間彼は生きのびた。そこでミュティレネの人びとは彼に一区画の土地を贈ったが、彼はこれを聖なる土地として神に献納した。これは今日でもピッタコスの土地と呼ばれている」と記している(上掲書『ギリシヤ哲学者列伝(上)』(70ページ15から71ページ3行目))。プラトンは、前掲書『プロタゴラス—ソフィストたち—』343B(28, 107ページ14行目)において、ピッタコスを7賢人の一人として挙げ、彼の文句、「すぐれた人であることは難し」を引用している。

<sup>321</sup> 前掲書『国家(上)』336A(第1巻第9章、47ページ16から48ページ2行目)。この引用で例示されているペリアンドロス(Περίανδρος)(前625年-前585年ころ)は、コリントスの僭主(独裁僭主)である。彼は、僭主制を保持させる方法を工夫した僭主としてアリストテレス(『政治学』1313aから1313b(第5巻第11章、270ページ7から271ページ2行目))によって紹介されている。その方法とは、「秀でた者たちを刈り取り、思い上がった者たちを片づけること」、また、「共同食事も政治的クラブも教育もその他の同様なものも許さない」で、「思い上りと相互の信頼とがそこから生じてくるのを常とする一切のものに注意して、研究会やその他の学問的な集いがなされるのを許さず、また凡ての人々を互に出来るだけ面識のない者とするための凡ゆる手段を講ずること」とアリストテレスは書いている。またベルディッカス(前450年から前413年ころ)は、マケドニアの王、クセルクセス(在位、前486年から前465年)は、ペルシャ帝国の王であった。テバイのイスマニアスは、テバイの民主派、反スパルタ派の指導者で、アテナイの30人政権支配体制のとき、テバイに逃れたアテナイの民主派の人々を保護した人物であろう。プラトン(藤原令夫訳)『メノン』90A(83ページ2行目)にテバイのイスマニアスは、「最近ポリュクラテスの金を手に入れた例の

不正の規定としては不適切と主張する。

プラトンは、知者は敵をも害さないのが正義である主張する。多分、この知者は哲学者をも含めているのであろうと思われる。知者（哲学者）は人を害しないと、プラトンは正義を定義するのであろう。多分、このプラトンの正義は、現実のギリシャ社会には受け入れられない正義であったであろう。実際、次の項で取り上げるように、ソフィストの反論が前進を阻む。

#### 第4項 正義と強者あるいは支配者：トラシマコスの正義論

プラトンは、知者はいかなる人に対しても害をなすことはない、すなわち、たとえ敵あるいは悪人に対しても害をなさいと結ぶ。プラトンは、ソクラテス同様に、知者は敵を害しないと確信する。

詩人シモニデスなどの古代ギリシャ人あるいはギリシャの知者をめぐる議論を終え、次に、プラトンは、ソフィストとして知られていたトラシマコス<sup>322</sup>が主張する正義、つまり、「〈正しいこと〉とは、強い者の利益にほかならない」<sup>323</sup>が正義の定義として優れているかどうかについて考察する。

トラシマコスは「もろもろの国家のなかには、僭主独裁制の政治が行われている国もあり、民主制の政治が行われている国もあり、貴族制の政治が行われている国もある」<sup>324</sup>が、こ

---

テバイのイスメニアス」と書かれている。

<sup>322</sup> プラトン著（藤沢令夫訳）『パイドロス』267CからD（114ページ11から16行目）において、ソフィストの一人であったトラシマコスの見解が示されているが、それは、「老年や貧困に言及して憐れみの涙をよぶ話術にかけては、ほくのみるところでは、あのカルケドン人の力量には誰もかなわないであろうね。他方同時に、この男は、大ぜいの人の怒りをかきたてること、そして怒らせておいてもう一度、呪文でもかけるようにして魅惑することの達人でもある—自称するところによればね。さらに、どこからでも理由を見つけてきて、人を攻撃したり、攻撃された中傷を反駁したりすることにかけても、彼の右にでる者はいない」である。トラシマコスは、憐れみの涙を呼ぶ話術に長けていた弁論家であったと思われる。

<sup>323</sup> 前掲書『国家（上）』338C（第1巻第12章、55ページ10行目）。

<sup>324</sup> 前掲書『国家（上）』338D（第1巻第12章、56ページ7から9行目）。トラシマコスは、彼自身が目にしている国の国制を問題している。プラトンは、哲人王が支配する国制を最優秀支配制と呼び、理想型の国制とし、逸脱した他の国制として4つ、つまり名誉支配制、寡頭制、民主制、そして僭主（独裁）制の国制を『国家』第8巻ならびに第9巻（『国家（下）』544Aから592B（第8巻から第9巻、186ページ336ページ））において取り上げている。哲人王支配体制（優秀支配者国制）は、主にその第4巻から第7巻において、展開されている。厳密には、プラトンの国制の中では、トラシマコスの貴族制に対応する国制は取り上げられていない。彼の貴族制は、恐らく、プラトンの優秀支配者国制と寡頭制の中間にあたる国制であろうと推察される。この中間の国制は、クレタあるいはスパルタの国制（名誉支配制）に対応していると考えられる。この国制は、「悪いものと善いものが混合されている国制」で、「気概の性格が支配的であることから由来しているただ一つの点」が最も際立った特徴で、「勝利と名誉を愛し求める」（前掲書『国家（下）』548C（第8巻第4章、200ページ7から11行目））。

プラトンの国制を見てみよう。「まず、多くの人々から賞讃されているところの、かのクレタおよびスパ

これらの国々で権力を握っている強い者は「ほかならぬその支配者」<sup>325</sup>である事実から、彼は、この強い者としての支配者の利益になることが正しいことであると主張する。トラシマコス、支配者あるいは支配者階級は「自分の利益に合わせて法律を制定する」<sup>326</sup>だけではなく、「そういうふうには法律を制定したうえで、この、自分の利益になることこそが被支配者たちにとって〈正しいこと〉なのだ」と宣言し、これを踏みはずした者を法律違反者、不正な犯罪人として懲罰する<sup>327</sup>階層（種族）として支配者を認識する<sup>328</sup>。この現実認識を覆すことは困難であるが、プラトンは、ソクラテスとトラシマコスとの間での対話を通して、正義

---

ルタふうの国制である。それから、第二番目の国制は第二番目に賞讃されるもの、〈寡頭制〉と呼ばれる国制であり、これはじつに多くの悪をはらんでいる国制だ。それから、その敵対者であり、それについて生じてくる〈民主制〉。そして、これらすべての国制にたちまさる高貴な〈僭主独裁制〉、これが四番目にあつて、国家の病として最たるものだ（前掲書『国家（下）』544C（第8巻第1章、189ページ3から8行目）。そして、寡頭制は「財産の評価にもとづく国制」で、「金持ちが支配し、貧乏人は支配にあずかることのできない国制」（前掲書『国家（下）』550D（第8巻第6章、206ページ10から11行目）参照）である。寡頭制は名誉支配制（スパルタふうの国制）から変化した国制である。民主制は寡頭制から変化する国制である。次に、民主制から僭主独裁制が生じる。

各国制下の人間の性格に関するプラトンの理解を見てみよう。プラトンは、優秀者支配制に対応する人間については、第5巻から第7巻で詳細に述べ、そこで示した「人間を善くかつ正しい人間」と主張している（前掲書『国家（下）』544E（第8巻第2章、190ページ14行目）。「スパルタふうの国制に対応する人間としての、勝利を愛し名誉を愛する人間」（前掲書『国家（下）』545A（第8巻第2章、191ページ2から3行目）が名誉支配体制の人間の大きな特徴である。その他では、「勝気」で、「いささか教養にとほしく、話しを聞くのはすきだが、自分が弁論の能力のある人間ではけしていない」、「支配者たちには従順であり、権力欲がつよく名誉ほしがり、「体育を愛し、狩猟を愛するような人間」である（前掲書『国家（下）』548Dから549B（第8巻第5章、201ページ6から203ページ2行目）参照）。寡頭制の人間は、「何よりも金を大事にする」、「けちで働き者である」、「どんなことからでも利益をあげては倉を立てるような人間」で、「あるものは乞食としての欲望、他のものは悪者としての欲望」が分裂抗争する「一人の人間ではなく二重人格の人間」でもある（前掲書『国家（下）』554Aから554D（第8巻第9章、217ページ6から219ページ15行目）参照）。プラトンは、民主制における人間を不必要な欲望に駆られた人間であると理解している。「金と労力と時間を費やしながら生きて行く」、「もろもろ快樂を平等の権利のもとに置いたうえで暮して行くことになる」。すなわち、「あたかも籤を引き当てるようにしてそのつどやってくる快樂に対して、自分が満たされるまでの間、自分自身の支配権を委ね、つぎにまた別の快樂に対してそうするというように、どのような快樂をもないがしろにすることなく、すべてを平等に養い育てながら生活する」と民主制下の人間を捉えている（前掲書『国家（下）』561AからB（第8巻第13章、238ページ8から239ページ1行目）参照）。

<sup>325</sup> 前掲書『国家（上）』338D（第1巻第12章、56ページ11行目）。

<sup>326</sup> 前掲書『国家（上）』338D（第1巻第12章、56ページ13から14行目）。

<sup>327</sup> 前掲書『国家（上）』338E（第1巻第12章、56ページ15から57ページ2行目）。

<sup>328</sup> トラシマコスは、僭主独裁制では僭主独裁者の利益になる法律が制定され、民主制では民衆の利益になるように民衆中心の法律が制定されていると認識していた。その上で、支配者（僭主独裁者あるいは民衆）の利益になることが被支配者にとって正しいことであるとトラシマコスは宣言しているのである。この見解にプラトンは賛同することなく、さらにトラシマコスの正義論は誤っていることを証すことがプラトンとトラシマコスの対話の中心をなしている。



の意義を政治領域に拡げて、正義の社会的な役割を考察し検討する。

トラシュマコスの正義論の主旨を、正しいこととは「現存する支配階級の利益になることにはかならない」<sup>329</sup>とプラトンは理解する。事実、トラシュマコスにとっては、支配者（支配階級）は権力を持っていて強い者であり、そして、この強い者の利益になることが正しいと認識している。この正義論を廻って、プラトンは、トラシュマコスの正義論が真実（真理）であるか否かについてソクラテスとトラシュマコスの間での問答を通して考察する。

ソクラテスは、〈正しい〉ことが利益になるという点にはトラシュマコスの見解に賛成するが、この見解において問題になる論点は、強い者が正しいのか否かである。強い者がいつでも正しいとは限らない場合がある。強い者とは支配者であるとするならば、支配者は、いつも正しいか否かを考察する必要がある。もし強い者（すなわち支配者）の判断が誤ることがあるならば、その場合には、強い者（支配者）にとって不利益になることが正しいことになるであろう。またトラシュマコスの考えでは、支配される人が支配者に従うことが正しいことにされるから、判断が誤る場合には、支配者の誤った判断にもとづく指示に被支配者が従うことになる。この場合には、支配者（強い者）には不利益になることを弱い者（すなわち被支配者）が行うことが正しいことになる。つまり、「支配者たちは、被支配者たちに対して何ごとかをなすように命じるに際して、何が自分たちにとって最善であるかを見そなうことがある」<sup>330</sup>ことである。「被支配者たちにとっては、支配者の命じることなら何でも行なうのが正しい」<sup>331</sup>のであるから、この場合には、強い者たちあるいは支配者たちに不利益なことを行うことが〈正しいこと〉ことになる。プラトン（ソクラテス）は、トラシュマコスの正義論が矛盾することを指摘する。支配者の判断が誤る場合には、支配者（強い者）が意図することなく、自身に不利益なことを命じる場合があるので、支配者（強い者）の意図とは反対のことを行うことが正しいことになり、そのことを被支配者に命じて行わせることは、強い者の不利益をもたらすことになる。結局、トラシュマコスの正義論では、「支配者たちによって命じられたことを行なうのが正しいこと」<sup>332</sup>であり、あるいは、「強い者の利益になることが正しいこと」<sup>333</sup>である。この上で、この両者を前提にして、「強い者はときによって、自分の不利益になる事柄を行なうように弱い者・被支配者に命じることがある」<sup>334</sup>となる。プラトンは、「強い者の不利益になる事柄も、利益になる事柄も同様に、〈正しいこと〉であ

<sup>329</sup> 前掲書『国家（上）』339A（第1巻第12章、57ページ4から5行目）。

<sup>330</sup> 前掲書『国家（上）』339D（第1巻第13章、59ページ13から14行目）。

<sup>331</sup> 前掲書『国家（上）』339D（第1巻第13章、59ページ15から16行目）。

<sup>332</sup> 前掲書『国家（上）』340A（第1巻第13章、61ページ3行目）。

<sup>333</sup> 前掲書『国家（上）』340B（第1巻第13章、61ページ5行目）。

<sup>334</sup> 前掲書『国家（上）』340B（第1巻第13章、61ページ7から8行目）。

る」とトラシュマコスの正義論の矛盾を証す(前掲書『国家(上)』339B(第1巻第13章, 61ページ9行目))。

トラシュマコスの正義において強い者あるいは支配者が誤りを犯す可能性を認める限り、彼の正義論は不正確になるので、ソクラテスは、強い者あるいは支配者<sup>335</sup>は誤りを犯さないと修正し、「支配者は、支配者たるかぎりにおいては誤ることがない、そして誤ることがない以上、支配者が法として課するのは、自分にとって最善の事柄であって、それを行なうのが被支配者のつとめである」<sup>336</sup>とトラシュマコスの(厳密な意味<sup>337</sup>において)正義論を修正する。この修正されたトラシュマコスの正義論では、支配者は、専門家や知者と同様に、誤りを犯さない存在とされた。この修正において、トラシュマコスは、「強い者の利益になることを行なうこと」あるいは「強い者の利益になること」であると正義を規定した。

#### 第5項 正義と利益：支配の実態

前項で示した厳密な意味でのトラシュマコスの正義論における正義を踏まえて、その正義論における正義の意義を考察し検討する。厳密な意味でトラシュマコスは正義を規定し、支配者あるいは強い者が誤りをおかさないという前提の下で、正しいとは、強者の利益になることである。

この修正されたトラシュマコスの定義を廻って、ソクラテスとトラシュマコスは、問答を通して、正義について、さらに考察し検討する。プラトンは、支配が支配者の利益を目指すことではなく、支配される者の利益を目指し実現することであると確信しているので、支配を一種の技術と見立て、医術や操舵術と同様に、その対象者の利益を目指すものであるという事実から、トラシュマコスの正義論の検討を始める。

ソクラテスによると、正義は、既に見たように、一種の技術であって、医術や操舵術や牛飼いの術や羊飼いの術などと同じように、技術としての特性を備えている。ソクラテスの議論は技術一般から具体的な技術へと議論を進める方法である。ソクラテスは、「技術が探究する利益とは、その技術がはたらきかける対象にとって利益になること以外にはないはずだ」<sup>338</sup>

<sup>335</sup> プラトンは、専門家や知者と同様に、「一国の支配者たる者も、支配者であるかぎりは、決して誤ることはない」と想定している(前掲書『国家(上)』340E(第1巻第14章, 12から13行目))。

<sup>336</sup> 前掲書『国家(上)』341A(第1巻第14章, 64ページ1から3行目)。

<sup>337</sup> ソクラテスとトラシュマコスの間の問答では、普通の意味での「支配者」・「強者」と厳密な意味での支配者・強者の違いがある。普通の意味では、誤りをおかす支配者・強者を意味するが、厳密な意味での支配者・強者は誤りをおかさない専門家・知者のように看做される。

<sup>338</sup> 前掲書『国家(上)』342B(第1巻第15章, 68ページ15から16行目)。これに続けてソクラテスは、「技術そのもののほうは、それが正しい意味における技術であるかぎりは一すなわち、それぞれが厳密な意味での技術として、全面的に自分自身の本質を守るかぎりにおいては—完全に—無疵なもの」と補足してい

と技術一般論を説明し、次に、個々の技術についてその特性を取り上げて説明する。たとえば「医術は、医術の利益になることを考察するものではなく、身体の利益になることを考察するもの」<sup>339</sup>、また「馬丁の技術とは、馬丁の技術の利益になることを考えるのではなく、馬の利益になることを考えるもの」<sup>340</sup>と説く。その上で、「もろもろの技術とは、それがはたらきかける対象を支配し、優越した力をもつもの」<sup>341</sup>であると説く。たとえば、医術は、病人を病から解放し健康にすることであって、決して医者金の儲けの術ではなく、同様に、操舵術は航海における安全を提供することであって、船長の金儲けの術ではない。ソクラテス（すなわちプラトン）は、正義は金儲けする技術ではなく、技術としての正義は、医術（医者）が病人を健康にすると同じように、支配者（強い者）が被支配者（弱い者）の利益を考える技術であると主張する。たとえば、財産の評価によって支配者が選出される寡頭制を例にして、支配権の割当にあたって財産の多寡で決めることの不合理さを明確にしておこう。財産を多くもっている人が支配する技術に優れているとは限らないので、最も多くの財産をもつ人が支配者として優れているとは限らない。

何故、技術自身のためではなく、その対象の利益になると説くことができるのであろうか。それは、技術は完全であり、「はじめから何も不足していない」<sup>342</sup>状態であるからであるというのがソクラテス（すなわちプラトン）の見解である。この場合には、その技術に何かを加えることは不用であり、無駄である<sup>343</sup>。技術そのもののためではなく、その対象の利益になることが技術の本質であると認識され得るのである。ソクラテスは、技術のもつ完全性を基礎においた正義論を志向し、そして、技術は知識の一部をなし、「およそ知識とは、どんな知識でも、けっして強い者の利益になる事柄を考えて、それを命じるのではなく、弱い者の、つまり自分が支配する相手の利益になる事柄を考えて、それを命じるのだ」<sup>344</sup>と展開し、支配も技術であって、支配者の目は支配者の利益ではなく、その支配の対象である被支配者に向

る（その 342B（第 1 巻第 15 章、68 ページ 16 から 69 ページ 3 行目））。

<sup>339</sup> 前掲書『国家（上）』342C（第 1 巻第 15 章、69 ページ 7 から 8 行目）。

<sup>340</sup> 前掲書『国家（上）』342C（第 1 巻第 15 章、69 ページ 10 から 11 行目）。

<sup>341</sup> 前掲書『国家（上）』324C（第 1 巻第 15 章、69 ページ 15 から 16 行目）。

<sup>342</sup> 前掲書『国家（上）』324C（第 1 巻第 15 章、69 ページ 12 行目）。

<sup>343</sup> 技術の完全性について、プラトンは、「技術そのもののほうは、それが正しい意味における技術であるかぎりは一それぞれが厳密な意味での技術として、全面的に自分自身の本質をまもるかぎりにおいては—完全に無疵なもの」と述べている（前掲書『国家（上）』342B（第 1 巻第 15 章、68 ページ 16 から 69 ページ 3 行目））。また、「そもそも欠陥だとか誤りだとかいったものは、およそいかなる技術にもはじめからありえないのだし、また、技術が探求する利益とは、その技術がはたらきかける対象にとって利益になること以外にはないはずだから」とも述べている（前掲書『国家（上）』342B（第 1 巻第 15 章、68 ページ 14 から 16 行目））。

<sup>344</sup> 前掲書『国家（上）』342C から D（第 1 巻第 15 章、70 ページ 2 から 4 行目）。

けられる<sup>345</sup>と説明する。ソクラテスは、トラシマコスとは全く逆の正義論を展開する。すなわち、正義とは、弱い者（被支配者）の利益になることである。

それでは、ソクラテスの提案する正義では、その技術自体の利益はどうなるのであろうか。トラシマコスは、医術や操舵術などが技術自体のためではなく、その対象の利益を考察するならば、その技術自体の利益はどうなるのかと疑問を投じる。たとえば、羊飼いが羊の世話をして肥らせるのは、羊飼いが自身の利益のためにしていると信じているトラシマコスは、厳密な意味での「支配者たちが被支配者に対してもつ考えは、ちょうど人が羊に対してもつ気持ちと同じだということ、支配者たちが夜も昼も頭をつかっているのは、どうすれば自分自身の利益を得るかということにほかならぬ」<sup>346</sup>ことであると反撃して、依然として、彼自身の正義論に固執し続け、技術はそれ自身の利益を目指す、すなわち支配者は自身の利益を求めて支配すると繰り返す。この見解に対してソクラテスは、トラシマコスの羊飼いの譬え話では、本当の意味での正義と報酬獲得術とを分離していないと疑義を挟み、本当の意味での羊飼いはたらきは、羊の世話をし、それを安全にすることであって、「羊飼いが羊飼いであるかぎりにおいて、羊たちを肥らせるのは、けっして羊たちの最善を目標にしてではなく、いわば宴会に招かれて饗応にあずかろうとする人か何かのように、楽しみ食らうことを目当てにしてのこと」<sup>347</sup>であるとし、羊の最善を目標とする羊飼いの術を、羊を売って金儲けをする技術と混同することなく、本当の意味での羊飼いの術と、羊たちを肥らせ報酬を得る術（報酬獲得術）を区別して、「専門家たちが報酬を獲得することによって利益にあずかるのは、彼らが別に報酬獲得の技術を合わせ用いていることによる」<sup>348</sup>と説明する。このプラトンの説明では、報酬獲得の技術<sup>349</sup>が羊飼いの術を併せ持っていると見ているのか、それとも別の専門家がいると見ているのかは判然とはしない<sup>350</sup>が、もしその専門家がいるならば、報酬獲得の技術を担う存在は何（誰）なのであろうか。プラトンはそれを明言していない。

プラトンの‘本当の意味’での羊飼いの術は、羊を病に陥らせることなく元気に育成することである。報酬獲得術は、金儲けのために羊をまるまると肥らせる術なのであろう。この境界線が曖昧にされている点がプラトンの正義論に不完全さを残すのかもしれない。アテナイ

<sup>345</sup> 前掲書『国家（上）』342E（第1巻だい15章、71ページ7から9行目）参照。

<sup>346</sup> 前掲書『国家（上）』343B（第1巻第16章、72ページ9から12行目）。

<sup>347</sup> 前掲書『国家（上）』345C（第1巻第17章、78ページ10から13行目）。

<sup>348</sup> 前掲書『国家（上）』346C（第1巻第18章、82ページ2から3行目）。

<sup>349</sup> プラトンは、羊を売って儲けることを目指す商売人もまた羊を肥らせるという。商人は金儲けのために羊を肥らせるのであって、羊の最善を考えてはいないとプラトンは判断しているのであろう。

<sup>350</sup> 報酬獲得術を社会的に担うのは誰かあるいは何処なのか判然としていない。今日の経済学では、それを市場に任せているが、プラトンがアゴラでの市場にその技術を帰属させているとは必ずしも示してはいない。

などの都市（都市国家）において、誰が支配者の地位についていた人に支配技術の報酬を与えていたのであろうか。市場でその報酬の大きさは決められるのであろうか、あるいは公的な部門あるいは報酬審議会で決められたのであろうか。支配者の技術の報酬については、都市国家の何処で議論され、何処で決められるのかはプラトンの議論では不明である。このことから、プラトン自身が国家の建設に進む必要があったのであろう。

この報酬術の問題についてももう少し掘り下げてみよう。それぞれの専門家がその報酬を獲得し利益にあずかるのは、自分の専門とする当の（本当の意味での）技術によるのではないと考えられる。たとえば「医術がつくり出すものは、あくまで健康だけであり、報酬をもたらすのは報酬獲得術のほうである」<sup>351</sup>と説明する。ソクラテス（すなわちプラトン）は、医術や建築術に報酬獲得術が別に伴うことによって、医者や大工の報酬がもたらされると認識している。「あらゆる技術は、それぞれがなしとげる自分だけの仕事をもち、自分が配置されている当の対象に利益を与える」<sup>352</sup>のであるが、「もし報酬というものがそれぞれの技術に加わらないとしたら、専門家が自分の技術から利益を得るということは、ありうるだろうか」<sup>353</sup>と考察を深める。医術や建築術などの技術と同様に、支配はそれ自身のための利益ではなく、支配の対象である被支配者の利益を目指す。ゆえに、「みづからすすんで支配の地位につき、他人の災厄に関与して立て直してやろうと望む者は一人もいない、みんなそのための報酬を要求する」<sup>354</sup>とソクラテスは説明する。技術や支配が自分自身のためになることを行ったり、命じたりするのではなく、その対象者あるいは被支配者のために最善になることを行い命じるのであるから、「支配者の地位につくことを承知しようとする者に報酬を与えられなければならない」<sup>355</sup>とソクラテスは説明する。被支配者が利益を得るのであるから、その対価を支払うのは被支配者になるが、その対価が支配者の報酬になる。これは経済学から説明される論理に合致する。

トラシユマコス（あるいはプラトン）の社会認識の甘さを指摘・批判し、「〈正義〉だとか〈正しいこと〉だとかいうのは、自分より強い者・支配する者の利益であるから、それはほんとうは、他人にとって善いことなのであり、服従し奉仕する者にとっては自分自身の損害にほかならない」<sup>356</sup>と彼の正義論の正当性を押し通す。また、「〈不正〉はちよ

<sup>351</sup> 前掲書『国家（上）』346D（第1巻第18章、82ページ7から8行目）。

<sup>352</sup> 前掲書『国家（上）』346D（第1巻第18章、82ページ10から11行目）。

<sup>353</sup> 前掲書『国家（上）』346D（第1巻第18章、82ページ12から13行目）。

<sup>354</sup> 前掲書『国家（上）』346E（第1巻第18章、83ページ8から9行目）。

<sup>355</sup> 前掲書『国家（上）』347A（第1巻第18章、83ページ14から15行目）。

<sup>356</sup> 前掲書『国家（上）』343C（第1巻第16章、72ページ14から73ページ1行目）。この引用で、被支配者の損害とは、被支配者は対価などを支払うことを含意していると解釈される。しかし、トラシユマコスは、支配者の報酬術については詳細を述べていない。トラシユマコスは、支配者が随意に報酬を決められるとを念



うどその反対であって、まことのお人好しである『正しい人々』を支配する力をもつ。そして、支配されるほうの者たちは、自分より強い者の利益になることを行ない、そして奉仕することによって強い者を幸せにするのであるが、自分自身を幸せにすることは全然ないのである<sup>357</sup>とトラシュマコス自身の見解を繰り返す。ここで、トラシュマコスは、幸福の観点を正義論に加えて正当化を試みる。さらに、トラシュマコスは、当時のギリシヤ社会の現実<sup>358</sup>から正義論を展開していると思われる。たとえば、正しい人と不正な人が共同事業を行った後、損害を蒙るのが正しい人で、不正な人が利益を得るという事実や、また公的な役職に就く場合には、正しい人は、公的な仕事から私腹を肥やすこともなく、身内の者や知人たちに奉仕することもないが、不正な人は、他人を利して大きな利益を自身にもたらす事実を提示し、ソクラテスの認識の甘さを指摘する。

トラシュマコスの提示事実が正か否かは、現実が必ずしも真理とは限らないので、深く検討する必要がある。プラトンは、国制の変化を次のように理解している。最初に建設される最優秀支配制が崩れ、次に、名誉支配体制が成立し、この体制が崩れ寡頭制支配が生まれる。寡頭制が崩れ、民主制が起こり、最後に僭主独裁制が起こると理解している。この国制の崩壊ならびに生成が支配階層の抗争あるいは内乱による分裂から生まれることをプラトンは説明している。たとえば、名誉支配体制が崩れ、寡頭制が生じるが、この移行過程をプラトンは支配者階層の亀裂から説明する。名誉支配体制は、優秀支配体制と寡頭制支配体制の間になる。この体制で金銭欲が旺盛になり、名誉支配体制の気概を喪失し、「殖財の道をひたすら前進して、金をつくることを尊重すればするほど、それだけますます徳を尊重しないようになる<sup>359</sup>。金銭を尊重する人々が「勝利を求め名誉を愛する人間であることをやめて、金儲けを求め金銭を愛する人間になり、そして金持の人を賞讃し讃嘆して支配の座につけ、貧乏な人を軽んじることになる<sup>360</sup>とプラトンによって説明されている。

寡頭制では財産(富)を豊富にもっている人たちが支配者に選任され、貧しい人達はいかなる仕事にも就くことなく国家の中に住み続け、被支配者とされる。この貧しい人達は、貧民・困窮者<sup>361</sup>と呼ばれる。この寡頭制では、「同じ人が同時に、農業も営めば金儲けもやり、

頭に置いているのかも知れない。

<sup>357</sup> 前掲書『国家(上)』343C(第1巻第16章、73ページ1から4行目)。

<sup>358</sup> 当時のギリシヤ人達は、正しいこととは「つらいものの一種である」と、つまり、「報酬のためや、世間の評判にもとづく名声のためにこそ、行なわなければならないけれども、それ自体としてではなく、苦しいから避けなければならないような種類のものに属する」と考えていた、とプラトンは認識している(前掲書『国家(上)』358A(第2巻第1章、114ページ7から10行目)参照)。

<sup>359</sup> 前掲書『国家(下)』550E(第8巻第6章、207ページ12から13行目)。

<sup>360</sup> 前掲書『国家(下)』551A(第8巻第6章、208ページ7から9行目)。

<sup>361</sup> 貧民・困窮者とは、「商売人でもなければ職人でもなく、騎兵でもなければ重装歩兵でもなく、ただ貧民・

また戦争もするといったように、多くの仕事に忙しく手を出す<sup>362</sup>現象と同時に、先に示した何の仕事にも就いていない落ちぶれた人達が存在する。プラトンの基準<sup>363</sup>では、一人の人が最も優れた技術をもつ仕事につくことが、社会的に有用であるが、寡頭制では何も仕事をしない人々がいるかたわらに、複数の仕事を同時にする人達がいる社会である。このような社会は、不正な社会であり、有用な社会ではない。寡頭制支配社会は、悪い社会になる。というのは、「〈正義〉は魂の徳（優秀性）であり、〈不正〉は悪徳（劣悪性）である」<sup>364</sup>からである。

もう一点、寡頭制について触れておかなければならないことがある。それは、何故、支配者の地位にあった者が落伍者となり貧困に陥ったかである。プラトンは、贅沢な生活志向にあると言う。プラトンによると、その落伍者は「支配者の一員であると思われていたものの、実際には、国の支配者でもなければ奉仕者でもなく、ただ手もとの財の浪費者でしかなかったのではないだろうか」<sup>365</sup>と指摘する。この浪費者の中から落伍者が生まれ、その落ちぶれた人達とは、乞食となり、国内の何処かに「盗人や拘摸や神殿荒しや、すべてのこのような悪業の専門職人たちが隠されていることは明らか」<sup>366</sup>であるとプラトンは認識している。名譽支配制の社会から寡頭制社会への移行は、支配層の教育の質の低下だけでなく、贅沢な生活あるいは浪費生活にもその原因があると考えられる。

プラトンによると、寡頭制から民主制への移行は、この浪費生活がそのエネルギー源<sup>367</sup>である。寡頭制のもとでは、支配者は金持ちになることをとことん追求するその結果、放埒な人間（若者の中から）が現れ、自分の財産を浪費するがままに放任される。その支配者たちは、寡頭制では、そのような人の財産を買い取り、それを担保に金を貸すことによって、更に富を増やし、尊敬を勝ち取ろうとする<sup>368</sup>。このようにして、放逸な生活を許される寡頭制

---

困窮者と呼ばれながら」国家に居住する（前掲書『国家（下）』552A（第8巻第7章、211ページ16から212ページ1行目））。それでは何故寡頭制ではこのような落ちぶれた人が生まれるのか。プラトンは、「自分の持ち物をすべて売り払うことができ、他人がそれを手に入れることが許されるということ、そして売りつくした後、国の構成員としてのなんらの役割も果たすことなしに、国家のうちに住みつづけることが許されている」ことを挙げている（前掲書『国家（下）』552A（第8巻第7章、211ページ14から16行目））。

<sup>362</sup> 前掲書『国家（下）』552A（第8巻第7章、211ページ7から8行目）。

<sup>363</sup> ここでプラトンの基準とは、「ただそれだけが果たしうるような、あるいは、他の何よりもそれが最も善く果たしうるような仕事」をなすことが正義であり、徳であることを意味している（たとえば、前掲書『国家（上）』353Aから354A（第1巻第24章、105ページ10から109ページ14行目）参照）。

<sup>364</sup> 前掲書『国家（上）』353E（第1巻第24章、108ページ15行目）。

<sup>365</sup> 前掲書『国家（下）』552BからC（第8巻第7章、212ページ10から12行目）。

<sup>366</sup> 前掲書『国家（下）』552D（第8巻第7章、213ページ11から12行目）。

<sup>367</sup> プラトンは、人間（支配者）の過剰な欲望が寡頭制の崩壊と民主制の発生の要因であると考えている。不必要な欲望に支配された人が民主制に対応する人間である（前掲書『国家（下）』558Cから559C（第8巻第12章、231ページ6から234ページ7行目）参照）。

国家では、生まれの善い人々を貧困へと転落させる。このようにして貧乏になった人々の中で「ある者は借財を背負いこみ、ある者は市民権を奪われ、ある者はその両方の目にあった人々であって、彼らは、彼らの財産を手に入れた人々をはじめその他の国民たちに対しても憎しみをいだいて、陰謀をたくらみ、革命に思いを寄せている」<sup>369</sup>が、他方、金を儲けている者たちは、そのような貧乏人を無視しながら、その他の人々には金を貸して元金の何倍もの利息を取り立てて、「雄峰と乞食を国になかになすます生みふやして行く」<sup>370</sup>。寡頭制国家には、落ちぶれて貧乏人になった人々と、甘やかされ贅沢な生活に明け暮れ、身体的にも精神的にも苦勞を回避し、また快樂に対しても苦痛に対しても抵抗力のない、柔弱な怠け者たちから構成される<sup>371</sup>。寡頭制国家は両極化する。貧しい人々は被支配者とされ、支配者は怠惰で浪費癖のある人々となる。この段階に至って、寡頭制国家の中の「一方の党派が寡頭制国家から味方を引き入れるなり、または他方の党派が民主制国家から味方を連れこむなりして、ちょっとした外からの要因が加わると、それがきっかけで病気になって内部抗争を起し、またときには、そういう外からの要因がなくとも内乱がはじまる」<sup>372</sup>。

そして、貧しい人達が闘いに勝利すると、寡頭制国家から民主制国家が生まれる。この民主制における支配者の選出であるが、「その国における役職は籤で決められることになる」<sup>373</sup>。すなわち、この国制では「国事に乗り出して政治活動する者が、どのような仕事と生き方をしていた人であろうと、そんなことはいっこうに気にも留められず、ただ大衆に好意をもっていると言えさえすれば、それだけで尊敬されるお国柄なのだ」<sup>374</sup>とプラトンは語る。民主制の支配体制は、正しいのであろうか。この判定はプラトンの基準を使用して与えることができる。民主制国家においては、支配者にある人は、籤で選出され、かつ、どのような仕事に就いている人でも構わないとされている点から判断すると、一人の人が一つの仕

<sup>368</sup> 前掲書『国家(下)』555C(第8巻第10章、222ページ2から4行目)参照。

<sup>369</sup> 前掲書『国家(下)』555D(第8巻第10章、222ページ15から223ページ2行目)。

<sup>370</sup> 前掲書『国家(下)』555E(第8巻第10章、223ページ7行目)。この引用で、「雄峰」は怠惰で浪費する人々たちである。プラトンは、寡頭制国家において「蜂の巣の一つの穴に雄峰が生まれ、巣全体の病いとなるように、このような人もまた、雄峰として一つの家になかに生まれて、国全体の病いとなる」と語る(前掲書『国家(下)』552C(第8巻第7章、212ページ16から213ページ2行目))。またプラトンは、「神は翅のある雄峰を、すべて針を持たないものに造ったが、足で歩くこの雄峰どもほうは、そのなかのある者には針を与えなかったけれども、ある者には恐ろしい針を持たせたのではなか、そして「針のない者たちからは、年老いてから乞食となって果てる連中が出るし、針を持った者たちからは、悪者と呼ばれるような連中のすべてが出るのではないか」と説明している(前掲書『国家(下)』552CからD(第8巻第7章、213ページ4から8行目)参照)。この引用で、プラトンは、翅のある蜜蜂の王を雄峰と見ている。

<sup>371</sup> 前掲書『国家(下)』556BからC(第8巻第10章、224ページ5から8行目)参照。

<sup>372</sup> 前掲書『国家(下)』556E(第8巻第10章、225ページ14から226ページ2行目)。

<sup>373</sup> 前掲書『国家(下)』557A(第8巻第10章、226ページ6から7行目)。

<sup>374</sup> 前掲書『国家(下)』558BからC(第8巻第11章、230ページ3から5行目)。

事に就くことが正しい（正義）とするプラトン基準を使うと、民主制も不正な国制と判断される。また、悪の国家になる。

プラトンは、民主制の支配体制について、「快く、無政府的で、多彩な国制であり、等しい者にも等しくない者にも同じように一種の平等を与える国制」<sup>375</sup>と纏めている。民主制国家での人々の生活について簡潔に示しておこう。第一に、自由で放任された生活がなされる。特に言論の自由が人々に行き渡っているとともに、何でも思いどおりになせるように放任されている。その結果、この国制下では多種多様な人間が生まれている<sup>376</sup>。ソクラテスに、民主制を「習俗によって多彩にいろどられて」、「いちばん美しい国制かもしれない」<sup>377</sup>と語らせている。また民主制下では快い生活<sup>378</sup>ができる。さらに、民主制には寛大さと些細なことにこだわらぬ精神<sup>379</sup>があると語る。この寛大さが、支配者としての素質もなく、その教育を受けていない人々が平気に支配者になる国制であるとプラトンは批判しているのかも知れない。また放任さのゆえに、民主制国家は国制の見本市となると語る<sup>380</sup>。民主制には、優秀支配者に通ずる部分や寡頭制的な部分や僭主独裁制的な部分が秘められている意味において見本市<sup>381</sup>であるとプラトンは見ているのであろう。

<sup>375</sup> 前掲書『国家（下）』558C（第8巻第11章、230ページ8から9行目）。この引用で、プラトンが‘無政府的で’と言っているのは、民主制のもとには、支配者としての専門職人が存在しないことを想定しているであろう。このことは、「思うにそれらの欲望は、青年の魂の城砦（アクロポリス）を占領するに至るだろう。学問や美しい仕事の言論がそこになくて、城砦が空になっているのを察知するからだ。これらのものこそは、神に愛される人々の心の内を守る、最もすぐれた監視者であり守護者である」（前掲書『国家（下）』560BからC（第8巻第13章、236ページ11から14行目））から、民主制のもとには守護者（支配者）が実在しないが如きであるとプラトンは認識していると理解される。その状態は無政府的状态である。

<sup>376</sup> 前掲書『国家（下）』557B（第8巻第11章、227ページ1から9行目）参照。

<sup>377</sup> 前掲書『国家（下）』557C（第8巻第11章、227ページ11から16行目）参照。

<sup>378</sup> 快いとはどのようなことを指しているのであろうか。他人の生き方に関係なく気ままに生活できることを指しているのではないかと理解される。プラトンは、支配する能力があっても支配者になることを強制されることもないし、望まなければ支配されるように強制もされないことを例にしている。また、「他の人々が戦っているからといって、戦わなければならないこともなければ、他の人々が平和に過していても、君が平和を欲しないのなら、むりに平和に過さなければならぬということもない」と列挙している（前掲書『国家（下）』557E（第8巻第11章、228ページ12から16行目））。

<sup>379</sup> 前掲書『国家（下）』558B（第8巻第11章、229ページ13から15行目）参照。

<sup>380</sup> 前掲書『国家（下）』557D（第8巻第11章、228ページ5から9行目）参照。

<sup>381</sup> 国制の見本市というのは、民主制には名誉支配制、寡頭制、民主制、ならびに僭主独裁制の要素が含まれているからである。この要素が出されるのは、民主制国家が、三つの階層（階級）から構成されることから引き出される。プラトンは、民主制を取っている国家は3階層（階級）から構成されるとしている。第一の階層は、国の先頭に立つ指導層である。この指導層は、民主制国家では、被支配者を管理するが、怠惰で浪費家である。第二は、金持階層（階級）で、持てる階層と呼ばれる。怠惰で浪費家に財産（富）を奪われる階層である。この階層の人々は、民衆が彼らに危害を加えようとするときには、彼らはいきおい寡頭制的な人間になる。様々の弾劾や裁判や係争が行われる。第三の階層（階級）は民衆である。この階層の人々は、自分で働き生活し、公共の役職等にはつくことはなく、財産も余り多く持っていない。先頭に立つ指導者

プラトンは、民主制国家における最高の善である自由の飽くなき追求が民主制を僭主独裁制に移行するエネルギーであると理解している。寡頭制を崩した要因である不必要な欲望(浪費)が民主制を崩壊に導いた要因でもあると捉える。僭主独裁制は、贅沢な生活をする人々あるいは多くの怠惰な浪費家から構成される国制であると説明される。僭主独裁制は、「国家の病として最たるものだ」<sup>382</sup>と断言し、不必要な欲望がその病であり、民主制の崩壊の要因であるが、また民主制国家では、自由が善として追い求められ、これが国制を僭主制に変化させる力になる。

はじめに、民主制から僭主独裁制への移行過程を概説する。自由が隅々まで浸透した民主制国家では、支配者が「自由をふんだんに提供してくれないような場合、国民は彼ら支配者たちをけしからぬ連中だ、寡頭制的なやつだと非難して迫害する」<sup>383</sup>だけではなく、「個人的にも公共的にも賞讃され尊敬されるのは、支配される人々に似たような支配者たち、支配者に似たような被支配者たちだということになる」<sup>384</sup>とプラトンは説明する。プラトンは、民主制国家では、自由の風潮が国の隅々まで行き着き、無政府状態になると認識する。支配者と被支配者の関係では、「絶対にどのような主人をも、自分の上にはいたたくまい」とする。この関係は、父親と息子の間の関係にも、先生(年長者)と生徒(若者)との関係にも、奴隷と自由人の関係にも、そして動物と主人のの関係にも表れているとプラトンは認識しているが、たとえば、「父親は子供に似た人間となり、また息子たちを恐れるように習慣づけられ、他方、息子は父親に似た人間になり、両親の前に恥じる気持も恐れる気持もたなくなる。自由であるためにね。そして、居留民は市民と、市民は居留民と、平等化されて同じような人間になり、外人もまた同様だということになる」<sup>385</sup>とプラトンは語る。ギリシヤ時代には、父親が子供を支配する関係にあったが、民主制では対等になり、主人である父親が息子を恐れる習慣に陥る。同様に、年長者と若者の関係でも、「若者たちは年長者たちと対等に振舞って、言葉においても年長者と張り合い、他方、年長者たちは若者たちに自分を合わせて、面白くない人間だとか権威主義者だとか思われないために、若者たちを真似て機智や冗談でいっぱい人間になる」<sup>386</sup>とプラトンは認識している。プラトンは、自由と平等の関係が、ギリシヤ(アテナイ)において、犬と女主人の間あるいは馬や驢馬と自由民との関係にまで広がっていることに驚愕<sup>387</sup>している。プラトンは、「過度の自由は、個人においても国家に

が、金持階級から掠め取る財産の配分にあずかる。民主制の三階層(階級)については、前掲書『国家(下)』565AからC(第8巻第16章250ページ10から252ページ6行目)を参照。

<sup>382</sup> 前掲書『国家(下)』544C(第8巻第1章, 189ページ7から8行目)。

<sup>383</sup> 前掲書『国家(下)』562D(第8巻第14章, 243ページ4から6行目)。

<sup>384</sup> 前掲書『国家(下)』562D(第8巻第14章, 243ページ9から11行目)。

<sup>385</sup> 前掲書『国家(下)』562Eから563A(第8巻第14章, 244ページ3から6行目)。

<sup>386</sup> 前掲書『国家(下)』563AからB(第8巻第14章, 244ページ10から13行目)。



においても、ただ過度の隷属状態へと変化する以外に途はないものようだから<sup>388</sup>と語り、自由な精神に打ち満ちている国家が隷属する国家に墮すると説くのである。

自由放任のために、怠惰で浪費癖の者達が勢いづき、民主制は崩れるのである。勢いづいた民主制国家の浪費家たちは、大衆から区別される金持ち階層から財産を奪い、財産をもたない民衆<sup>389</sup>に配分する<sup>390</sup>。財産を持つ階層との争いにおいて、民衆の先頭に立つ人間が育てられるが、それが僭主独裁者へと変貌<sup>391</sup>する。僭主独裁者は、「財産を所有する人々に対する反乱の主謀者となる人間」<sup>392</sup>で、敵対する者は彼を暗殺しようとするとき、僭主独裁者は例外なく『僭主の要求』<sup>393</sup>を思いつく、すなわち「身体を守ってくれる護衛隊を民衆に要求する」<sup>394</sup>。このとき、民衆たちは「彼の身を気遣い、自分たち自身については何の心配もいなくことなく、その要求をかなかえてやる」<sup>395</sup>。財産のある者たちは捕らえられ、殺害される。民衆の指導者は、「他の数ある敵たちをなぎ倒して、国家という戦車の上にくっくと立つ。そのとき彼は、もはや民衆の指導者であることをやめて、完全に僭主（独裁者）となってしまっている」<sup>396</sup>。

僭主独裁者は、絶えず民衆に指導者を必要とさせるように、「なんらかの戦争を引き起す」<sup>397</sup>が、その目的は「人々が税金を払って貧しくなり、その日その日の仕事に追われるようになる結果、それだけ彼に対し謀反をたくらむことができにくくなるようにするためでもある」<sup>398</sup>とプラトンは説明する。僭主独裁者は、どのようなものでも少しずつ掠め取るのではなく、

<sup>387</sup> 前掲書『国家（下）』562CからD（第8巻第14章、245ページ8から11行目）参照。

<sup>388</sup> 前掲書『国家（下）』564A（第8巻第9章、247ページ4から5行目）。

<sup>389</sup> プラトンは、民衆を次のように説明している。「自分で働いて生活し、公共のことには手出しをしながら、あまり多くの財産を所有していない人々からなる」と説明している（前掲書『国家（下）』565A（第8巻第16章、250ページ10から12行目））。

<sup>390</sup> この配分についてプラトンは、民衆の「先頭に立つ指導者たちが、持てる人々から財産を取り上げて民衆に配分しながらも、なお大部分を自分で着服できる」と説明している（前掲書『国家（下）』565A（第8巻第16章、251ページ1から3行目））。

<sup>391</sup> プラトンは、民衆の指導者が僭主独裁者になるのは、「その指導者がアルカディアのリュカイオス・ゼウスの神殿にまつわる伝説」に言われていることと、同じことを始めるときであると語る。それは、神殿に捧げられた犠牲獣の様々な内蔵のなかにある「人間の内臓を食いあてて味わった者は、必ず狼とならなければならない」。そしてこの狼になった人間と同じように民衆の指導者は人間から狼に変貌し、僭主独裁者になる（前掲書『国家（下）』565DからE（第8巻第16章、252ページ12から253ページ13行目）参照）。

<sup>392</sup> 前掲書『国家（下）』566A（第8巻第16章、253ページ15から16行目）。

<sup>393</sup> 前掲書『国家（下）』566B（第8巻第16章、254ページ10行目）。

<sup>394</sup> 前掲書『国家（下）』566B（第8巻第16章、254ページ11行目）。

<sup>395</sup> 前掲書『国家（下）』566B（第8巻第16章、254ページ14から15行目）。

<sup>396</sup> 前掲書『国家（下）』566D（第8巻第16章、255ページ13から15行目）。

<sup>397</sup> 前掲書『国家（下）』566E（第8巻第17章、256ページ15行目）。

<sup>398</sup> 前掲書『国家（下）』567A（第8巻第17章、257ページ2から4行目）。

一挙に奪う。そのために、国民から次第に嫌われるようになると、彼は信頼のおける護衛隊を必要とするようになる。同時に、支配権力を維持しようとするれば、自由に物を言う勇気のある人々が現れるであろうが、このような人物を確実に排除する。彼は、「ついには敵味方を問わず、何ほどかでも有為の人物は一人も残さぬところまで」<sup>399</sup> 排除し、そのためには「誰が勇気ある人か、誰が高邁な精神の持主か、誰が思慮ある人か、誰が金持ちであるかといったことを、鋭く見抜かなければならない」<sup>400</sup>。こうして彼は、国家をすっかり浄めてしまうのである。この敵対者の排除は、医者とは正反対の浄化である。医者は、病という最悪なものを取り除き最善な物を残すのであるが、僭主独裁者は、支配を維持するために、医者とは反対のことを行っている。彼は、民衆の指導者のころの仲間を滅ぼし尽くし、解放された奴隷たちを友として、信頼できる護衛隊を部下とする。プラトンは、「これらの仲間は彼を讃嘆し、これら新参の市民たちは彼と交わるけれども、心あるすぐれた人々は彼を憎み彼を避けるのではなか」<sup>401</sup> と評している。

しかし、トラシユマコス、僭主独裁者は幸福であると見ている。トラシユマコスは、「いったん国民すべての財産をまき上げ、おまけにその身柄をそのものまでを奴隷にして隷属させるような者が現れると、その人はいま言ったような不名誉な名で呼ばれないで、幸せな人、祝福された人と呼ばれるのである」<sup>402</sup> と僭主独裁者について語っている。トラシユマコスは、「最も完全な不正こそは、不正をおかす当人を最も幸せにし、逆に不正を受ける者たち、不正をおかそうとしない者たちを、最も惨めにするもの」<sup>403</sup> であると認識している。ここで、最も完全な不正<sup>404</sup> とは、僭主独裁制のやり方であるが、トラシユマコスも僭主独裁制が最も不正な支配体制であることを認め、「独裁僭主のやり方が、ちょうどこれにあたる」<sup>405</sup> と言う。また完全な不正を犯す人（僭主独裁者）は最高に幸せであることは確かであるが、彼が支配者として優れているかと言えば、不正な（最悪の）支配者である。というのは、人の領分あるいは人の物を掠め取る行為は、分を犯すことから不正である。僭主独裁制では「他人のものをだまし取るときにも、少しずつ掠め取るようなことをせず一挙にごっそりと奪いとる

<sup>399</sup> 前掲書『国家（下）』567B（第8巻第17章、258ページ2から3行目）。

<sup>400</sup> 前掲書『国家（下）』567C（第8巻第17章、258ページ6から7行目）。

<sup>401</sup> 前掲書『国家（下）』568A（第8巻第18章、260ページ13から14行目）。

<sup>402</sup> 前掲書『国家（上）』344BからC（第1巻第16章、75ページ3から5行目）。

<sup>403</sup> 前掲書『国家（上）』344A（第1巻第16章、74ページ9から11行目）。

<sup>404</sup> 完全な不正とは、神殿荒し、人さらい、土蔵破り、詐欺、盗みなどを一挙に行うことを指している。これら一つずつ行くと、悪業を犯す者として罰せられる。

<sup>405</sup> 前掲書『国家（上）』344A（第1巻第16章、74ページ11行目）。トラシユマコスは、独裁僭主とは、他人のものをだまし取るときにも、暴力でとるときにも、それは神物であれ、個人のものであれ公のものであらうとも、少しずつ掠め取るようなことをせず、一挙にごっそり奪い取ると説明する（上掲書『国家（上）』344A（第1巻第16章、74ページ11から14行目）参照）。

のである<sup>406</sup>とプラトンによって説明されている。「不正がひとたび十分な仕方で実現するときは、それは正義よりも強力で、自由で、権勢をもつものなのだ。そしてわたしが最初から言っていたように、〈正しいこと〉とは、強い者の利益になることにほかならず、これに反して〈不正なこと〉こそは、自分自身の利益になり得になるものである<sup>407</sup>と主張する。トラシマコス、当時のギリシャ社会では、強い者を利することが正義であるという認識が支持されると確信していたのかも知れない。このトラシマコスの主張で、正しいことが強い者の利益になり、不正なことが自分自身の利益になるという点については深く考察する必要がある。トラシマコスの正義論において幸福になるのは、僭主自身であって、その国民（あるいは民衆）は隷属状態にあるであろうから、完全な不正は国民を幸福にすることはないであろう。プラトンは、トラシマコスのように僭主独裁者自身の観点から僭主独裁制を評価するのではなく、僭主独裁制をとっている国家全体（その国民全体）の観点から評価することを主張している。プラトンは、この国家あるいはその国民（の魂）は、隷属状態あるいは奴隷状態<sup>408</sup>にあり、貧乏であり、恐怖<sup>409</sup>におののいている<sup>410</sup>。このことから、僭主独裁制の国家は「最悪の国家」<sup>411</sup>であり、「もっともみじめな国家」<sup>412</sup>であるとプラトンは言い切っている。プラトンの卓越している点は、僭主独裁者の人間自身を、いつも満たされぬ欲望で充ち満ちかつ恐怖におののいて生活する「みじめな人間」であると指摘した点である。

## 第6項 支配者の報酬と分を守ること

プラトンは、トラシマコスの正義論に関するソクラテスと彼との対話において、支配者の報酬とは何かについて徳の観点から考察を深めている。支配の報酬について、医術等と同様に、支配者自身の利益のためにでなく、被支配者のためにに利益になることから、「みずからすすんで支配の地位につき、他人の災厄に関与して立て直してやろうと望む者は一人もない、みんなそのための報酬を要求する」事実を述べている。僭主（独裁者）は、自身一人のための利益を最大にするが、民衆は隷属状態に置かれ、決して僭主の下では幸福になれな

<sup>406</sup> 前掲書『国家（上）』344A（第1巻第16章、74ページ11から14行目）。

<sup>407</sup> 前掲書『国家（上）』344C（第1巻第16章、75ページ10から13行目）。

<sup>408</sup> 僭主独裁制下の魂が奴隷状態にあるとは、魂の「理知的部分」が「欲望的部分」によって押し潰されている状態である。国家が奴隷状態にあるとは、国民全体あるいは支配階層が、金儲けをする階層に専制的に支配されている状態である。

<sup>409</sup> 僭主独裁的な人間は、不正であり、信義なく、友情もないので、いつも召使いや周辺の人々から襲われるのではないかと恐れている。

<sup>410</sup> 前掲書『国家（下）』577Cから578B（第9巻第5章、287ページ1から289ページ15行目）参照。

<sup>411</sup> 前掲書『国家（下）』576D（第9巻第4章、284ページ12行目）。

<sup>412</sup> 前掲書『国家（下）』578B（第9巻第5章、289ページ14行目）。

いとプラトンは確信している。

ソクラテスは、支配者の地位に就く者の報酬として、金銭、名誉あるいは罰を挙げるが、罰が支配者の報酬の一つであることに納得しないグラウコン<sup>413</sup>に対して、ソクラテスは、「すぐれた人たちが支配者の地位につくことを承知するのは、金のためでも名誉のためでもないのだ。なぜなら、支配の仕事のための報酬をあからさまに要求することによって、金で雇われた者と呼ばれることも、役職を利用してひそかにみずからの手を汚すことによって盗人となることも、ともに彼らの欲するところではないからね。さりとてまた、名誉のためでもない。彼らは、名誉を愛し求めるような人間ではない<sup>414</sup>と説明し、「もし支配者となることを彼らに承知させようとするならば、強制と罰とが彼らに課せられなければならない<sup>415</sup>と語る。古代のギリシヤ社会では、都市国家における役職は市民の間での役割分担であって、市民の公務であったと考えられる。上のソクラテスの説明では、支配は支配者自身の利益のためではなく、被支配者の利益のためになされると理解される。だから、立派な人物にとっては、強制されることもなく、進んで支配者の地位に就こうとすることはみっともないことと考えられたから、優れた立派な人物は「支配することを何か善いことであると考えたり、その地位にあって善い目にあうことを期待したりして、支配に赴くわけではない<sup>416</sup>とソクラテスに説明させる。この発言の背景には、当時のアテナイ社会において、支配の地位を廻って競う現実があったことを連想させる。少なくともプラトンは、そのような支配者の地位を廻る争いが当時のアテナイの社会の現実であると認識していたと思われる。支配者が報酬のためではなく、他の人（被支配者のために）支配することであることを明らかにすることによって、プラトンは、自説「自分の利益ではなく被支配者の利益を考えるものである<sup>417</sup>ことを真の正義であると確信して、対話するなかでソクラテスに繰り返し語らせている。

<sup>413</sup> プラトンの兄である。前掲書『ソクラテスの思い出』第3巻6（138ページ15から17行目）に、グラウコンについて、「アリストーンの息子のグラウコンがまだ20歳にもならぬのに、国家の頭に立つことを望んで演壇に上りはじめ、壇上から引き下ろされては物笑いとなっているのを、親戚あるいは友人の誰一人やめさせることができなかった」と語られている。これから判断すると、プラトンの兄グラウコンは、怖いもの知らずの男であったと思われる。

プラトンが何故『国家』の支配者あるいは支配者階級に関する問題を検討するソクラテスの討論者にグラウコンを選んだのであろうか。多分、グラウコンが「国家の頭に立とう」と大志を抱いていたからであろう（前掲書『ソクラテスの思い出』第3巻6（139ページ5行目））。

<sup>414</sup> 前掲書『国家（上）』347B（第1巻第19章、84ページ12から85ページ2行目）。

<sup>415</sup> 前掲書『国家（上）』347C（第1巻第19章、85ページ3から4行目）。ソクラテスは、罰の最大なものは、「もし自分が支配することを拒んだ場合、自分より劣った人間に支配されるということ」と言う（上掲書『国家（上）』347C（第1巻第19章、85ページ7から8行目））。この罰を避けるために立派な人物は、自分が支配者になるのであるとソクラテス（プラトン）は考えている。

<sup>416</sup> 前掲書『国家（上）』347CからD（第1巻第19章、85ページ11から12行目）。

<sup>417</sup> 前掲書『国家（上）』347D（第1巻第19章、86ページ1から2行目）。

不正は悪徳になり、正義は徳であると確信していたソクラテスは、トラシマコス正義論には賛成できなかった。しかし、ソフィストとして知られていたトラシマコスは、正義を「世にも気だかい人の好き」<sup>418</sup>と呼び、不正を「計らいの上手」<sup>419</sup>と言って、不正な人々には知恵があり、すぐれた人間であると語る。このことは、プラトンが正義に割り当てることを、トラシマコスは不正に属させていることになる。この見解は、ソクラテスの語る正義とは真逆の見解である。トラシマコスの認識に困惑したソクラテスは、不正が徳ではなく悪徳であることを証明せざるを得なくなる。

ソクラテスは、正しい人の正しい人に対して分をわきまえて向かう姿勢と、不正な人があらゆる人の分をおかそうとする姿勢とを比較検討し、そして不正な人が知者ではないという結論を引き出している。その上で、不正な人は、知者ではないので、すぐれた人ではないと結論する。そして、不正な人には徳がないという結論に達している。

その論証の過程を簡潔に示すことにしよう。プラトンは正しいこととは分をおかさないうことであるという。これは、経済学で問題にする分配分のことであるが、自然によって決められている分配分を犯さないことが正しいことであり、それを犯すことが不正なことであるとプラトンは想定する。この想定のもとで、正しい人は「正しい人に対しては、相手をしのぐべきだと思わず、それを欲しもしない」<sup>420</sup>が、不正な人に対して、「相手をしのぐことを当然と思い、正しいと考えるだろう」<sup>421</sup>とソクラテスに説明させる。トラシマコスは、正しい人が正しい人の分を犯さないことを、分をおかして相手をしのごうとは思わないことを、お人好しであると認識している。多分、この認識は一般の人々の認識を代弁しているであろう。しかし、分をおかしている不正な人に対しては、正しい人は、相手をしのごうと思うのは当然である<sup>422</sup>とプラトンは説明する。どうしてであろうか。他人のもの（分配分）までも掠め取ろうとする行為は、分をおかすまいとする（分配分を守ろうとする）正しい人の分までも掠め取ろうとするので、正しい人は不正な人の行為から自身の分配分ならび他の正しい

<sup>418</sup> 前掲書『国家（上）』348D（第1巻第20章、88ページ15行目）。

<sup>419</sup> 前掲書『国家（上）』348D（第1巻第20章、88ページ1行目）。プラトンは、前掲書『プロタゴラス』319A（9、36ページ15から37ページ2行目）において、ヒポクラテスに彼の学ぶこととして、「身内の事柄については最もよく自分の一家を斉える道をはかり、さらに国家公共の事柄については、これを行なうにも論ずるにも、最も有能有力の者となるべき道をはかることの手というものが、これである」と語らせている。プラトンは、計らい（はからい）の上手によって、「全体としての国家自身のために、どのようにすれば自国内の問題についても他国との関係においても、最もよく対処できるかを考慮するような知識」を意味していると考えられる（前掲書『国家（上）』428D（第4巻第6章、318ページ10から12行目））。

<sup>420</sup> 前掲書『国家（上）』349C（第1巻第20章、91ページ11から12行目）。

<sup>421</sup> 前掲書『国家（上）』349B（第1巻第20章、91ページ6から7行目）。

<sup>422</sup> 何故当然であるのであろうか。不正な人に対して、その不正を凌ぐ、つまり、押しのけるのが当然であるとプラトンは考えているのであろう。



人の分配分を守ろうとする。このことが「相手をしのごう」とする姿勢になる。他方、不正な人は「正しい人および正しい行為に対し、分をおかして相手をしのごうのが当然だと思うだろう」<sup>423</sup>、さらに「不正な人間および不正な行為に対しても、不正な人は、その分をおかそうとするだろう」<sup>424</sup>とソクラテスに語らせる。不正な人はあらゆる人の分（取り分あるいは分配分）をおかそうとする。このことは不正な行為である。正しい人と不正な人の違いは、自分と相似ている人に対する姿勢が異なる点である。正しい人は、自分に相似た人に対して分をおかそうとはしないが、不正な人は、相似た人に対してもその分をおかし、凌ごうとする。

ソクラテスは、「知恵のある、すぐれた人は、自分と相似た人に対しては、分をおかして相手より多くのことをしようとしませんが、自分と相似ぬ反対の性格の人に対しては、そうしようとする」<sup>425</sup>と説明する。他方「劣悪で無知な人は、自分と相似た人に対しても反対の性格の人に対しても、そうしようとする」<sup>426</sup>と説明する。知恵ある人は、自分と相似た人には分をおかして相手をしのごうとはせず、相似ない人をしのごうとする。無知な人は、自分と相似た人に対しても相似ていない人に対しても、分をおかして相手をしのごうとする。プラトンは、知識のある人は知恵があり優れた人と認識している。知恵のある（知識のある）人は、「同じ行為に関しては、自分と相似た人がなすのと同じ事柄を選ぶ」<sup>427</sup>が、知識のない人は、「知識のある人に対しても知識のない人に対しても同じように、分をおかして余計なことをなす」<sup>428</sup>とソクラテスに語らせる。

プラトンは、知識のある（知恵のある）人が正しい人と同じ特性をもち、無知な人が不正な人と同じ特性をもつことを明らかにすることによって、「正しい人間は知恵のある、すぐれた人であり、不正な人間は無知で劣悪な人である」<sup>429</sup>ことを明らかにした。プラトンは、不正な人は、優れた人でない、あるいは徳のない悪徳な人であると結論する。ここに至って、ソクラテスは、不正な人はすぐれているとういうトラシユマコス的主張を退けることができた。プラトンは、分を守ることが正義であるすることによって、支配者は分配分を犯さない支配をすることが正義であると説いている。この点はプラトンの支配論は、経済学において分配の公平さを考察する際に大切な言説になる。

それでは、プラトンは「自分の利益ではなく被支配者の利益を考えるものである」という言説を説明し得たのであろうか。正しいこととはなんであらうか、つまり正しい分配分とは

<sup>423</sup> 前掲書『国家（上）』349C（第1巻第20章、91ページ14から15行目）。

<sup>424</sup> 前掲書『国家（上）』349C（第1巻第20章、92ページ2から3行目）。

<sup>425</sup> 前掲書『国家（上）』350B（第1巻第21章、95ページ8から10行目）。

<sup>426</sup> 前掲書『国家（上）』350B（第1巻第20章、95ページ12から13行目）。

<sup>427</sup> 前掲書『国家（上）』350A（第1巻第21章、94ページ14から15行目）。

<sup>428</sup> 前掲書『国家（上）』350B（第1巻第21章、95ページ1から2行目）。

<sup>429</sup> 前掲書『国家（上）』350C（第1巻第21章、95ページ11から12行目）。

なんであろうか。これはまだ未解決である。すなわち、まだ不正を「計らいの上手」と説明するトラシマコスの見解を論破していない。

### 第3節 共同生活あるいは共同作業と正義

#### 第1項 国家における正義の効果：協力と友愛から善き生活へ

ソクラテスとトラシマコスの間では、「〈正義〉は徳（優秀性）であり知恵であること、〈不正〉は悪徳（劣悪性）であり無知であること」<sup>430</sup>に同意された。この同意を前提に、プラトンは国家における正義あるいは不正の力がいかなるものかを両者の間の問答を通じて考察する。

プラトンは、「他の国より強力になる国というものは、正義の助けなしにその力をもちうるだろうか、それとも、必ず正義の力を必要とするだろうか」<sup>431</sup>と問題提起する。共同体としての国家を保持するには国民の間での共同作業が必要となるが、プラトンはこの問題を考察し、その共同作業で不正が働くときには、その共同作業の目的を達成されないと主張する。プラトンは、国家における正義の力の必要性を確信する。ソクラテスに「〈不正〉はお互いのあいだに不和と憎しみと戦いをつくり出し、〈正義〉は協調と友愛をつくり出すものだ」<sup>432</sup>と語らせる。たとえば、二人からなる共同社会にいて「不正が宿れば、その二人は仲違いをし、憎み合い、正しい人々に対すると同じく、お互いに対しても敵となる」<sup>433</sup>とソクラテスに語らせる。この事実は、不正が「分を超えて他を犯す」から不和や仲違いが共同体に生まれ、〈不正〉は共同社会の維持を不可能にすることを示している。分を超えて他を侵す不正は「国家であれ、氏族であれ、軍隊であれ、他の何であれ、およそ何もの内に宿るのであろうとも、まずそのものをして、不和と仲違いのために共同行為を不可能にさせ、さらに自分自身に対して、また自分と反対のすべての者、すなわち正しい者に対して、敵たらしめるもの」<sup>434</sup>とソクラテスに主張させる。不正は、不和と不仲のために共同作業を不可能にする。これがプラトンの命題である。これは、分を超えて他を侵す行為が不和と不仲の原因となることを意味する。不正は、自分自身に対しても、また自分に反対するすべての者、正しい者と不正な者に対しても、敵になる。

プラトンによると、不正は、他の人と共同作業を行う場合と同様に、個人の内面における不和や不一致や仲違いを起し、そのために何かを行うことを不可能にし、さらに「自己自

<sup>430</sup> 前掲書『国家（上）』350D（第1巻第21章、97ページ5から6行目）。

<sup>431</sup> 前掲書『国家（上）』351B（第1巻第21章、99ページ6から8行目）。

<sup>432</sup> 前掲書『国家（上）』351D（第1巻第23章、100ページ9から10行目）。

<sup>433</sup> 前掲書『国家（上）』351E（第1巻第23章、101ページ3から4行目）。

<sup>434</sup> 前掲書『国家（上）』351Eから352A（第1巻第23章、101ページ11から14行目）。

身に対しても正しい者に対しても敵たらしめる」<sup>435</sup>。完全に不正な人々には「事をなすのもまた完全に不可能であるはず」<sup>436</sup>である。

プラトンは、正しい人々は知恵においても特性においても実行力においても優っていて、これに対して不正な人々は共同して行動を起こすことすらできないという結論<sup>437</sup>に至る。

次に、正義は、共同体の間での和を、協同を維持させる力であるが、人々に善き生活あるいは幸福な生活を保証するのであろうか。この問題をソクラテスとトラシマコスの間での問答を通してプラトンは考察し検討する。ソクラテスは「正しい人々は不正な人々よりも善き生を送り、より幸福でもあるかどうか」<sup>438</sup>と問う。正しい人が善き生(幸福な生活)を送るかどうかを判断するために、人間の社会での正義のはたらきとは何かを明らかにすることから始める。〈はたらき〉をなすことが仕事であると想定し、ソクラテスに〈はたらき〉とは、「『ただそれだけが果たしうるような、あるいは、他の何よりもそれが最も善く果しうるような仕事』ではあるまいか」<sup>439</sup>と語らせる。プラトンにとっては、仕事とは働きで、「ただそれだけが果たしうるような」仕事に正義が宿ることになる。ソクラテスは、それぞれの仕事には、「それが本来果たすべき〈はたらき〉が定まっているのに対応して、〈徳〉(優秀性)というものもあるとは思わないか」<sup>440</sup>とトラシマコスに問う。目を例にして、〈はたらき〉と徳の関係を説明している。目には特定の〈はたらき〉があるが、この特定のはたらきを果たすには、「目が自分に固有の〈徳〉(優秀性)をもたずに、かわりに〈悪徳〉(劣悪性)をもっているとしたら、はたして自分本来の〈はたらき〉を立派に果すことができるだろうか」<sup>441</sup>とソクラテスが問うと、トラシマコスは、それぞれのものには特有の徳(すぐれたもの、すぐれたこと)があるというソクラテスの見解に同意する。

目や耳などと同様に、魂<sup>442</sup>にも〈はたらき〉があるのではないかとソクラテスは、魂と正

<sup>435</sup> 前掲書『国家(上)』352A(第1巻第23章, 102ページ2から3行目)。

<sup>436</sup> 前掲書『国家(上)』352C(第1巻第23章, 103ページ8行目)。

<sup>437</sup> 前掲書『国家(上)』352BからC(第1巻第23章, 102ページ13から15行目)参照。

<sup>438</sup> 前掲書『国家(上)』352D(第1巻第23章, 103ページ10から11行目)。

<sup>439</sup> 前掲書『国家(上)』353A(第1巻第24章, 105ページ11から13行目)。

<sup>440</sup> 前掲書『国家(上)』353B(第1巻第24章, 106ページ1から2行目)。

<sup>441</sup> 前掲書『国家(上)』353C(第1巻第24章, 106ページ14から16行目)。

<sup>442</sup> プラトンは、『パイドロス』246A(58ページ6から7行目)において、「魂の似すがたを、翼を持った一組の馬と、その手綱をとる翼を持った馭者とが、一体になってはたらく力であるというふう」に譬えている。そこでは、これに続けてプラトンは、魂が二頭の馬と一人の馭者によって構成され、一頭の馬(右の馬)は、端正な姿、美しい四肢、高いうなじ、威厳のある鉤(かぎ)鼻、白い毛並み、黒い目をし、節度と慎みを併せ持った名誉を愛好する資質で美しく、血筋も善い馬で、他のほうは、歪んだ形、贅肉で重苦しく、でたらめな軀の組み立て、太いうなじ、短い頸、平たい鼻、どす黒く、灰色の血走った目をし、放縦と高慢な資質も醜く、血筋も悪い馬であった。馭者は、正反対の資質ならびに血筋をもつ二頭の馬を制御する仕事をす、と説明している。さらに、「神にゆかりある性質—それは、美しきもの、智なるもの、善あるもの、そ

義の関係に思考を拡げる。魂のはたらきとは「配慮すること、支配すること、思案すること、およびこれに類することすべてがそうだ」<sup>443</sup>が、これらが魂の固有のはたらきである。プラトンは、魂のはたらきについて「魂こそ、現在あるもの、過去にあったもの、将来あるだろうもの、さらにはまた、それらとは反対のものすべてを、最初に生じさせたり、最初に運動変化させたりするものと同じものである」<sup>444</sup>と説明する。魂が運動の始原であり、万物のなかで最古のものである。また、プラトンは、魂の徳というものがあると考え、「劣悪な魂は必ず劣悪な仕方で支配したり、配慮したりするし、すぐれた魂はすべてそうしたはたらきを善く行なう」<sup>445</sup>とソクラテスに語らせる。

すでに、ソクラテスとトラシマコスの間では、「〈正義〉は徳（優秀性）であり知恵であること、〈不正〉は悪徳（劣悪性）であり無知であること」に同意し、ソクラテスは「正しい魂や正しい人間は善く生き、不正な人間は劣悪に生きる」<sup>446</sup>と主張し、「善く生きる人は祝福された幸せな人間であり、そうでない人はその反対だ」<sup>447</sup>と説明する。プラトンは、ソクラテスに「正しい人は幸福であり、不正な人はみじめである」<sup>448</sup>と語らせ、「〈不正〉が〈正義〉より得になるということは、絶対にない」<sup>449</sup>と結んでいる。

## 第2項 善としての正義と一般の人々による不正の礼讃

正義は、共同体を維持するために欠かせなく人を仕合わせにすると結論し、次に、プラトンは善と正義の関係について考察する。プラトンは、正義は善である<sup>443</sup>と考える。彼は、善きものとして三種類を挙げる。第一に、善きものとは、「それをただそれ自体のために愛するゆ

---

してすべてこれに類するものである」と説いている（上掲書『パイドロス』246E（59ページ16から60ページ1行目））。魂の特性については、拙著『プラトンの『パイドロス』における魂と神（神霊）の関係の考察—プラトンによるソフィストあるいは弁論術の批判—』の第1節魂の特性（1.1 不死性、1.2 魂の相、1.3 生けるものの不死性ならびにその死滅性）を参照。

<sup>443</sup> 前掲書『国家（上）』353D（第1巻第24章、107ページ15から16行目）。

<sup>444</sup> プラトン著（森進一・池田美恵・加来彰俊共訳）『法律（下）』896A（第10巻第7章、277ページ15から278ページ2行目）。

<sup>445</sup> 前掲書『国家（上）』353E（第1巻第24章、108ページ12から13行目）。

<sup>446</sup> 前掲書『国家（上）』354A（第1巻第24章、109ページ2行目）。

<sup>447</sup> 前掲書『国家（上）』354A（第1巻第24章、109ページ5から6行目）。プラトンは、『ゴルギアス』507C（193ページ4から9行目）において、「その思慮節制のある人というのは、いまほくたちが見てきたように、正しくて、勇気があって、そして敬虔な人であるから、（それらの基本的な徳を全部そなえているという意味で）、完全に善い人なのだ。そして善い人というのは、何ごとを行なうにしても、それをよく、また立派に行なうものだ。で、よいやり方をする者は仕合わせであり、幸福であるが、これに反して、劣悪でそのやり方の悪い者は不幸である、ということは万々間違いないのだ」とソクラテスに語らせている。

<sup>448</sup> 前掲書『国家（上）』354A（第1巻第24章、109ページ8行目）。

<sup>449</sup> 前掲書『国家（上）』354A（第1巻第24章、109ページ13から14行目）。

えに、もちたいと願うようなもの<sup>450</sup>と説明し、その例として、「悦ぶことや、害を伴わない快樂—すなわち、それがつづく間の悦びそのもののほかには、先になってから何らその快樂のために生じてくるもののないような快樂—など<sup>451</sup>を挙げる。第二に、善きものとは、「それ自体のためにも愛し、それから生じる結果のゆえにも愛するようなもの<sup>452</sup>と説き、その例として「知恵をもつこと、ものを見ること、健康であることなど<sup>453</sup>を示す。第三に、善きものとは、「それら自体のためではなく、報酬その他、そこから生じる結果のゆえに、もちたいと願う<sup>454</sup>と説いている。その例として、「身体の鍛錬とか、病気のとき治療を受けることとか、医療やその他の金儲けの仕事などが含まれるようなもの<sup>455</sup>を示す。正義は、この三種の善きものなかで第二の善に属するとし、「幸せになろうとする者が、それをそれ自体のためにも、それから生じる結果のゆえにも、愛さなければならないようなものに属する<sup>456</sup>とソクラテスに語らせている。

しかし、一般の人々（当時のギリシヤの人々）が実践していた正義は、プラトンの善としての正義とはかなり異質であった。正義について「報酬のためや、世間の評判にもとづく名声のためにこそ、行なわなければならないけれども、それ自体としては、苦しいから避けなければならないような種類のものに属する<sup>457</sup>と当時のアテナイの人々は見ていたと思われる。正義は、苦しいものと一般の人々によって看做されていた。プラトンは、既に説明したように、正しいことを第二の善に属すると想定し、さらに「〈正〉〈不正〉のそれぞれが何であるか、また、それぞれが魂の内にあるときに、純粹にそれ自体としてどのような力をもつものなのか、ということなのであって、報酬その他、その結果として生じるいろいろの事柄は、いっさい排除しておきたい<sup>458</sup>と問答の前提をおく。ここでは、既に検討してきた正義の社会における効果（利益）については、正義の規定の考察の外に置いている。

この段階で、ソクラテスの問答者はグラウコンにされる。トラシュマコス<sup>459</sup>は、正義の社会的利益についてソクラテスと問答していたが、グラウコンは正義そのものを問題としている。そこで、プラトンは、トラシュマコスに代わってグラウコンをソクラテスの問答の相手にし、

<sup>450</sup> 前掲書『国家（上）』357B（第2巻第1章、113ページ1から2行目）。

<sup>451</sup> 前掲書『国家（上）』357B（第2巻第1章、113ページ3から4行目）。

<sup>452</sup> 前掲書『国家（上）』357C（第2巻第1章、113ページ7から8行目）。

<sup>453</sup> 前掲書『国家（上）』357C（第2巻第1章、113ページ8から9行目）。

<sup>454</sup> 前掲書『国家（上）』357CからD（第2巻第1章、113ページ15から16行目）。

<sup>455</sup> 前掲書『国家（上）』357C（第2巻第1章、113ページ12から14行目）。

<sup>456</sup> 前掲書『国家（上）』358A（第2巻第1章、114ページ5から6行目）。

<sup>457</sup> 前掲書『国家（上）』358A（第2巻第1章、114ページ8から10行目）。プラトンは、トラシュマコスの正義論に当時のギリシヤ（アテナイ）の人々の認識を代表させていると思われる。

<sup>458</sup> 前掲書『国家（上）』357B（第2巻第2章、115ページ5から8行目）。



正義と不正のいずれが人々を幸福にするかを考察する。グラウコンは、本来、正義を支持する人であったが、ソクラテスから正義論を引き出すために、不正の讃美者に扮して、不正礼讃を展開する対話者に仕立てられる。グラウコンは、一般の人々が信じている正義とは何かをその起源から説きはじめ、不正の讃美を展開する。

グラウコンは、人々の見解では、正義とは社会契約の意味をもつものとして成立している」と説明される。一般の人々の主張では、「自然本来のあり方からいえば、人に不正を加えることは善（利）、自分が不正を受けることは悪（害）である」<sup>459</sup>が、人々が社会生活を体験するにつれて、「自分が不正を受けることによってこうむる悪（害）のほうが、人に不正を加えることによって得る善（利）より大きい」<sup>460</sup>と感じるから、「一方を避け他方を得るだけの力のない連中は、不正を加えることも受けることもない互いに契約を結んでおくのが、得策である」と考えるようになる」<sup>461</sup>と社会契約的正義論の成立経緯を説明し、その結果、人々は法律を制定し、お互いの間の契約を結び、「法の命ずる事柄を『合法的』であり、『正しいこと』であると呼ぶようになった」<sup>462</sup>と結んでいる。グラウコンは、この起源をもつ正義は消極的な意味での善であると理解している。この社会契約から生まれる正義については、「不正をはたらきながら罰を受けないという最善のことと、不正な仕打ちをうけながら仕返しをする能力がないという最悪のこととの、中間的な妥協なのである」<sup>463</sup>から、「けっして積極的な善としてではなく、不正をはたらくだけの力がないから尊重されるというだけのことである」<sup>464</sup>とグラウコンは社会契約的正義の特性を解説する。このグラウコンの説明からすると、不正を働く力のある人は、決して、上で説明したような中間にある正しいことを歓迎して、不正を加えることも受けることもしないという契約を結ぶことはないと考えられる。

さらに、グラウコンは、社会では正義より不正が人々を仕合わせに導くと想定し、正しい者も欲心（分をおかすこと）に駆られるという極論を繰りひろげ、不正が社会においては善であるという考えを展開する。一般の人たちには、社会契約をベースに「すべて自然状態にあるものは、この欲心をこそ善きものとして追求するのが本来のあり方なのであって、ただそれが、法の力でむりやりに平等の尊重へと、わきへ逸らされているにすぎない」<sup>465</sup>と看做していると考えて、グラウコンは、リュディアの人ギュゲスが大地の穴にあった屍から抜き取った指輪（黄金の指輪）の威力（何でも自由放題にできる力）に頼って、彼が仕えていた

<sup>459</sup> 前掲書『国家（上）』358E（第2巻第2章、117ページ3から4行目）。

<sup>460</sup> 前掲書『国家（上）』358E（第2巻第2章、117ページ4から6行目）。

<sup>461</sup> 前掲書『国家（上）』359A（第2巻第2章、117ページ7から9行目）。

<sup>462</sup> 前掲書『国家（上）』359A（第2巻第2章、117ページ10から11行目）。

<sup>463</sup> 前掲書『国家（上）』359A（第2巻第2章、117ページ13から14行目）。

<sup>464</sup> 前掲書『国家（上）』359B（第2巻第2章、117ページ15から16行目）。

<sup>465</sup> 前掲書『国家（上）』359D（第2巻第2章、118ページ13から15行目）。

リュディア王の妃に通じ、その妃と共謀して、王権を奪った話し<sup>466</sup>を示し、そして、正しい人であっても、指輪をもったならば、不正者と同じように人からものを盗み、人を犯し不正者と同様の行動をとると言う。このことから、グラウコンは、「何びとも自発的に正しい人間である者はなく、強制されてやむをえずそうになっているのだということの、動かぬ証拠」<sup>467</sup>を人々の見解として展開し、その何でも自由放題になる指輪を嵌めた人間の行動は、不正者の如き行動をするという当時のアテナイの人々の見解を支持する。このことは、正義は善ではなく、「すべての人間は、〈不正〉のほうが個人的には〈正義〉よりもずっと得になると考えている」<sup>468</sup>ということを意味している。もし人が何でも好き放題にできる自由を手にしていながら、何一つ悪事をなさないならば、その人は「世にもあわれなやつ、大ばか者と思われる」<sup>469</sup>とグラウコンに語らせている。

グラウコンの見解では、中間的妥協の意味での〈正義〉は個人的には善ではなく、〈不正〉のほうが〈正義〉より個人的には得であるとされる。グラウコンが説いている一般の人々の正義は、第三種の善に属するであろう。「それら自体のためにはなく、報酬その他、そこから生じる結果のゆえに、もちたいと願う」ことには、正義自体ではなく、その報酬(効果)が含まれている<sup>470</sup>。プラトンは、当時のギリシヤ社会では、依然として、正義自体(正義の本質)がまだ立証されていないことを認識していた。

### 第3項 正しい人が仕合わせか、それとも不正な人が仕合わせか

ソクラテスは正しい人が仕合わせになると主張し、グラウコンは不正な者のほうが仕合わせであると主張する。プラトンは、この問題を純粋に正しい人ならびに純粋に不正な人を作り上げて、両者を比較し、いずれがより仕合わせかを考察する。すなわち、完全に不正な人間と完全に正しい人間との間でのいずれがより幸福であるかを比較する。完全に不正な人間と完全に正しい人間の特性を明らかにする。最初に、完全に不正な人を「最大の悪事をはたらきながら、正義にかけては最大の評判を、自分のために確保できる人である」<sup>471</sup>と規定し

<sup>466</sup> 前掲書『z 国家(上)』359D から 360B (第2巻第3章, 119 ページ1 から 120 ページ10 行目) 参照。

<sup>467</sup> 前掲書『国家(上)』360C (第2巻第3章, 121 ページ5 から 6 行目)。

<sup>468</sup> 前掲書『国家(上)』360D (第2巻第3章, 121 ページ8 から 9 行目)。

<sup>469</sup> 前掲書『国家(上)』360D (第2巻第3章, 121 ページ12 から 13 行目)。

<sup>470</sup> グラウコンの命題は、「完全に不正な人間でありながら、世間の評判では正しい人であると思われているものにとって、不正をはたらくことが有利である」と示せる(前掲書『国家(下)』588B (第9巻第12章, 324 ページ12 から 13 行目)。この命題に反例(あるいは反対の命題)を示すために、プラトンは、彼自身で国家を建設し、正義とは何かを示し、グラウコンの命題に反対する命題の提示を試みる。プラトンの回答については、『国家(下)』588E から 589B (第9巻第12章, 326 ページ14 から 328 ページ7 ページ)を参照する。勿論、正義を讃える人の説の方が不正を讃える人の説よりも、真実であるとしている。不正は、理性を欲望の奴隷にするというのがプラトンの見解であろう。

ている。この不正な人については、譬え誤りを犯しても、その誤りを弁論する能力を持っていて、その不正を力づくで押さえ込むだけの勇気があり、味方する仲間と金銭を用意し、相手を押さえ込む実力がある人と想定される。それに対して、正しい人を「単純で、気だかくて、アイスキュロスの言い方を借りれば、『善き人と思われることではなく、善き人であることを望む』ような人間」<sup>472</sup>と想定される。ここでは、正しい人間とは、善き人とされるものではなく、善き人であると規定する。その上で、正しい人には、何一つ不正を働かないのに、「不正であるという最大の評判を受けさせる」<sup>473</sup>人とする。何故このような特性を正しい人に与えるのかと言えば、この悪評のために、正しい人がへなへなにならないことがあきらかにされるとき、その人が正しい人であることが証されることになるからである。正しい人は、「生涯を通じて不正な人間だと思われながら、しかし実際には正しい人間」<sup>474</sup>として堅固不変な生活を送る期待が込められている。

次に、極端に仕上げられた二人の純粋な人間で、いずれが幸せになるかについて検討する。グラウコンは、不正な人間こそは、真実に即して事を行ない、人の評判のために生きるのではない以上、不正と思われることではなく、不正であることを望む人<sup>475</sup>と説く。この世において不正な人にもたらされる善いことには、第一に、正しい人と思われているがゆえに、国の支配権を手に入れ、第二に、好きなところから妻をもらい、好きな者の所へ子供たちを縁づけ、誰とも望む者と組んで仕事をし、交際をする<sup>476</sup>。第三に、不正な人は不正を働くことを何ら気にしないので、自分の儲けのためにそれらすべてを利用して利益を収める<sup>477</sup>。そして、第四には、彼は、争いごとを望み、敵に勝ってより多くを獲得し、金持ちになり、友には恩恵を施し、敵には害を与える<sup>478</sup>。不正な人は「神々には、物惜しみせず豪勢に数々の犠牲を供え、捧げものを奉納する」<sup>479</sup>人である。グラウコンが作り上げた不正な人の特性からすると、不正な人は、正しい人よりも、神に愛される人となる。グラウコンは、「不正な人間には、神々からも人間からも、正しい人間にくらべて、より善い生活がもたらされる」<sup>480</sup>と彼の見解を語る。

<sup>471</sup> 前掲書『国家（上）』361A から B（第2巻第4章、123 ページ4 から5 行目）。

<sup>472</sup> 前掲書『国家（上）』361B（第2巻第4章、123 ページ12 から13 行目）。

<sup>473</sup> 前掲書『国家（上）』361C（第2巻第4章、124 ページ4 行目）。

<sup>474</sup> 前掲書『国家（上）』361D（第2巻第4章、124 ページ7 から8 行目）。

<sup>475</sup> 前掲書『国家（上）』362A（第2巻第5章、125 ページ11 から14 行目）参照。

<sup>476</sup> 前掲書『国家（上）』362B（第2巻第5章、126 ページ2 から5 行目）参照。

<sup>477</sup> 前掲書『国家（上）』362B（第2巻第5章、126 ページ5 から7 行目）参照。

<sup>478</sup> 前掲書『国家（上）』362B から C（第2巻第5章、126 ページ7 から9 行目）参照。この友を利し、敵には害するとい考えは、ポレマコス<sup>479</sup>の考えである。

<sup>479</sup> 前掲書『国家（上）』362C（第2巻第5章、126 ページ9 から10 行目）。

<sup>480</sup> 前掲書『国家（上）』362C（第2巻第5章、126 ページ13 から14 行目）。

他方、グラウコンによって作り上げられた正しい人は不正な人であるという‘最大の評判’をうけているので、グラウコンは「彼は鞭打たれ、拷問にかけられ、縛り上げられ、両眼を焼かれてくり抜かれ、あげくの果てにはありとあらゆる責苦を受けたすえ、磔はりつけにされるだろう。そして、正しくあることをでなく、正しく思われることをこそ望むべきだと」<sup>481</sup>と説明する。

ソクラテスが正しい人のほうが幸福であるという提案をする段になると、グラウコンの兄アデイマントスが割り込んできて、彼は正義を礼讃し、不正を咎める論を語り出す。グラウコンが支持する正義を礼讃する人々は、正義それ自身を讃美するのではなく、正義と思われれることの効果を讃美しているとアデイマントスは説明する。たとえば、正しい人であれと他人(子供などに)に勧告する人々は、「正しい人であると思われることによって、その評判から、役職、結婚その他、グラウコンがいま数え上げたようなすべての善いものが手に入る」<sup>482</sup>正義を讃美する。たとえば、また、父親が息子に、「正しい人でなければならないと説き勧める」<sup>483</sup>のは、正義そのもののためではなく、「〈正義〉がもたらすよい評判を讃えている」<sup>484</sup>のである。また人々は、神々からよく評判されることを勘定に入れて行動している。「敬虔な人々に神々が与えると言われていた数々の善いものを、ふんだんに挙げることができる」<sup>485</sup>と彼は言う。たとえば、プラトンは、ヘシオドスの『仕事と日』(225から235)(38ページ4から39ページ7行目)から「異国の者にも同国の者にも、分けへだてなく、正しい裁きをください、正義の道を踏み外さぬ者たちの国は栄え、その国の民も花開くごとくさきわうものじゃ。国土には若者を育てる「平和」の気が満ち、遙かにみはるかすゼウスも、この国には、苦難に満ちた戦争をおこさせようとは決してなさぬ。正しい裁きの行われる国では、「飢え」<sup>リーモス</sup>も「災禍」<sup>デーテー</sup>もつきまとわず、人々は宴うたげを催し、おのれの丹精した田畑したつづみの稔りに舌鼓したつづみを打つ。この国の大地は、命の糧をゆたかにもたらし、山では檜かしの木が、その頂きに檜の実をみらせ、幹の中には蜜蜂が巣くう。羊はその毛も房々と重たげに垂れ、女どもは父親に似た子を産む」を引いている。このヘシオドスの詩には、正義の国家には、人々を祝福し、平和と豊穡を神々にもたらすことが詠われている。また、詩人ホメロスの『オデュッセイア(下)』第19歌(106-122)(180ページ12から15行目)から「神を怖れる敬虔けいけんな心を抱き、多くの遅い民に君臨し、正義を堅持する王—黒き大地は大麥、小麦をもたらし、樹々には果実が枝もたわわに実る。家畜は休みなく仔を産み、海は魚類を恵んでくれる—すべて王の統治よろ

<sup>481</sup> 前掲書『国家(上)』361Eから362A(第2巻第5章, 125ページ7から10行目)。

<sup>482</sup> 前掲書『国家(上)』363A(第2巻第6章, 128ページ4から6行目)。

<sup>483</sup> 前掲書『国家(上)』363A(第2巻第6章, 128ページ2行目)。

<sup>484</sup> 前掲書『国家(上)』363A(第2巻第6章, 128ページ3から4行目)。

<sup>485</sup> 前掲書『国家(上)』363A(第2巻第6章, 128ページ9から11行目)。

しきを得たため、かかる王の下にこそ民はさかえるのですが」を引いている。ここでも神々に祝福され、正しき支配のもとで、豊穡がもたらされることが詠われている。神々による敬虔な人々に対する善きものが与えられることがヘシオドスならびにホメロスによって詠まれている。正しい人は、ハデス（冥界）において、「寝椅子に横たわり、頭には花冠を戴いて、敬虔な人だけに許される饗宴にあずかることになり、それからはもう、全時間を陶醉たる酔いのうちに過ごす」<sup>486</sup>とプラトンも神々によって正しき者への賜物について引用する。プラトンは、「あたかも徳がもたらしうる最美の報酬は、永遠の醜醜であるかのように考えられている」<sup>487</sup>と結んでいる。他方、不敬虔な者あるいは不正な者は、「ハデスの国（冥界）で泥か何かに埋められたり、篩<sup>ふるい</sup>で水を運ぶことを強いられたりする」<sup>488</sup>のみならず、「この世に生きているあいだにも、数々の悪評を身に受けて」、「さまざまな罰を受ける」<sup>489</sup>とアデイマントスに語らせる。たとえば、この世に生きている間、不正な人に向けられるのは、鞭打たれ、拷問にかけられ、縛り上げられ、両眼を焼かれて抜かれ、最後にはあらゆる責苦を受けたすえに、磔<sup>はりつけ</sup>にされる罰である<sup>490</sup>。

プラトンは、この世では、節制や正義より、放埒や不正は快く、容易<sup>たやす</sup>く自分のものになり、それらが「醜いとされるのは世間の思わくと法律・慣習のうえのことにすぎない」<sup>491</sup>と一般の人々が見ていると認識する。また人々は「不正な事柄のほうが多くの場合正しい事柄よりも得になると言い、邪<sup>よこしま</sup>な人間であっても金とその他の力をもっていれば、そういう人間のことを、公の場でも個人的な立場でも、何はばかることなく、祝福し尊敬しよう」<sup>492</sup>と、他方、人々は「正しくても無力で貧乏な人間に対しては、前者とくらべてより善人であることは認めながらも、これを見下し、軽蔑しようとする」とアデイマントスに語らせる。プラトンは、人々が正義や節制を避け、放埒で不正になりがちであることや正しくても貧しい人々を軽蔑する社会風潮に心を痛める。

その上、プラトンが最も驚き憤慨しているのは、神々でさえ善き人々を苦しめることである。彼は「神々でさえも、善き人々に不運と不幸な生活を、悪しき人々にその反対の運命を与えることがしばしばある」<sup>493</sup>ことに心を痛める。神々の行いや技を伝える詩人の言葉で同

<sup>486</sup> 前掲書『国家（上）』363CからD（第2巻第6章、129ページ7から9行目）。

<sup>487</sup> 前掲書『国家（上）』363D（第2巻第6章、129ページ9から10行目）。

<sup>488</sup> 前掲書『国家（上）』363D（第2巻第6章、129ページ16から130ページ1行目）。

<sup>489</sup> 前掲書『国家（上）』363E（第2巻第6章、130ページ2から4行目）参照。

<sup>490</sup> この罰は、正しい人がこの世で受ける責苦に同じである。これは、グラウコンによって語られた正しい人の生涯に同じである。

<sup>491</sup> 前掲書『国家（上）』364A（第2巻第7章、130ページ14から15行目）。

<sup>492</sup> 前掲書『国家（上）』364A（第2巻第7章、130ページ15から131ページ3行目）。

<sup>493</sup> 前掲書『国家（上）』364B（第2巻第7章、131ページ6から7行目）。



じ内容をプラトンは引用する。ヘシオドスの『仕事と日』(287から292)(45ページ10から46ページ4行目)から「悪しきことはいくらでも、しかもたやすく手に入る、それに通じる道は平らかであり、しかも身近に住む。だが不死の神々は、優れて善きことの前に汗をお据えなされた、それに達する道は遠くかつ急な坂で、始めはことに凹凸がはなはだしいが、頂上に至れば、後は歩きやすくなる—始めこそ歩きたい道ではあるが」を引いている。当時の人々は、悪徳が手に入れやすいことの証しとして、このヘシオドスの一節を参照する。またホメロスの『イリアス(上)』第9歌(496-523)(288ページ12から14行目)の中から「その威徳も位も力も人間とは較べものにならぬ神々ですら、折れてくださることがある—人間がその分を越え過ちを犯した時には、香を焚いて懇ろに祈願し、神酒を献じ生贄を焼いては歎願し、神意を宥めるではないか」<sup>494</sup>の部分を引きしている。プラトンは、神々でさえ、不正人と同様に不正を崇めることに驚き落胆する。

プラトンは、「個人のみならず国家まで説得して、供犠と楽しい遊戯によって生前も死後も不正な罪を赦免され、浄められることができるのだと信じこませる」<sup>495</sup>と詩人に詠まれていることから、実際にも、この儀式によって人々は浄められたのかも知れない。「それはわれわれをあの世界での苦しい罰から解放してくれるが、この儀式をなおざりにする者には、数々の恐ろしいことがまっている」<sup>496</sup>とアデイメントスに語られている。プラトンは、正義が人々を幸せにするのか、不正のほうがより幸せにするのについては、神々でさえ不正の方が人々を幸福にすると語るのを知って、その立証する勢いを停止する<sup>497</sup>。

#### 第4節 不正の礼讃と若者の姿勢

前節前項では、プラトンは、社会に蔓延する不正の常態化を認識せざるを得なかった。それが、当時のアテナイの現状であったのかも知れない。このことから、プラトンは、正義が若者の魂にどのような影響を与えるのかを考察する。プラトンは、アデイメントスに若者たちが不正に傾く現状を語らせる。

若者たちは、正しい者であると思われることを心がけるだけでなく、「不正な人間でありながら正義の評判を確保してしまえば、至福の生活が得られる」<sup>498</sup>と思ひなし、「賢者たちが教えてくれるように、‘みかけ(と思われること)は真実にも打ち勝つ’以上、そしてこの〈みか

<sup>494</sup> 前掲書『国家(上)』364DからE(第2巻第7章, 132ページ8から11行目)参照。

<sup>495</sup> 前掲書『国家(上)』364Eから365A(第2巻第7章, 132ページ14から16行目)。

<sup>496</sup> 前掲書『国家(上)』364Eから365A(第2巻第7章, 132ページ14から133ページ3行目)参照。

<sup>497</sup> その立証(プラトンの見解の提示)は、国家の第9巻第12章から第13章まで引き延ばされる。この不正者と正しい人のいずれが幸福かへの回答は、正義とは何かが規定されてからなされる。

<sup>498</sup> 前掲書『国家(上)』365BからC(第2巻第8章, 134ページ2から3行目)。

け）こそは幸福の決め手となるものである以上、そのほうへと全力をふりむけなければならない<sup>499</sup>」と思い、「表向きの外見としては、徳に見せかけた影絵を身のまわりにまとい、背後にはしかし、世にも賢いアルキロコスが語った狡猾で抜け目のない狐を、引っぱって行かなければならない<sup>500</sup>」と彼は語る。若者たちは幸福になるためには、その道を進むことをアデイマントスが語る時、プラトンは、見せかけの正義に怒りを感じ、怒りの爆発を抑えることは出来なかったであろう。

さらに、アデイマントスは若者たちの現状を語り続ける。人目を免れるためには、同志を集め結社組織し、議会や法廷向きの知恵を授けてくれる説得術の教師に頼り、「ある場合には説得し、ある場合には力づくで押え、結局は人より多くの利得を入れながら罰を受けずにすむ<sup>501</sup>。「だが神々に対しては、その目をのがれることも、力づくで押さえることもできない<sup>502</sup>」が、「神々とは、“供物を捧げ、やさしく祈ることにより”、また奉納品を捧げることによって、その御心を動かして言いなりにさせうるものである<sup>503</sup>」と確信し、「不正な人間である場合には、われわれは利益を得て、しかもおかしな罪や過ちについては、祈りによって宥してくれるように神々を口説けば、無罪放免してもらえる<sup>504</sup>」と信じている。このようにアデイマントスが語るが、しかし、ハデスでは、不正者はその罰を受けるとプラトンは信じる。

この状況下では、「最大の不正よりも正義のほうを選ぶためのどのような根拠が、なお残っているでしょうか<sup>505</sup>」と彼は自問する。「われわれはただその最大の不正を、人目を欺く巧みな偽善の下にかくして所有しさえすればよい<sup>506</sup>、そうすると、「われわれは、神々のもとも人間たちのあいだでも、生きているあいだも死んでからのちも、気ままに暮して行けるのだということは、一般の人々も権威ある大家たちも、口をそろえて保証する<sup>507</sup>」とアデイマントスは語る。このような社会において、「何らかの力をもつ人が〈正義〉を尊重する気になるなどということが、はたしてありうるでしょうか<sup>508</sup>」と問いかける。また、正義こそが最善であると認識している人がいたとしても、彼は不正者に寛大になるであろう。というのは、「みずからすすんで正しい人間であろうとする者はなど一人もいない<sup>509</sup>。不正を非難する人

<sup>499</sup> 前掲書『国家（上）』365C（第2巻第8章、134ページ3から5行目）。

<sup>500</sup> 前掲書『国家（上）』365C（第2巻第8章、134ページ5から7行目）。この抒情詩人アルキロコスについてはよく知られていないが、前7から8世紀の詩人であるという説がある。

<sup>501</sup> 前掲書『国家（上）』365D（第2巻第8章、134ページ15から16行目）。

<sup>502</sup> 前掲書『国家（上）』365D（第2巻第8章、135ページ1行目）。

<sup>503</sup> 前掲書『国家（上）』365E（第2巻第8章、135ページ8から10行目）。

<sup>504</sup> 前掲書『国家（上）』366A（第2巻第8章、135ページ15から136ページ1行目）。

<sup>505</sup> 前掲書『国家（上）』366B（第2巻第9章、136ページ10から11行目）。

<sup>506</sup> 前掲書『国家（上）』366B（第2巻第9章、136ページ11から12行目）。

<sup>507</sup> 前掲書『国家（上）』366BからC（第2巻第9章、136ページ12から15行目）。

<sup>508</sup> 前掲書『国家（上）』366C（第2巻第9章、137ページ2から3行目）。

達は、「ひとたび力を獲得するや、たちまち誰よりも先に、できるかぎりの不正をはたらくのです」<sup>510</sup>と現実を認識するに至る。

プラトンは、トラシマコスと言説に回答することを引き延ばす。未回答になる主な点は、次の2点にである。第一に、正義は人に利益をもたらすのであろうか、それとも不利益をもたらすのであろうか。そして、第二に、正義は人間を幸福にするのであろうか、それとも不正が人間を幸福にするのであろうか、二つの論点が未回答であり、未解決のままである。これに返答し、それを論破するには、プラトン自身の正義とは何か、つまり正義そのもの、正義の本質が示される必要がある。

このことに返答し、論破するためにプラトンは、国家における正義を解明することから始める。そのつぎに、個々人の正義について考察する。本稿第4章では、ソクラテスと対話者の話し合いを通して、国家において正義とは何かを考察する。

## 第4章 国家の建設と国民の経済生活

### 第1節 国家と正義：正義そのもの

グラウコンやアデイマントスとソクラテスの間での問答を通じて、正義の社会的効果あるいは正義のもたらす利益の観点から正義について考察してきたが、プラトンは、「正義そのもの」（正義の本質、正義の本性、あるいは正真正銘の正義）とは何であるか、あるいは不正とは何かを定義しようと真剣に藻掻いている。この「正義そのもの」とは、正義の評判や名誉やその正義の報いから引き出される利益や効果ではなく、正義自体（正義の本質）のことである。「〈不正〉こそは魂が自己自身の内にもつ悪の最大のものであり、〈正義〉こそは最大の善であることをじゅうぶんに証明した者は、一人もいなかった」<sup>511</sup>とアデイマントスは言う。アデイマントスは、不正を咎め正義を礼讃するときに、「評判のことや、名誉のことや、それから結果する報いのことを云々する以外の仕方によった者はいなかった」<sup>512</sup>と言う。正義と不正のそれぞれは、「それ自体としてそれ自身の力で、どのようなはたらきをなすかということは、詩においても散文においても、かつて一度もくわしく語られたことはなかった」<sup>513</sup>が、アデイマントスは、正義が善であり、不正が悪であることを証明することをソクラテスに託す。

先に見てきたトラシマコスなどの正義あるいは不正の規定は、「通俗的な仕方（正義）」

<sup>509</sup> 前掲書『国家（上）』366D（第2巻第9章、137ページ10行目）。

<sup>510</sup> 前掲書『国家（上）』366D（第2巻第9章、137ページ14から15行目）。

<sup>511</sup> 前掲書『国家（上）』366Eから367A（第2巻第9章、138ページ12から13行目）。

<sup>512</sup> 前掲書『国家（上）』366E（第2巻第9章、138ページ7から8行目）。

<sup>513</sup> 前掲書『国家（上）』366E（第2巻第9章、138ページ10から12行目）。

と〈不正〉との力を逆転させた言説<sup>514</sup>にほかならなく、アデイマントスの求めているそれ自体としての正義そのものではない。彼は、純粹に〈正義〉と〈不正〉が「一方が善であり他方が悪であるのは、それぞれがそれ自体として、それ自身の力だけで、どのようなはたらきをその所有者に及ぼせばこそなのかを」<sup>515</sup>証明することをソクラテスに望んでいるのである。このアデイマントスの要請に答えるシナリオを通して、プラトンは正義あるいは不正についての定義を与え、国家（人間社会）においてならびに個人の魂のなかにおいて正義そのものが善であり不正が悪であること、また国家（人間社会）にあるいは人間の内面にそれぞれがどのように作用するのかを明らかにし、そして正義の所有者にいかなる利益をもたらすのかを明らかにする。

正義あるいは不正を証明するプラトンの方法は、国家において正義とはいかなるものかを始めに検討し、次に個人における正義とはいかなるものかを検討し、最後に、国家における正義と個人における正義とが矛盾しないことを明らかにして、正義の定義やその働きを説いている。

## 第2節 国家の建設の動機：自給自足社会と生産技術

プラトンは、国家が正義そのものをもつことが善であるか、それとも、そうでないことが善であるかを明らかにするために、国家を建設し、その国家において正義とは何か、そしてそれが善であるかどうかを検証することによって、国家における正義の定義とそのはたらきを明らかにする。

プラトンは、生活物資（生存するための資材）を一人では自足できないとする。それ故に、人びとは一つの居住地に集まり、共同居住するが、プラトンは、この共同居住を国家と呼び、「ひとりひとりでは自給自足できず、多くのものに不足しているから」<sup>516</sup>、国家の建設が必要になると説いている。この国家建設の動機は、生存するために国家を形成するという見解であるが、ばらばらに生活している人びとは、何故に国家を建設しようとするのか。それは、

<sup>514</sup> 前掲書『国家（上）』367A（第2巻第9章、139ページ5行目）。

<sup>515</sup> 前掲書『国家（上）』367B（第2巻第9章、139ページ10から12行目）。プラトンは、これと同じ意味のことを繰り返しアデイマントスに語らせている。「〈正義〉はそれ自体として、それ自身の力だけで、その所有者にどのような利益を与えるのか、逆に〈不正〉はどのような損害を与えるのかを、示してください」（前掲書『国家（上）』367D（第2巻第9章、140ページ12から14行目）、また「ただ〈正義〉は〈不正〉にまさるということを言葉のうえで示すだけではなく、それぞれは、神々と人間に気づかれる気づかれなにかかわりなく、それ自体としてそれ自身の力だけで、その所有者にどのようなはたらきを及ぼすがゆえに、一方は善であり、他方は悪であるのかを示してください」（前掲書『国家（上）』367E（第2巻第9章、141ページ5から8行目）。

<sup>516</sup> 前掲書『国家（上）』369B（第2巻第11章、145ページ8から9行目）。

一人で生活するときには得られなかったものが手に入れられるからである。それは、一人ひとりがばらばらに居住すると、その生存・生活に欠くことのできない必要な物品が不足する。だが、人びとが共同居住し、相互に他の人々が必要としているものを提供し合うと、不足していた物品・資材を共同体として充足することができるようになる。プラトンは、国家建設の意義と社会的分業社会の意義を理解している。

上で説明したように、一人で生活するときには不足しがちな物資を共同居住によって充足させる、すなわち国家全体では「自給自足」の状態に達成する。たとえば、農夫<sup>517</sup>が他の人々（プラトンの国家では他の多くの職人<sup>518</sup>達）に食糧品を提供することによって、農夫以外の人々（職工あるいは職人達）にあっては不足していた食糧品が充たされ、食糧品が国家として自給自足される。同様にして、その他の物品・資材についても自給自足されることになる。大工・金具工は、農夫や織物工や靴職人に家や倉庫や納屋などの建物や金具などを提供し、農夫には農耕用の鋤や鍬あるいはその他の農耕具を提供する。織物工は、農夫や大工・金具工や靴職人に羊毛等から作られる衣服類を提供する。靴職人も同様に国家を構成する農夫や大工・金具工や織物職人も靴やスリッパなどの履物を提供する。このように人々が共同居住することによって、ばらばらに居住するとき不足していた物品（生活必需品等）が充足されるようになる。

一人で生活するときには、自分自身で食糧品、家、靴ならびに衣服を作る必要があった。その場合には、大麦や小麦の種を播く時期や取り入れをする時期を違えることなく、また靴の制作や衣服の縫合をたがうことなく完成させる技術を一人ひとりが身に付けている必要がある。つまり、一人で、すべての、それらの物品・資材を制作し、縫い合わせるためのあら

<sup>517</sup> プラトンは、豪華な礼装を着て、黄金の冠を被って農夫が土地を耕す国家を描いていない（前掲書『国家（上）』420E（第4巻第1章、293ページ8から9行目）参照）。

<sup>518</sup> プラトンが認識している職人とは、手仕事職人である。プラトンは、この職人が何か制作すると言うが、その制作するものは実相（そのもの自身、本質、あるいは本性）を作ることはできないと見ている。たとえば、プラトンは、寝椅子作りの職人を例にして、「彼は〈実相〉を一これをわれわれは〈まさに寝椅子であるところのもの〉と言うわけだが、その〈実相〉を一作るのではなく、ある特定の寝椅子を作るのである」と説明している（『国家（下）』597A（第10巻第2章、343ページ11から13行目））。さらにプラトンは、「彼が作るものは真の〈あるもの〉だとはいえなくなって、〈あるもの〉に似てはいるけれども、ほんとうにあるのではないような何かだ、ということになるだろう。寝椅子作りの職人の製品にせよ、他の何らかの手仕事職人の製品にせよ、それが完全にあるものだと主張する人があれば、その人の言うことは真実ではないであろう」と説明している（上掲書『国家（下）』597A（第10巻第2章、343ページ15から344ページ4行目））。プラトンは、「〈まさに寝椅子であるところのもの〉自体をただ一つだけお作りになった」（上掲書『国家（下）』597C（第10巻第2章、345ページ11から12行目））のは、知恵者である神であると言っている。プラトンは、「神のことを、われわれは、その寝椅子の『本性（実在）制作者』、または何かこれに類した名で呼ぶことにしよう」と説明している（上掲書『国家（下）』597D（第10巻第2章、346ページ10から11行目））。



ゆる生産技術を身に付ける必要がある。その場合には、すべての物品・資材の生産に必要な技術水準は、特化するときにもたらされるときの技術より劣った水準になり、そのより劣った技術で制作し縫合し、あるいは耕作・種蒔き・収穫することになる。経済学の理論から説明すると、より劣った技術で生産するときのそれぞれの物品（製品）の労働生産性はより低くなり、逆に、その生産費はより高くなる。プラトンが示しているように、社会的分業によって社会に必要とされる物品・資材を生産する方がそれぞれの職人の生産性は、個人にとっても国家にとっても、より高くなる。プラトンは、「それぞれの仕事は、一人の人間が自然本来の素質に合った一つのことを、正しい時機に、他のさまざまのことから解放されて行なう場合にこそ、より多く、より立派に、より容易になされる」<sup>519</sup>とソクラテスに語らせている。プラトンは、職人などが生まれながらに最もすぐれた生産技術を身に付けていると想定し、職人や農夫が、その生産技術に特化し、その生産性を引き上げ、より低い生産費でそれぞれの物品（製品）生産し、それぞれの社会的な産出量をより増加させ、同時に製品の質の向上をもたらすことを認識していた。今日の経済学では、分業が生産性を引き上げ、生産費の低下をもたらす、生産量を増加させることをプラトンが認識していたことになる。

プラトンは、天性として、一人ひとりに適している技術<sup>520</sup>が一意であると仮定している。この仮定がプラトンの正義を裏付けることになっている。

### 第3節 健康な国家と国民生活

プラトン自身が真実の国家と呼んでいる「健康な国家」を国家の模型として紹介する。こ

<sup>519</sup> 前掲書『国家（上）』370C（第2巻第11章、149ページ1から3行目）。この引用での「自然本来の素質」は、「自然本来のあり方」あるいは「もって生まれた」あるいは「自然的素質」と同じ意味で用いられる。プラトンは、これらを法律や慣習とは対立するものとして使用している。

<sup>520</sup> プラトンは、技術には三種類あると言う。それは、使うための技術、作るための技術、そして真似るための技術である（前掲書『国家（下）』601D（第10巻第4章、358ページ15行目）参照）。そして、プラトンは、それぞれのものを使用する人がそれぞれのものの善いところとか悪いところを示すことができると言う。プラトンは、笛作りを例として、「笛吹きは、笛作りの職人に笛のことについて、どの笛が実際に笛を吹くに当たって役に立つかを告げ、職人がどのような笛を作らなければならないかを命令するのであって、職人のほうはこれに仕える」と説明している（前掲書『国家（下）』601E（第10巻第4章、359ページ8から10行目））。プラトンは、制作者が笛（広くものや道具）の美し悪しについて正しい信念をもち、使用者がそのものについて正しい知識をもつことになると説明する（前掲書『国家（下）』601Eから602A（第10巻第4章、359ページ16から360ページ1行目）参照）。画家や詩人（悲劇作家）には真似る技術があるが、プラトンは、真似る人について「自分が真似て描写するその対象について、その美し悪しに関する知識をもつこともなければ、正しく思わくをすることもない」と説明する（前掲書『国家（下）』602A（第10巻第4章、360ページ8から9行目））。真似る人は、「何も知らない多くの人々に美しいと見えるようなもの、そういうものを描写する」と説明している（前掲書『国家（下）』602B（第10巻第4章、360ページ15から16行目））。

の国家では、共同居住する人びと（市民あるいは自由市民あるいは国民）は必要最低限の生活物資で暮らしている。国を構成する人々が協力することによって、構成する誰もが1人で生活するときには不足する物品・物資を充足する。プラトンが取り上げている必要最低限の物資とは、食料品、住居、あるいは衣服類で、この衣料類には靴や身の回り品も含まれる。これらの物品を提供するには、農夫、大工、あるいは織物工が国家に居住する必要がある。たとえば、国家が最低限の構成員で建設されるとき、農夫、大工、織物工、そして靴職人の4人で国家が構成されるが、このとき農夫は自身のほかの3人の食料品を提供し、大工は自身のほかにも他の3人にも家・住居などを提供し、織物職人と靴職人も同様に他の3人にも衣服や靴を提供する。プラトンは、社会的に必要な技術（労働）が分業されることによって、各職人の生産技術が完全になり、その生産量がより多くなると見ているが、そしてそれぞれの構成員は「けっしてお互いに相似たものではなく、自然本来の素性の点で異なっていて、それぞれが別々の仕事に向いている」<sup>521</sup>と想定する。このことは、農業に向いている人が、衣服を作成するのに時間を割き、あるいは不向きな住居建設に時間を割くのではなく、社会の構成員の4人すべての食料品を生産するほうが、社会的により多くの食料を生産し、質の面でも優れた物品・農産物を生産することになる。プラトンは、その社会的分業の必然性を前提に、すなわち「一人が一つの仕事だけをする」<sup>522</sup>こと前提にして、最も単純な国家社会を建設している。そしてプラトンは、「それぞれの仕事は、一人の人間が自然本来の素質に合った一つのことを、正しい時機に、他のさまざまのことから解放されて行なう場合にこそ、より多く、より立派に、より容易になされる」国家を建設している。プラトンは、この表現からも分かるように、各人が自然に適った生産技術に特化し、その労働の生産性を高くし、その国家において職場内（今日では工場内）での労働の分業あるいはその社会的分業が有効であることを認識していた。紀元前4世紀に、すでに、この分業の社会的利益を認識されていたことは、アダム・スミスの著書『国富論（諸国民の富）』第1章から第3章において、分業の生産にもたらす効果とその制約について考察してはいるが、アダム・スミスの社会観を包摂とさせる。アダム・スミスは、市場経済を想定しているが、プラトンも同様にアゴラにおける市場取引については知っていたことは明らかである。プラトンは、分業によって、社会にもたらされたものが構成員にどのように分け合うかについては、「われわれは市場をもち、また交換のためのしるしとしての、貨幣をもつことになる」<sup>523</sup>ことから、市場を通じて物資（物品）が配分されることを認識していると考えられる。すなわち、分業された仕事（その生産

<sup>521</sup> 前掲書『国家』370B（第2巻第11章、148ページ3から4行目）。

<sup>522</sup> 前掲書『国家（上）』370B（第2巻第11章、148ページ7行目）。

<sup>523</sup> 前掲書『国家（上）』371B（第2巻第12章、152ページ6から7行目）。

物の取引) が市場において結合されるとプラトンは認識していることは確かである。この点については、プラトンもアダム・スミスと同じ社会認識にあったと判断して間違いない。

プラトンは、この健康な国家で生産された物品が人びとの間に配分されていることを人々の日常生活を通して描写する。人々は「穀物や葡萄酒や、衣服や履物を作って暮らす」<sup>524</sup>、そして「家を建てて、夏はたいてい裸・裸足で、冬はたっぷりと着こみ履物もはいて働く」<sup>525</sup>として、国家において必要になる物資・物品の生産者として構成者を描き、次に「大麦から大麦粉、小麦から小麦粉をつくって、それに火を通し、あるいはそのまま捏ね固めて、できあがった上品な菓子（生パン）やパンを、葦やきれいな木の葉の上に盛りつけて出すであろう」<sup>526</sup>と構成員の主食が穀物（パン）であることを述べ、その副食は、「野の草や畑の野菜を煮て、例の田舎でつくる煮もののようなもの」<sup>527</sup>であり、その調味料は塩とオリーブ油やチーズであったと描いている。デザートとして「無花果や豌豆や空豆」<sup>528</sup>を挙げて、酒の肴には「桃金嬢や櫛の実を火で炒って、それを肴に」<sup>529</sup>して、「適量の酒をつつましく飲む」<sup>530</sup>。そして「蔓草や桃金嬢を敷いてつくった床の上に身を横たえて、自分も子供たちも楽しく食べ、そのあとで葡萄酒を飲み、頭には花の冠をいただいて神々を讚美しながら、お互いに楽しくいっしょに暮らす」<sup>531</sup>人々の食後の団らんの様子を描いている。プラトンは、健康な国家で暮らす人々について、「平和のうちに健康な生活を送りながら、当然長生きしてから生を終えることになり、子供たちにも、別の同じような生活をゆずり伝える」<sup>532</sup>と結んでいる。

健康な国家では、各生産者は市場での取引によって、生産に必要な原材料を他の職人（職工あるいは農夫）から買い入れ、自ら作った物品を市場を通して、他の生産者や自由民に提供している。次の（表-2）は、各職人（職工）との間で取引関係を表した表である。（表-2）は、最も単純にして健康な国家での生産者間の取引関係を示した表である。ある職人の生産は、他のすべての（殆どすべての）職人によって生産される物品に依存すること想定して、（表-2）<sup>533</sup>は表されている。

<sup>524</sup> 前掲書『国家（上）』372A（第2巻第12章、154ページ12行目）。

<sup>525</sup> 前掲書『国家（上）』372B（第2巻第12章、154ページ13から14行目）。

<sup>526</sup> 前掲書『国家（上）』372B（第2巻第12章、154ページ14から16行目）。

<sup>527</sup> 前掲書『国家（上）』372C（第2巻第13章、155ページ10から11行目）。

<sup>528</sup> 前掲書『国家（上）』372C（第2巻第13章、155ページ11から12行目）。

<sup>529</sup> 前掲書『国家（上）』372D（第2巻第13章、155ページ11行目）。

<sup>530</sup> 前掲書『国家（上）』372D（第2巻第13章、155ページ12から13行目）。

<sup>531</sup> 前掲書『国家（上）』372BからC（第2巻第12章、154ページ16から155ページ3行目）。

<sup>532</sup> 前掲書『国家（上）』372D（第2巻第13章、155ページ13から15行目）。

<sup>533</sup> （表-2）の行（row）は、当該生産物が他の職人にどれほど使用されているかを示している。たとえば、 $X_{21}$ は大工職人によって作成された家や倉庫や納屋を農夫がどれほど使用しているかを示している。そして $X_{22}$ は大工によって作られた家などを金額表示したもの（産出総額）である。また（表-2）の列（column）は、

この表において、 $X_{ij}(i,j=1,2,3,4)$ は、職人*i*から職人*j*への物資・物品の投入を示している。たとえば、 $X_{13}$ は、職人1（農夫）から職人3（織物職人）への物資・物品の販売額の水準である。この水準が変化することは、生産者間での取引額が変化することになる。職人は、市場で投入する生産物（物品）を買い入れ、生産した生産物をその市場で売る。多分、プラトンの健康な国家では、生産物を生産した職人自身が必要とする生産物は、市場で売買するのではなく、自己消費することになる。たとえば、 $X_{11}$ は、農夫自身が自己消費（中間消費）する大きさになる。

(表-2) 小国（4人からなる国家）における生産職人の相互関連関係

投入職人 産出職人	農 夫	大 工	織物職人	靴職人
農 夫	$X_{11}$	$X_{12}$	$X_{13}$	$X_{14}$
大 工	$X_{21}$	$X_{22}$	$X_{23}$	$X_{24}$
織物職人	$X_{31}$	$X_{32}$	$X_{33}$	$X_{34}$
靴職人	$X_{41}$	$X_{42}$	$X_{43}$	$X_{44}$

プラトンは、上の国家の規模を、現実に合わせて、拡大することの必要性を認識していた。国家の規模（その構成者の規模）を拡大することが必要になるのは、それぞれの生産が他の職人の技術に依存していることから来る。たとえば、プラトンは、農夫による食料としての小麦や大麦の生産において、生産が農夫（農業者）の労働投入（生産技術）のみによってなされるのではなく、その農耕地を耕すのに牛の労力（畜力）を使い、また農機具として鋤や鋤など<sup>534</sup>を農夫の技術（労働力サービス）と組み合わせて使い、農業生産を行っていることを認識していた。この鋤や鋤などの農機具を生産する職人（産業、事業所）が存在し、その農具等を生産する職人達もその国に存在していなければならない。たとえば鍛冶職人・金具工が存在していた。また、織物工には、羊毛などの荷物を運搬し輸送する牛が必要になる。同様に大工や金具工にもその荷物を運送する牛が必要になるので、羊飼いだけではなく、牛飼いななどの職人もこの国で生存・生活していたであろう。また、市場まで運搬・輸送される食

当該生産を産出するのにどのような生産物が使用されているかを示している。たとえば、 $X_{32}$ は大工による家や倉庫や納屋などの生産に衣服類がどれほど投入されるかを示している。そして、この列の $X_{2}$ は、大工によって産出された金額表示されたもの（投入総額）である。

<sup>534</sup> プラトンは、これらの道具を「補助的原因となる技術」と説明している。これについては、プラトン著『ポリテュコス（政治家）』281D（270ページ10から271ページ2行目）参照。プラトンの言う補助的原因は、労働力と結合して生産に使用される流動資本（道具類）を意味している。

(表-2a) 健康な国家において生産職人技術の相互依存関係

投入職人 産出職人	農 夫	大 工	織物職人	靴職人	牛飼い・ 羊飼い職人	小売職人
農 夫	$X_{11}$	$X_{12}$	$X_{13}$	$X_{14}$	$X_{15}$	$X_{16}$
大 工	$X_{21}$	$X_{22}$	$X_{23}$	$X_{24}$	$X_{25}$	$X_{26}$
織物職人	$X_{31}$	$X_{32}$	$X_{33}$	$X_{34}$	$X_{35}$	$X_{36}$
靴職人	$X_{41}$	$X_{42}$	$X_{43}$	$X_{44}$	$X_{45}$	$X_{46}$
牛飼い・ 羊飼い職人	$X_{51}$	$X_{52}$	$X_{53}$	$X_{54}$	$X_{55}$	$X_{56}$
小売職人	$X_{61}$	$X_{62}$	$X_{63}$	$X_{64}$	$X_{65}$	$X_{66}$

料品や織物や靴などの物品を市場で売りさばくには、それらの生産者とは別の違った職人である小売商人が存在していた。この小売商人は、市場では、物品を売りたい人には金銭を与えて物品を受け取り、物品を買いたい人から金銭を受け取り物品を与える。市場を通して物品が市民の間に配分される。プラトンは、「市場に腰を落ちつけて売買のための世話をする人々のことを、われわれは小売商人と呼び、国々をまわり歩くほうの人々を、貿易商人という」<sup>535</sup>と述べている。この国には、市場での取引を円滑にするための交換の媒介者・仲介者としての商人層が存在している。さらにまた、プラトンは、国家の構成者に賃銭取りを加えている。これは、「知能的な事柄にかけては共同者としての値打があまりないけれども、力仕事のためには充分なだけの身体の強さをもっているような人々」<sup>536</sup>で、体力の使用を売る力仕事で、その力仕事の値段（価格）が賃銭と呼ばれる。その人達は「賃銭取り」<sup>537</sup>と呼ばれていた。

プラトンは、この拡張された健康な国家において、職人間の関係をより複雑にしている。すでに説明したように、農夫はその農耕地を耕すのに牛の労力（畜力）を使用するので、国家には、職人して牛飼い職人が存在し、また農機具として鋤や鋤など<sup>538</sup>を労働と組み合わせて使用するので、農耕具の生産を行う鍛冶職人や金具工が存在し、また大工や金具工や織物工・職人には、羊毛などの荷物を運搬し輸送する牛が必要になる。羊飼いや牛飼いなどの職

<sup>535</sup> 前掲書『国家（上）』371D（第2巻第12章、153ページ4から6行目）。

<sup>536</sup> 前掲書『国家（上）』371E（第2巻第12章、153ページ9から10行目）。

<sup>537</sup> 前掲書『国家（上）』371E（第2巻第12章、153ページ11行目）。

<sup>538</sup> プラトンは、これらの道具を「補助的原因となる技術」と説明している。これについては、プラトン著（水野有庸訳）『ポリテュコス（政治家）』281D（270ページ10から271ページ2行目）参照。プラトンの言う補助的原因は、労働力と結合して生産に使用される流動資本（道具類）を意味している。



人も生存し生活する。また、市場に運搬・輸送される食料品や織物や靴などの物品を市場で売買する小売商人が存在し、市場では貨幣で物品を売買する。

上の(表-2a)には、職人自身の労働投入が表現されていなく、また市場で自由市民が消費するために購入する物品の金額が表示されていない。すなわち自由市民の消費額が表示されていない。また、この表には、政府(公共)部門のサービス投入・生産が表されていない。プラトンの政府部門(あるいは公共部門)は、一般行政・政策を行う部分と、国家のために戦争に従事する軍人(戦士)ならびに訴訟された事項を審査す裁判官から構成される。今日の経済学からの類似概念で表現すると、公共財サービスを生産し消費する部門がプラトンの政府部門(公共部門)である。

下の(表-2b)には、自由市民の消費額と政府(公共)部門サービスの投入額と生産額が表示されている。この表で  $c_i (i=1,2,\dots,6)$  は自由市民  $i$  の消費額<sup>539</sup>が表示される。たとえば、大工や靴職人や織物職人や靴職ならびに農夫自身も国内で生産された小麦や大麦などの穀物ならびに無花果などの果物などを消費する。これらの消費額を  $c_1$  として示される。その他の消費額も同様に説明される。また、(表-2b)において、 $w_i (i=1,2,\dots,7)$  は、農夫や大工や他の職人の労働投入額を示している。 $w_1$  は、農夫の農産物生産における労働(技術)投入額である。プラトンは、当職人の労働投入(技術)を「直接的な原因となる技術」<sup>540</sup>と言う。 $w_2$ ,  $w_3$  は、大工の家造り(建設)の労働(技術)投入額、織物職人の衣服生産における労働(技術)投入額である。プラトンは、直接的な原因となる技術と補助的な原因となる技術が結合されて生産物が産出されることから、 $X_i$  が  $X_{ji}$  ならびに  $w_i$  に依存する。たとえば、 $X_1 = X_{11} + X_{21} + X_{31} + X_{41} + X_{51} + X_{61} + g + w_1$  となるが、ここで  $X_{j1} (j=1,2,\dots,6)$  が農産物を産出するための補助的な原因となる技術の投入額で、 $w_1$  がその直接的な原因となる技術に対応している。これは、一種の生産関係式で、農夫の農産物生産にどのような生産物(中間生産物)と労働投入がなされているかを表す。軍人の技術である  $g$  は、農夫などによる国防サービスなどの購入を表している。健康な国家では、食料の自足が達成されるので、隣国の土地を切り取る必要はなく、軍人は、国防に徹する。戦争(侵略戦争)にその軍人技術を使用することはしない。この点は、後に説明する贅沢な国家とは違っている。

<sup>539</sup> 政府(公共)部門のサービスが  $g$  であるが、これはその消費額  $c_7 = g$  に等しい。

<sup>540</sup> 前掲書『ポリティコス(政治家)』281D(270ページ10行目)。

(表-2b) 生産関係, 労働投入, 自由市民の消費額ならびに総生産額

投入職人 産出職人	農夫	大工	織物職人	靴職人	牛飼い・ 羊飼い職人	小売職人	軍人	自由市民 の消費	投入合計
農夫	$X_{11}$	$X_{12}$	$X_{13}$	$X_{14}$	$X_{15}$	$X_{16}$	$X_{17}$	$c_1$	$X_1$
大工	$X_{21}$	$X_{22}$	$X_{23}$	$X_{24}$	$X_{25}$	$X_{26}$	$X_{27}$	$c_2$	$X_2$
織物職人	$X_{31}$	$X_{32}$	$X_{33}$	$X_{34}$	$X_{35}$	$X_{36}$	$X_{37}$	$c_3$	$X_3$
靴職人	$X_{41}$	$X_{42}$	$X_{43}$	$X_{44}$	$X_{45}$	$X_{46}$	$X_{47}$	$c_4$	$X_4$
牛飼い・ 羊飼い職人	$X_{51}$	$X_{52}$	$X_{53}$	$X_{54}$	$X_{55}$	$X_{56}$	$X_{57}$	$c_5$	$X_5$
小売職人	$X_{61}$	$X_{62}$	$X_{63}$	$X_{64}$	$X_{65}$	$X_{66}$	$X_{67}$	$c_6$	$X_6$
軍人	$g$	$g$	$g$	$g$	$g$	$g$	$G$	$g$	$G^k$
労働投入・賃金	$w_1$	$w_2$	$w_3$	$w_4$	$w_5$	$w_6$	$w_7$	-	$W$
産出合計	$X_1$	$X_2$	$X_3$	$X_4$	$X_5$	$X_6$	$X_7$	$C$	$Y$

国防サービスなどの公共財サービスは, 市場で取引されることはなく, 政府(公共)部門によって, すべての市民(すなわちすべての職人)に等量消費される国防サービスなどが提供される。その大きさは, すべての職人によって消費される  $g$  と示される。 $X_i$  ( $i=1,2,\dots,6$ ) は, 職人  $i$  によって産出された生産物の総産出額あるいは総投入額である。たとえば,  $X_1$  は, 農夫によって生産される農産物の総生産額あるいは総投入額である。

ここでは,

$$\begin{aligned} X_i &= X_{i1} + X_{i2} + X_{i3} + X_{i4} + X_{i5} + X_{i6} + X_{i7} + c_i \\ &= X_{1i} + X_{2i} + X_{3i} + X_{4i} + X_{5i} + X_{6i} + g + w_i \end{aligned} \quad (1)$$

なる関係が成立する。また, 軍人サービスなどの公共財サービスの一国全体での産出額は,

$$G^k = g \quad (1b)$$

となる。職人に提供される軍人サービスなどの公共財サービスの金額は, 全職人に同じ額である。上の(表-2b)あるいは(1)式において, 軍人などのサービスが農業生産に投入されていることが示されているが, それは, たとえば, 農業生産が敵に侵攻され, 農地などが荒らされることのないように, 農地を防衛することを示している。同時に, 靴職人の工場(職場)が荒らされないように, 防衛するのが軍人の社会的役割である。農夫以外の職人が, 軍人サービスを消費しているが, それはその生産資材・設備が敵に侵襲されることがないように守られていることを示している。

#### 第4節 贅沢な国家

プラトンは、国家規模が拡大された贅沢な国家を描いている。彼は、国家規模の拡張が職人の階層を増やすことによって行っている。贅沢な国家では、健康な国家とは違って、自由市民は食卓について食事を摂り、また主食や副食の種類や数などは健康な国家に比較してより豊富になり、食生活が贅沢になっている。健康な国家では、「蔓草や桃金嬢てんじんかを敷いてつくった床の上に身を横たえて、自分も子供たちも楽しく食べ」ていたが、贅沢な国家では食卓で食事をする。この意味で贅沢な生活環境が実現されている。さらにまた、贅沢な国家では、「ちゃんと寝長椅子の上に横になり、食卓について食事」<sup>541</sup>を摂り、贅沢さが増し、寝長椅子や食卓について食事をし、そこには、健康な国家では見られなかった食卓が準備され、様々な家具が生活にとり入れ込まれるだけではなく、食品・食材の質が上質になり、向上し、その種類も増え豊富になっている。健康な国家あるいは拡張された健康な国家では、構成員は野菜や野草を副食とする菜食生活であったが、贅沢な国家には猟師たちが生活する。健康な国家では、主食は大麦粉や小麦粉から作られたパンで、副食は「野の草や畑の野菜を煮て、例の田舎でつくる煮もののようなもの」で、「無花果や豌豆えんどうや空豆そらまめ」などのデザートもあったが、贅沢な国家には「御馳走や香料や香や妓おんなたちや菓子」<sup>542</sup>などの種々さまざまの種類のも用意されている。都市生活における女性の社会的な活動を支える品物が増えたと思われる。また「絵画や刺繍」<sup>543</sup>などの飾りや「金や象牙や、その他その類い」<sup>544</sup>などの職人たちが国家の構成員に加えられる。さらに、絵画や音楽や作家（詩人）や詩人に奉仕する人々<sup>545</sup>などの

<sup>541</sup> 前掲書『国家（上）』372E（第2巻第13章、156ページ6行目）。また、前掲書『国家（上）』327C（第1巻第1章、21ページ8行目）に、ソクラテスの対話者の一人であるケパロス（Κεφαλος）がペイライエウスの自宅で、頭に冠をつけた姿で、「ふとんつきの椅子とでもいったようなものに腰をおろしていた」とある。ケパロスは、アテナイ市民権を持っていないシケリア島シュラクサイ出身の富豪であった。ペリクレスの招きでアテナイの外港ペイライエウスで30年間、居留民（非市民）として過ごした。彼の息子には、ポレマルコス、リュシアス、エウテュデモスがいた。

<sup>542</sup> 前掲書『国家（上）』373A（第2巻第13章、157ページ2から3行目）。本稿第2章第2節第1項1.3において、プラトンが贅沢な食生活の一端として、健康のためには魚料理や香味料を避けるだけでなく、「シュラクサイの御馳走やシケリアの多彩な料理」など、また同様に「アッティカの菓子」を挙げている。また、プラトンは、同時に、健康管理のためには、守護者たちは遊女を愛人に持つことをも非難する。

<sup>543</sup> 前掲書『国家（上）』373A（第2巻第13章、157ページ5行目）。

<sup>544</sup> 前掲書『国家（上）』373A（第2巻第13章、157ページ5から6行目）。

<sup>545</sup> プラトンは、『国家（上）』373BからC（第2巻第13章、157ページ13から14行目）において、詩人に奉仕する人々として、「吟誦家、俳優たち、舞踏家たち、興行師など」をあげている。プラトンは、詩人などの芸術家について、真似る人と位置づけている。真似る技術によって対象を描写するが、「真似る人は、彼が真似て描写するその当のものについて、言うに足るほどの知識は何ももち合わせていないのであって、要するに〈真似ごと〉とは、ひとつの遊びごとにはかならず、まじめな仕事などではないということ、そしてイアンボスやエポスの韻律を使って悲劇の創作にたずさわる人々は、すべてみな、最大限にそのような〈真似ごと〉に従事している人々である」と説明している（『国家（下）』602B（第10巻第4章、361ページ

芸術関係に従事する人々も贅沢な国家の構成員であった。さらにまた、婦人の装飾品を作る職人もこの国家の構成員に含めている。プラトンの国家では、国民としては数えられないが、召使い（世話人）もより多数<sup>546</sup> 必要になる。

これらのことを考慮すると、職人技術の相互依存関係も変貌する。（表-3）において、贅沢な国家における職人技術の相互依存関係が示される。どのような点で、何処が贅沢になったのかといえば、第一に、既に述べたことであるが、自由市民の食生活が贅沢になったこと、第二に、この国家には、芸術に関係する人々や芸能家（興行師や演劇家など）が生活しているが、プラトンの言う、模倣する仕事をする人（模倣師、すなわち真似る人）が社会にサービス（芸術）を提供している。模倣師とは、音楽・文芸に係わる人々、すなわち、「詩人たちであり、また詩人に奉仕する人々としての吟誦家、俳優たち、舞踏家たち、興行師など」<sup>547</sup> である。

第三には、贅沢な国家では、領土拡大志向が強くなるので、他の国との争いが生じ易くなっている。健康な国家では、防衛戦争はなされたが、しかし、贅沢な国家では、侵略戦争がなされる。その戦争は、その領土拡張に基因する。プラトンは、贅沢な食生活をすると、「先にはそのときの住民たちを養うのに充分であったのが、いまではとても充分ではなくなって、小さすぎるものとなるであろう」<sup>548</sup> と領土拡張の必然性が指摘されている。人口増加に対応するために牧畜や農耕のための十分な土地を確保維持することが必要になるが、「牧畜や農耕に十分なだけの土地を確保しようとするならば、隣国の人々の土地の一部を切り取って自分のものとしなければならない。そして、隣国の人々のほうでもまた、われわれの土地の一部を切り取ろうとする」<sup>549</sup> と、相互の領土拡張行為の行き着く先が侵略戦争とプラトンは認識していたと考えられる。「どうしても必要なだけの限度をこえて、財貨を無際限に獲得することに夢中になるとするならば」<sup>550</sup>、戦争（侵略戦争）が起こるとプラトンは説いている。

この国でも戦争を担う職人としてプラトンは、軍人（たぶん職業軍人）をあげ、自由市民が戦争に従軍することには反対であったと思われる。軍人による、国家の構成員すべてに等しく提供される国防サービスによって、国民の生命と財産を護るのであるが、プラトンは、職業軍人によって軍事サービスが国民に提供されることが自然に適っていると考えている。

4から8行目)。

<sup>546</sup> プラトンは、前掲書『国家（上）』373C（第2巻第13章、158ページ1から2行目）において、国家の構成員として「子供の教育掛りや、乳母や、子守や、着付掛りの侍女や、理髪師や、他方また料理人や、肉屋・割烹人」なども加えている。

<sup>547</sup> 前掲書『国家（上）』373BからC（第2巻第13章、157ページ13から14行目）。

<sup>548</sup> 前掲書『国家（上）』373D（第2巻第14章、158ページ12から13行目）。

<sup>549</sup> 前掲書『国家（上）』373D（第2巻第14章、159ページ1から3行目）。

<sup>550</sup> 前掲書『国家（上）』373D（第2巻第14章、159ページ4から5行目）。

プラトンは、軍事サービスについて、「盾やそのほかの武器・戦具の場合は、誰でもそれを手に取りさえすれば、たちどころに、重甲歩兵としての闘いでも、あるいは戦争における他のどのような闘い方でも、じゅうぶんにこれをやってのけることのできる戦士となれるのだろうか」<sup>551</sup>と反問し、軍人には、そうした道具についての知識が必要であり、十分な練習も積んでいなければならないと説いている。そのような知識がなく訓練も積まない者には、軍事においてなんの役にもたないと言明される。プラトンは、他の多くの職人と同様に、戦争についても専門技術（戦術を含む）が必要であることを指摘している。

贅沢な国家での領土（国土）の拡張は、相互に隣国の人々の土地を切り取ることになるが、国々の間では必然的に、侵略戦争を発生させる、とプラトンは説明する。この戦争は、「国々にとって公私いずれの面でも害悪が生じるときの最大の原因であるところのもの」<sup>552</sup>であるとプラトンは指摘する。国家が領土拡大のために戦争状態になると、その戦争を担う構成員が必要になるが、国民（市民）が兵士となって闘うだけでは、戦争を闘い続けることが困難である。農夫や大工や織物工と同様に、戦争にもそれに固有の技術が必要になることを認識していたプラトンは、盾やそのほかの武器・戦具の使用には専門技術が必要で、重甲歩兵としての闘いあるいは戦争における他のどのような闘いでも、盾や戦具を手を持っただけでは戦士になれなく、戦争を仕事とする軍人が職人として国家の構成員に加えられる。

贅沢な国家の生産技術の関係を（表-3）として表す。この表と（表-2b）の違いは、模倣師が含まれていることと、軍人のサービスが、 $g$  から  $G$  にされていることである。軍事サービスの違いは、防衛戦争を行う健康な国家から侵略戦争をする贅沢な国家との違いである。後に示すように、 $G > g$  である。（表-3）において、

$$\begin{aligned} X_i &= X_{i1} + X_{i2} + X_{i3} + X_{i4} + X_{i5} + X_{i6} + X_{i7} + X_{i8} + C_i \\ &= X_{1i} + X_{2i} + X_{3i} + X_{4i} + X_{5i} + X_{6i} + X_{7i} + G + w_i \quad (i=1,2,\dots,7) \end{aligned} \quad (2)$$

また

$$X_8 = X_{18} + X_{28} + X_{38} + X_{48} + X_{58} + X_{68} + X_{78} + w_8 + X_{88}, X_{88} = G \quad (2b)$$

となる関係が成立する。ここで  $X_{i1}$  から  $X_{i8}$  ( $i=1,2,\dots,8$ ) までは、経済学では、生産物  $i$  に対する（中間生産物に対する）需要である。ここで自由市民の消費（経済学でいう最終消費）に留意する必要がある。贅沢な国家では、市民の生活が健康な国家に比べてかなり贅沢になっていると思われる。第一に、健康な国家では菜食中心の生活であったが、贅沢な国家で

<sup>551</sup> 前掲書『国家（上）』374D（第2巻第14章、161ページ16から162ページ2行目）。

<sup>552</sup> 前掲書『国家（上）』373E（第2巻第14章、159ページ13から14行目）。



は、野菜・野草のみならず、羊や豚などの四足動物の肉料理や魚料理も食べている。このことは農産物生産が農夫だけではなく、猟師（漁師を含む）を技術職人に加える必要がある。第二に、調味料としては、塩やオリーブのみならず、各種の香料が使用される。自由市民の消費が贅沢になった。

第三に、贅沢な国家では、物語や詩をよむだけではなく、各種の劇を鑑賞するようにもなった。詩人やその吟誦家、あるいは俳優や舞踏家が職人に加えられる。プラトンは、この職人を模倣する仕事をする人々としている。ここでは模倣師とする。この模倣師を職人技術の相互依存関係の表に加えている。

(表-3) 贅沢な国家での職人間での生産依存関係と消費

投入職人 産出職人	農夫	大工	織物職人	靴職人	牛飼い・ 羊飼い職人	小売職人	模倣師	軍人	自由市民 の消費	合計
農夫・猟師	$X_{11}$	$X_{12}$	$X_{13}$	$X_{14}$	$X_{15}$	$X_{16}$	$X_{17}$	$X_{18}$	$C_1$	$X_1$
大工・金具工・ 装飾細工師	$X_{21}$	$X_{22}$	$X_{23}$	$X_{24}$	$X_{25}$	$X_{26}$	$X_{27}$	$X_{28}$	$C_2$	$X_2$
織物職人	$X_{31}$	$X_{32}$	$X_{33}$	$X_{34}$	$X_{35}$	$X_{36}$	$X_{37}$	$X_{38}$	$C_3$	$X_3$
靴職人	$X_{41}$	$X_{42}$	$X_{43}$	$X_{44}$	$X_{45}$	$X_{46}$	$X_{47}$	$X_{48}$	$C_4$	$X_4$
牛飼い・ 羊飼い職人	$X_{51}$	$X_{52}$	$X_{53}$	$X_{54}$	$X_{55}$	$X_{56}$	$X_{57}$	$X_{58}$	$C_5$	$X_5$
小売職人	$X_{61}$	$X_{62}$	$X_{63}$	$X_{64}$	$X_{65}$	$X_{66}$	$X_{67}$	$X_{68}$	$C_6$	$X_6$
模倣師	$X_{71}$	$X_{72}$	$X_{73}$	$X_{74}$	$X_{75}$	$X_{76}$	$X_{77}$	$X_{78}$	$C_7$	$X_7$
軍人	$G$	$G$	$G$	$G$	$G$	$G$	$G$	$G$	$G$	$G$
賃 銭	$w_1$	$w_2$	$w_3$	$w_4$	$w_5$	$w_6$	$w_7$	$w_8$	-	$W$
合 計	$X_1$	$X_2$	$X_3$	$X_4$	$X_5$	$X_6$	$X_7$	$X_8$	$C$	$Y$

第四に、健康な国家では防衛に軍事サービスが使用されたが、贅沢な国家では軍事サービスは侵略戦争にも活用される。このことは、軍人のサービス額が増額されることにある。すなわち、

$$G > g \quad (2c)$$

とされる。第五に、贅沢な国家では、構成員の生活が贅沢になり、数多くの召使いが必要になる。プラトンは、「子供の教育掛かりや、乳母<sup>うぼ</sup>や、子守りや、着付掛かりの侍女たちや、理髪師や、その他また料理人や、肉屋<sup>かつぼう</sup>・割烹人など」<sup>553</sup>を召使い（たぶん奴隷）として列挙される。これらの召使いたちは、健康な国家にはいなく、この召使いの増加は、自由市民の消費

が贅沢になることを意味する。消費額は、健康な国家の  $c_i$  から贅沢な国家の  $C_i$  に変化する。すなわち、

$$C_i > c_i \quad (i=1,2,\dots,7) \quad (2d)$$

なる関係が成立する。(表-3) と (表-2b) では、自由市民の消費額の大きさとその構成は大きく異なることになる。後者の表では、自由市民は、野菜・山菜が中心であったが、前者の表では、数多くの肉料理や魚料理が含まれる。また、消費額も、後者に比較すると、前者の方がかなり高額になると思われる。というのは、前者には家庭などで仕事をする多数の召使いの消費も含まれ、それらの召使いの食事額もより高額になるからである。

### 第5節 贅沢な国家と職人技術の相互関係

自由市民の食生活が贅沢になり、大麦や小麦を主食とし、野菜・山菜を副食とする食生活から肉料理や魚料理を副食とする生活に変化するだけではなく、塩やオリーブを調味料とする食事から各種の香料をも調味料に添える食事にかわり、さらに多くの召使いを使用する贅沢な国家での生活に変わったとしよう。(表-3)において、農夫の単位費用の構造を示してみよう。農夫が一単位(1円)の生産物(農産物)を産出するとき、他の職人によって生産される生産物の投入は、 $\frac{X_{i1}}{X_1} = a_{i1} (i=1,2,\dots,7)$  と示される。また同様に、任意の職人が一単位 of 生産物  $j$  を産出するとき、他の職人によって生産された生産物の投入( $i$ )は、

$$\frac{X_{ij}}{X_j} = a_{ij} (i,j=1,2,\dots,7) \quad (3)$$

と表される。ここでは、 $a_{ij} \geq 0 (i,j=1,2,\dots,7)$  と仮定される。これは、生産物  $j$  を1単位生産するときに必要になる生産物  $i$  の投入を示している。このようにして得られる投入産出関係は、(表-4)のように表される。

下の(表-4)において、職人の技術を示す係数を行列  $A$  とし、それを

$$A = \begin{bmatrix} a_{11} & \cdots & a_{17} \\ \vdots & \cdots & \vdots \\ a_{71} & \cdots & a_{77} \end{bmatrix} \quad (4)$$

と表す。ここで、 $a_{71}$  から  $a_{77}$  はそれぞれ同じ値になる。これを使うと、上の職人技術と最終消費の関係は、

<sup>553</sup> 前掲書『国家(上)』373D(第2巻第13章、158ページ1から2行目)。

$$\begin{bmatrix} 1-a_{11} & \cdots & a_{71} \\ \vdots & \vdots & \vdots \\ a_{71} & \cdots & 1-a_{77} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} X_1 \\ X_2 \\ X_3 \\ X_4 \\ X_5 \\ X_6 \\ X_7 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} C_1 \\ C_2 \\ C_3 \\ C_4 \\ C_5 \\ C_6 \\ C_7 \end{bmatrix} \quad (5)$$

と表される。ここで  $C_7=g$  である。ここで、 $1-a_{ii}>0(i=1,2,\dots,7)$  と仮定<sup>554</sup> される。自由市民の消費が贅沢になると、上で与えられた職人の技術の下では、生産に及ぼす効果はどうようになるであろうか。贅沢な食生活に変化することは、自由民の消費水準を上昇させるであろう。たとえば、贅沢な国家では、動物の肉や魚介類も食卓に並べられ、御馳走や香料や香や菓子などが多種様々になっていることである。このことは、農夫によって生産される食糧品の消費水準が上昇する。これは、 $c_1$  が  $C_1$  (先に想定したように、 $C_1>c_1$  である) に変化することとして表される。

先に示したように、上の(5)式において、係数行列を  $I-A$  とする。この  $I$  は単位行列であり、対角要素が1、それ以外の要素がゼロの7行7列の単位行列である。(4)式から、最終消費  $c_1$  が  $C_1$  に変化するときの生産に与える効果は、 $[I-A]X=C$  から算出される。

(表-4) 生産における職人技術係数表

産出職人 投入職人	農夫	大工	織物職人	靴職人	牛飼い・ 羊飼い職人	小売職人	軍人	自由市民 の消費	投入合計
農夫	$a_{11}$	$a_{12}$	$a_{13}$	$a_{14}$	$a_{15}$	$a_{16}$	$a_{17}$	$C_1$	$X_1$
大工	$a_{21}$	$a_{22}$	$a_{23}$	$a_{24}$	$a_{25}$	$a_{26}$	$a_{27}$	$C_2$	$X_2$
織物職人	$a_{31}$	$a_{32}$	$a_{33}$	$a_{34}$	$a_{35}$	$a_{36}$	$a_{37}$	$C_3$	$X_3$
靴職人	$a_{41}$	$a_{42}$	$a_{43}$	$a_{44}$	$a_{45}$	$a_{46}$	$a_{47}$	$C_4$	$X_4$
牛飼い・ 羊飼い職人	$a_{51}$	$a_{52}$	$a_{53}$	$a_{54}$	$a_{55}$	$a_{56}$	$a_{57}$	$C_5$	$X_5$
小売職人	$a_{61}$	$a_{62}$	$a_{63}$	$a_{64}$	$a_{65}$	$a_{66}$	$a_{67}$	$C_6$	$X_6$
軍人	$g$	$g$	$g$	$g$	$g$	$g$	$g$	$C_7=g$	$g=g^k$
労働投入・賃金	$w_1$	$w_2$	$w_3$	$w_4$	$w_5$	$w_6$	$w_7$	-	$W$
産出合計	$X_1$	$X_2$	$X_3$	$X_4$	$X_5$	$X_6$	$X_7$	$C$	$Y$

<sup>554</sup> この仮定は、ホーキングズ = サイモンの条件と知られている。また、 $|I-A|>0$  と仮定するとき、この逆行列のすべての要素が非負になる。このとき、(8)式のすべての要素が非負となる。 $a_{ij} \geq 0 (i,j=1,2,\dots,7)$  となる。また(6)式から  $X_i \geq 0 (i=1,2,\dots,7)$  が得られる。

これから、生産に与える効果は、

$$\mathbf{X} = [\mathbf{I} - \mathbf{A}]^{-1} \mathbf{C} \quad (6)$$

と与えられる。

健康な国家から贅沢な国家に変化するとき、自由民の生活が贅沢になるが、たとえば、贅沢な国家では自由民の食生活が贅沢になる。今、市民たちの食糧品（農産物）の消費水準が増加するとしよう。このことを  $C_1 - c_1 = \Delta c_1$  とする。他の最終消費は、健康な国家と贅沢な国家で変化がない、つまり、自由市民の最終消費が  $\Delta c_1$  のみの増加であるとしよう。このとき他の最終消費は変化しないとしよう。農産物（食糧品）に対する消費増加を  $[\Delta c_1, 0, 0, 0, 0] = \Delta \mathbf{C}'$  とすると、(6)式から生産に与える効果は、

$$\Delta \mathbf{X} = [\mathbf{I} - \mathbf{A}]^{-1} \Delta \mathbf{C} \quad (7)$$

となる。この逆行列は、

$$[\mathbf{I} - \mathbf{A}]^{-1} = \begin{bmatrix} \alpha_{11} & \cdots & \alpha_{17} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ \alpha_{71} & \cdots & \alpha_{77} \end{bmatrix} \quad (8)$$

と表される。ここで  $\alpha_{ij} (i, j = 1, 2, \dots, 7)$  は非負である。

農産物に対する消費増加の生産効果を検証しよう。(7)式の導出を説明することになる。その増加の第一次の生産効果は、次のようになる。その増加の食糧品生産への効果は  $\alpha_{11} \Delta c_1$ 、大工の生産への効果は  $\alpha_{21} \Delta c_1$  である。また他の職人の生産効果も同様に求められる。小売職人の生産への効果は  $\alpha_{61} \Delta c_1$  となる。そして、軍人への効果は  $\alpha_{71} \Delta c_1$  となる。この関係は、下の(7a)式で示されるように、係数行列と消費水準の行列の積として与えられる。これは、食糧品の最終消費が  $\Delta c_1$  だけ増加するとき、その消費を充たすために農夫が他の職人の生産物の投入を増加させる。

$$\begin{bmatrix} a_{11} & \cdots & a_{17} \\ \vdots & \cdots & \vdots \\ a_{71} & \cdots & a_{77} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \Delta c_1 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} \Delta c_1 a_{11} \\ \Delta c_1 a_{21} \\ \Delta c_1 a_{31} \\ \Delta c_1 a_{41} \\ \Delta c_1 a_{51} \\ \Delta c_1 a_{61} \\ \Delta c_1 a_{71} \end{bmatrix} = \mathbf{X}^{(1)} = \mathbf{A} \Delta \mathbf{C} \quad (7a)$$

(7a)式は、農産物の消費増加の生産に及ぼす第一次効果である。この効果は、 $[a_{11}, a_{21}, \dots, a_{71}]$  に  $\Delta c_1$  を掛けた大きさで、 $\mathbf{X}^{(1)}$  と表される。さらに、農産物以外に対する中間消費が増加すると、中間投入が増加するので、第二次の生産効果が生まれる。この第二次の生産効

果は, 次の二つの行列の積となる。すなわち,

$$\begin{bmatrix} a_{11} & \cdots & a_{17} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{71} & \cdots & a_{77} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \Delta c_1 a_{11} \\ \Delta c_1 a_{21} \\ \Delta c_1 a_{31} \\ \Delta c_1 a_{41} \\ \Delta c_1 a_{51} \\ \Delta c_1 a_{61} \\ \Delta c_1 a_{71} \end{bmatrix} = \mathbf{X}^{(2)} = \mathbf{A}\mathbf{X}^{(1)} = \mathbf{A}^2\Delta\mathbf{C} \quad (7b)$$

となる。ここにおいて,  $\mathbf{X}^{(1)} > \mathbf{A}\mathbf{X}^{(1)} = \mathbf{X}^{(2)}$  である。次に, 第三次の生産効果が生まれる。この効果は,

$$\mathbf{A}\mathbf{X}^{(2)} = \mathbf{A}^2\mathbf{X}^{(1)} = \mathbf{X}^{(3)} = \mathbf{A}^3\Delta\mathbf{C} \quad (7c)$$

として与えられる。 $\mathbf{X}^{(2)} > \mathbf{A}^2\mathbf{X}^{(1)} = \mathbf{X}^{(3)}$  である。第4次の生産効果は,

$$\mathbf{A}\mathbf{X}^{(3)} = \mathbf{X}^{(4)} \quad (7d)$$

となる。このようにして, すべての生産効果の総和は,

$$\mathbf{X}^\infty = [\mathbf{I} + \mathbf{A} + \mathbf{A}^2 + \cdots + \mathbf{A}^{n-1} + \cdots] \Delta\mathbf{C} \quad (8)$$

となる。ここで,  $\mathbf{X}^\infty = [\mathbf{I} - \mathbf{A}]^{-1} \Delta\mathbf{C}$  である。これは(7)式に等しい。

農夫の生産物の消費増加の生産に与える影響は,

$$\begin{bmatrix} a_{11} & \cdots & a_{71} \\ \vdots & \ddots & \vdots \\ a_{71} & \cdots & a_{77} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} \Delta c_1 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} a_{11} \\ a_{21} \\ a_{31} \\ a_{41} \\ a_{51} \\ a_{61} \\ a_{71} \end{bmatrix} \Delta c_1 \quad (9)$$

となる。ここで  $a_{i1} \geq 0 (i=1,2,\dots,7)$  である。農夫の生産物の消費が増加すると, すべての職人によって生産される生産物の生産量は増加する (少なくとも減少することはない)。ある生産物の最終需要が増加すると, 直接的にはその生産物の産出量を増加させるが, 次にその生産物の産出量の増加は, この生産物の生産に投入されている他のすべての生産物の生産を増加させる。その生産ならびに他の生産物の増加が実現するならば, それらの生産物が他の国(都市国家)から輸入さない限り, 農夫はその消費を充足するためには, 以前よりもより多くの土地(土地利用)を必要とする。すでに利用可能な土地がその国で耕作され尽くしている



ときには、その消費増加に対応できない。このときに他の都市国家への侵攻が計画される。既に説明したプラトンの見解をもう一度引用すると、農耕（ならびに牧畜）のための十分な土地を確保しようとして、「隣国の人々の土地の一部を切り取って自分のものとしなければならない。そして、隣国の人々のほうでもまた、われわれの土地の一部を切り取ろうとする」ことになるかも知れない。ここに侵略戦争が始まる。さらに、「必要なだけの限度をこえて、財貨を無際限に獲得することに夢中になる」と確実に戦争が起こるとプラトンは確信していたのである。プラトンは、健康な国家では、必要な限度を超えて財貨を無際限に獲得することはないが、贅沢な国家では、「無際限に」財貨の獲得を目指す可能性を示唆していると思われる。

## 第6節 国家の守護者あるいは支配者

### 第1項 仕事としての守護

本章第3節の(表-2)には、農夫、大工、織物職人、靴職人からなる健康な国家が示され、また(表-2a)では、その(表-2)の職人(職工)に牛飼い・羊飼い職人ならびに小売職人<sup>555</sup>が加えられた健康な国家が示された。その(表-1)の職人は、生活に必要な不可欠な生産物を生産する職人であり、また(表-2)で新たに加えられた職人は、生産物(物品・資材)を運搬し流通される職人である。生産物は市場(アゴラ)にて交換され、国家の構成員である市民の間に配分されている。(表-2)および(表-2a)の職人について、既に本章第3節で述べたように、プラトンは、それぞれの仕事は、一人の人間が自然本来の素質に合った一つのことを、正しい時機に、他のさまざまなことから解放されて行なう場合にこそ、より多く、より立派に、より容易になされると認識し、つまり、職人は生まれならに最もすぐれた生産技術を身に付けていると認識している。職人や農夫が、その生産技術に特化することによって、その生産性を引き上げ、より低い生産費でそれぞれの物品(製品)生産を可能にし、それぞれの社会的な産出量をより増加させる。このことは、今日の経済学でも知られていることである。プラトンは、紀元前4世において、分業が生産性を引き上げ、生産費の低下をもたらし、生産量を増加させることを理解し、天性として、一人ひとりに適している技術が一意であると仮定している。この仮定がプラトンの正義を裏付けるになっている。

本章第3節の(表-2b)において、先の(表-2)の職人に、職人としての軍人(守護者の集団に属する職人)が加えられている。今日でも公共財としての国防サービスは、政府部門によって、提供されるサービスであるが、そのサービスの提供は、多くの軍人(今日の日本における自衛隊)の活動に依存することは自明である。軍人サービス(すなわち国防サービス)

<sup>555</sup> 小売職人は、都市のアゴラで農夫や織物職人や靴職人が生産したものを貨幣と交換する職人である。

は公共財であるが、本章第4節において、盾やそのほかの武器・戦具を誰でも充分に取り扱えることはできないであろうし、また重甲歩兵としての闘いあるいは戦争における他のどのような闘い方でも、誰でも戦士となれることはないこと、また軍人には、そうした道具についての知識が必要であり、十分な練習も積んでいなければならない。これらをプラトンは認識していたと思われる。そのような軍事に関する知識がなく、訓練も積まない者は、軍事になんの役にもたないとプラトンは認識していた。ゆえに、プラトンは、他の職人と同様に、戦争に専門技術（戦術を含む）が必要であることを説明した。プラトンの世界では、軍人は職人の集団に含められる。

プラトンは、守護者たちを他の多くの職人仕事から解放され、「国家の自由を作り出す職人としてきわめて厳格な腕をもった専門家」<sup>556</sup>でなければならない、「ほかのことを何ひとつ仕事として行なってはならないのと同様に、〈真似することも〉許されない」<sup>557</sup>者と規定し、「国の守護者の果すべき仕事は何よりも重要であるだけに、それだけまた、他のさまざまな仕事から最も完全に解放されていなければならないだろうし、また最大限の技術と配慮を必要とする」<sup>558</sup>と強調している。守護者（軍人を含む）の特性としてプラトンは、何かを守護する任務に適した自然的素質として、気概と知を愛することを挙げている。守護者は「味方に対しては穏やかで、敵に対してだけきびしい人間でなければならない」<sup>559</sup>が、同時に、プラトンは、穏やかな性質と気概のある性質を守護者に求めている。守護者は、身内の者や親しい人には穏和になり、見知らぬ人びとには正反対の態度をとるが、そのために、守護者が「親しいものとよそものを知と無知によって規定する」<sup>560</sup>が必要になる。そして「それはまさに、学び知ることを愛するものだという事にならないだろうか」<sup>561</sup>とプラトンは提案する。このようにして、守護者は「生まれつき知を愛し、学びを愛する人間でなければならない」<sup>562</sup>と規定し、「国家のすぐれて立派な守護者となるべき者は、その自然本来の素質において、知を愛し、気概があり、敏速で、強い人間であるべきだ」<sup>563</sup>と、プラトンは結んでいる。

<sup>556</sup> 前掲書『国家（上）』395C（第3巻第8章、222ページ12から13行目）。

<sup>557</sup> 前掲書『国家（上）』395C（第3巻第8章、222ページ15から223ページ1行目）。守護者が真似るに相応しいものとして、「勇気ある人々、節度ある人々、敬虔な人々、自由精神の人々、そしてすべてこのような性格のものをこそ、早く子供のときから真似すべきであって、逆に賤しい性格の物事は、実際に行なっていないし、それを真似るのが上手であるような人間であってもならない」とプラトンは語る（前掲書『国家（上）』395C（第3巻第8章、223ページ2から5行目））。

<sup>558</sup> 前掲書『国家（上）』374E（第2巻第15章、162ページ10から12行目）。

<sup>559</sup> 前掲書『国家（上）』375C（第2巻第15章、164ページ16から165ページ1行目）。

<sup>560</sup> 前掲書『国家（上）』376B（第2巻第16章、168ページ4行目）。

<sup>561</sup> 前掲書『国家（上）』376B（第2巻16章、168ページ5から6行目）。

<sup>562</sup> 前掲書『国家（上）』376B（第2巻第16章、168ページ12から13行目）。

<sup>563</sup> 前掲書『国家（上）』376C（第2巻第16章、168ページ15から16行目）。

## 第2項 支配者

プラトンは、守護者を支配者と支配者の補助者に二つに分け、支配者となるのは年長者の人びとのなかから選ばれ、年長者のなかで最も優れた人々が支配になる。支配されるのは若い人びとである。支配者になる人びとは、国家を守護する仕事に最も適した人であり、「その仕事のための知恵と能力をもち、さらに国のことを気づかう人間でなければならない」<sup>564</sup>とプラトンは主張する。ここで気遣うとはどのようなことなのであろうか。国家の利益を支配者（守護者）が気遣うことで、「全生涯にわたり、国家の利益と考えることは全力をあげてこれを行う熱意を示し、そうでないことは金輪際しようとしなない気持が見てとれるような者たち」<sup>565</sup>が支配者に相応しいと断言する。守護者たちが国家に最善のことをなさねばならないといつも抱いているかどうかを観察するために、プラトンの意見では、その対象になる人々を「あらゆる年齢においてつぶさに見守り、そういう信念を守りぬく者たちであるかどうか、たぶらかされたり強いられたりすることによって、国家に最善のことをなさなければならぬという考えを、つい忘れて捨て去ることがないかどうかを、見張っていなければならない」<sup>566</sup>とされる。この観察を行うのは、誰であらうか。プラトンによると、それは支配者である。

「最もすぐれた守護者」の選出を提案するプラトンは、彼らが国家に最善をなすことを、その意に反して、捨て去る（変える）ことがないかどうかを観察することを訴えている。その捨て去るケースとして3つ場合を挙げ、国家に最善のことをなすことを捨て去る気質の者であるか否かを、守護者になるべき人々について検証することも提案している。その第一は、説得されて考えを変えることやその考えを忘却して、その熱意を捨て去ることである。プラトンは、この場合を「〈盗まれて〉」<sup>567</sup>その考えを捨て去ると言う。プラトンによるその方策は、彼らを「早く子供のころから観察するために、最もそのような考えを忘れてしまいそうな、また欺かれて考えをかえてしまいそうなさまざまな事柄を、彼らに課さなければならないし、そしてそのなかにあつてよく記憶を確保する者、欺かれて考えを変える事のない者を選び出し、そうでない者は名簿からはずさなければならない」<sup>568</sup>ことである。その第二は、何か痛い目にあうとか、苦しい目にあうことによって、その考えを変えることである。プラトンは、この場合を「〈強いられて〉」<sup>569</sup>捨て去ることであるが、これに対する方策として、「さまざまな労苦や苦痛や競争を彼らに課して」<sup>570</sup>観察することも提案している。その第三

<sup>564</sup> 前掲書『国家（上）』412C（第3巻第19章、272ページ14から15行目）。

<sup>565</sup> 前掲書『国家（上）』412E（第3巻第19章、273ページ8から11行目）。

<sup>566</sup> 前掲書『国家（上）』412E（第3巻第19章、273ページ12から15行目）。

<sup>567</sup> 前掲書『国家（上）』413B（第3巻第19章、275ページ3行目）。

<sup>568</sup> 前掲書『国家（上）』413CからD（第3巻第20章、276ページ5から8行目）。

<sup>569</sup> 前掲書『国家（上）』413B（第3巻第19章、275ページ8行目）。

<sup>570</sup> 前掲書『国家（上）』413d（第3巻第20章、276ページ11行目）。

は、快樂に魅せられたり、恐怖におびえたりすることによって考えを変えることである。プラトンは、この場合を「〈たぶらかされて〉」<sup>571</sup>と呼んでいる。たとえば、寡頭制国家においては金儲けを最高の善としているために、支配者（父親）がその若者（息子）を「贅沢に甘やかして、身体的にも精神的にも苦勞をいやがる人間にし、また快樂に対しても苦痛に対しても抵抗力のない、柔弱な怠け者にしてしまう」<sup>572</sup>ので、若者は浪費家と成長し、貧乏人へと落伍し、支配者になることはない。また子供たちを「戦争に連れて行って、馬上からこれを見学させなければならない」<sup>573</sup>、そして、「小犬にそうするように、血の味を経験しなければならない」<sup>574</sup>と言う。プラトンは、彼らを「若いうちに何か恐怖をよぶような状況のなかに連れて行き、それからこんどは快樂のなかへとおきかえて、金を火のなかで試すよりもはるかにきびしく試しながら、よく観察しなければならない」<sup>575</sup>と提案する。

「子供のときにも、青年のときにも、成人してからも、たえず試練を受けながら無傷のまま通過する者」<sup>576</sup>を「国家の支配者として、また守護者に任命」<sup>577</sup>する。プラトンは、国家の最善を忘れる事なく試練を受けながら無傷の者たちが「外からの敵に対しても、内なる同胞に対しても、後者には害をなそうという気持ちを起させないように、前者にはそれができないように国を守るところの、全き意味での〈守護者〉と呼ぶのが、真に最も正しい呼び方」<sup>578</sup>とし、「われわれがこれまで守護者と呼んできた若者たちは、支配者たちの決めた考えに協力する〈補助者〉であると呼ぶのが正しい」<sup>579</sup>と結んでいる。

### 第3項 支配者の最重要な仕事と守護者の厳守すべきこと

支配者の最大の任務は、「国民のひとりひとりが自分に与えられた一つの仕事を果して、けっして多くの人間に分裂することなく真に一人の人間となるように、ひいてはそのようにして、国家の全体も自然に一つの国になって、けっして多くの国に分裂することのないよう

<sup>571</sup> 前掲書『国家（上）』413C（第3巻第19章、275ページ11行目）。

<sup>572</sup> 前掲書『国家（下）』556BからC（第8巻第10章、224ページ7から8行目）。

<sup>573</sup> 前掲書『国家（下）』537A（第7巻第15章、172ページ5行目）。

<sup>574</sup> 前掲書『国家（下）』537A（第7巻第10章、172ページ6から7行目）。

<sup>575</sup> 前掲書『国家（上）』413E（第3巻第20章、277ページ1から4行目）。

<sup>576</sup> 前掲書『国家（上）』413Eから414A（第3巻第20章、277ページ8から9行目）。

<sup>577</sup> 前掲書『国家（上）』413Eから414A（第3巻第20章、277ページ9から10行目）。これに続けて、「その人の生前にも、また死後にも埋葬の儀式やその他彼を記念する数々のものによる最高の贈り物を与えて、これに名誉を授けなければならぬ。しかし他方、そうでない者は排除しなければならない」と述べている（前掲書『国家（上）』414A（第3巻第20章、277ページ10から12行目））。

<sup>578</sup> 前掲書『国家（上）』414B（第3巻第20章、278ページ1から3行目）。

<sup>579</sup> 前掲書『国家（上）』414B（第3巻第20章、278ページ4から5行目）。プラトンは、守護者には、一般内政・外交・政策の職務を担う守護者と、軍人（戦士）としての守護者を含めていたが、全き意味での守護者は、前者の守護者であろう。

にしなければならない]<sup>580</sup> ようにすることである。プラトンは、フェニキア物語<sup>581</sup> を引いて、支配者の重要な任務の一つを語っている。その物語を通じて、次の支配者として統治する能力のある子供を選び、育むことであることを支配者の大きな任務の一つと位置づけている。プラトンは、「もし守護者たちに凡庸な子供が生まれたならば、これを他の人々のなかへと送り出し、他の人々にすぐれた子供が生まれたならば、守護者たちのなかへ入れなければならない]<sup>582</sup> と語る。

補助者（すなわち軍人）がお互いに対しても、また、他の国民（守護される人々）に対しても穏和で危害を加えることがないようにするためには、守護者になると考えられる人々に正しい教育<sup>583</sup> を与えることであることを第一にプラトンは主張している。

これは、国が分裂することなく一つに纏まるためには、教育と教養が維持されることを説いている。「すぐれた養育と教育が維持されるならば、それはすぐれた自然的素質を国の内につくり出し、さらにそうしてつくり出されたすぐれた自然的素質は、同様の教育をしっかりと保持してわがものとしつつ、前の世代の人々よりもさらにすぐれた生まれつきのものへと成長して行く]<sup>584</sup> とプラトンは語る。さらに、「国のことを配慮する人たちはそこをしっかりと押えて、教育のあり方が自分たちの知らぬまに墮落することのないように気を配らなければならないのだ。体育と音楽・文芸について、定められた本来の秩序に反する改変を行なうことなく全力を尽くしてそれを守る]<sup>585</sup> ように警戒し見張ることを主張している<sup>586</sup>。音

<sup>580</sup> 前掲書『国家（上）』423D（第4巻3章、302ページ9から12行目）。

<sup>581</sup> プラトンは、物語は虚構であり、偽りであると信じているが、「昔のことについてはほんとうの事実を知らないで、偽りをできるだけ真実に似せることによって、それを役立つものとするのではないか」と考えている（前掲書『国家（上）』382D（第2巻第21章、189ページ5から6行目））。しかし、創作上の偽りは認めるが、神の内には偽りはないとプラトンは信じている。

フェニキア物語は、テバイ建国物語である。プラトンは、この物語において、支配者に仕事のなかで最も重要な子供達の中から支配者や守護者に適した人々を選ぶことの重要性を伝えている。この物語では、神によって人間が形づくられが、大地から生まれる国民はすべて同胞（兄弟）であって、ある者は支配者や守護者の魂をもって、ある者は農夫や職人の魂にて生まれる。農夫や職人の子供であるが、だが、彼らが支配者・守護者の魂を持って生まれるときには、躊躇することなくその子を支配者・守護者の地位につけること、逆に、支配者・守護者の子供の魂が農夫や職人の魂をもってしているときには、その子を不憫に思うことなく、農夫や職人の地位を与える、ことを述べている（前掲書『国家（上）』415AからC（280ページ8から281ページ14行目）参照）。プラトンは、フェニキア物語を引いて、国民は同胞（兄弟）であり、支配者の子が農夫や職人になることも、またの農夫や職人の子が支配者・守護者になることが不自然ではないことを指摘しているのかもしれない。

<sup>582</sup> 前掲書『国家（上）』423CからD（第4巻第3章、302ページ4から6行目）。

<sup>583</sup> 前掲書『国家（上）』416C（第3巻第22章、284ページ9から11行目）参照。

<sup>584</sup> 前掲書『国家（上）』424A（第4巻第3章、303ページ13から16行目）。

<sup>585</sup> 前掲書『国家（上）』424B（第4巻第3章、304ページ4から7行目）。

<sup>586</sup> プラトンは、「音楽・文芸の様式を新しいものに改変することを、すべてにわたる危険をおかすことにほかならないと考えて、くれぐれも用心しなければならない」と警告を発する（前掲書『国家（上）』424C（第



楽・文芸の改変は、「少しずつ入りこんできては住みつき、じわじわとめだたぬように人々の品性と営みのなかへ流れこんで」<sup>587</sup>、そして「契約・取引の上の人間関係の分野をおかすことになり」<sup>588</sup>、さらにそこから進んで法律や国制へと、「大へんな放縱さをもって向かって行き、こうして最後には、公私両面にわたるすべてを覆すに至る」<sup>589</sup>と語らせる。子供たちが、音楽・文芸を通じて良き秩序と法を彼らが自分の中に受け入れた場合には、「その良き秩序と法は、何事につけても彼らを離れることなく育くみ、もしそれまでに国の何かが墮落して倒れているならば、それを真直ぐに建て直すことだろう」<sup>590</sup>という。プラトンは、教育の影響が大きいと感じている。

そして第二に、私有財産の所有することを禁止すると主張する。これは、「彼らに当てがわれる住居その他の所有物は、彼ら自身ができるだけすぐれた守護者であることを妨げないことはもちろん、他の一般の国民に悪事をはたらくようそそのかすことをもまないようなものでなければならぬ」<sup>591</sup>ためである。プラトンは、『友のものは皆のもの』<sup>592</sup>とすることを主張している。それでは、何故、プラトンは、上の要件を何故守護者集団に課すのであろうか。守護者たちが私有財産を保有することを禁じているのは、この点については、既に、第1章第1節第2項において、プラトンの支配者につて記述したときに言及したように、それは支配者（守護者）層の間の団結を強固にするためである。

第三に、妻女と子供の守護者間での共有を強制している。この共有についても第1章第1節第2項で述べたことであるがこの共有制は、守護者層に協和する意識を醸成する。守護者の私的所有の禁止と共に、妻女と子供の共有制がもたらされる社会では、国家の国民の間に苦楽を共有する精神が醸成されるであろう。これは、「誰か一人が幸福であったり不幸であったりするとき、みなが一致して同じように」、全員がそれぞれに自分のことのように、同様に幸福あるいは不幸を共有する。プラトンは共に共感することが私的財産所有の禁止と妻女と子供の共有する制度から実現することを期待していたのかも知れない。第四に、守護者の報酬は、丁度一年間の暮らしに過不足<sup>593</sup>のない分だけを受ける。この条件は、支配者や守護者

4巻第3章、304ページ14から15行目)。というのは、「国家社会の最も重要な習わしや法にまで影響を与えることなしには、音楽・文芸の諸様式を変え動かすことはできないのだから」(前掲書『国家(上)』424C(第4巻第3章、304ページ16から305ページ1行目))。

<sup>587</sup> 前掲書『国家(上)』424D(第4巻第3章、305ページ15から16行目)。

<sup>588</sup> 前掲書『国家(上)』424E(第4巻第4章、306ページ1行目)。

<sup>589</sup> 前掲書『国家(上)』424E(第4巻第4章、306ページ2から3行目)。

<sup>590</sup> 前掲書『国家(上)』425A(第4巻第4章、306ページ13から14行目)。

<sup>591</sup> 前掲書『国家(上)』416CからD(第3巻第22章、284ページ14から16行目)。

<sup>592</sup> 前掲書『国家(上)』424A(第4巻第3章、303ページ8か9行目)。

<sup>593</sup> プラトンは、節度ある勇敢な戦士が必要とする分量を決めている。

が贅沢な食生活に陥ることを回避するために課した制約であろう。第五に、共同食事によって共同生活をする。

最後に、守護者・支配者が金や銀の取り扱いに触れることを禁止し、同時に、金や銀の保有を禁止している。なぜ、支配者と守護者にこの厳しい条件（要件）を加える必要があったのであろうか。プラトンは、「彼らはその魂の中に、神々から与えられた神的な金銀をつねにもっているのであるから、このうえ人間世界のそれを何ら必要としないし、それに、神的な金銀の所有をこの世の金銀の所有によって混ぜ汚すのは神意にもとることである。なぜなら、数多くの不敬虔な罪が、多くの人々の間に流通している貨幣をめぐってなされてきたのであり、これに対して彼らも持っている金銀は、純粋で汚れなきものだからである」<sup>594</sup>と説明している。プラトンは、貨幣のもつ交換の媒介手段としての機能ならびに価値尺度としての機能に付いては批判しないであろうが、貨幣の価値貯蔵機能については批判していることがわかる。プラトンは、貨幣が「数多くの不敬虔な罪」の温床になっているから、貨幣を支配者・守護者が所有することを禁止することは、それは同時に交換媒介手段として機能する貨幣を喪失することになる。

#### 第4項 支配者あるいは守護者は幸福なのであろうか

プラトンは、国民間の団結と国民間の連帯（協和）を達成するために、支配者・守護者たち自身が私有の土地や家屋や貨幣を所有することを禁止している。守護者がそれらを所有するようになるときには、「彼らは国の守護者であることをやめて、家屋の管理者や農夫になり、他の国民たちのために戦う味方であることをやめ」<sup>595</sup>、「他の国民たちの敵としての主人となり、かくて憎み憎まれ、謀り謀られながら、全生涯を送る」<sup>596</sup>と結んでいる。プラトンは、支配者・守護者に私有財産を認めると、支配者・守護者の間で争いが持ち上がり、その結果、国家が崩壊する恐れがあることを危惧している。これを避けるために、私有財産の禁止をおいている。守護者あるいは支配者が土地を所有するとき、大邸宅に居住するとき、あるいは貨幣を所有するとき、「彼ら自身も他の国民も、すでに滅びの寸前までひた走っている」<sup>597</sup>とプラトンは警告する。

このプラトンの守護者・支配者に要請する条項のもとで生活する支配者・守護者は、幸福なのか否かを考察してみよう。その下では、国家の守護者・支配者達は、土地の所有や豪華な邸宅の建立や立派な家具調度品の備えや金や銀の所有が禁止されて、さらに、彼らの報酬

<sup>594</sup> 前掲書『国家（上）』416Eから417A（第3巻第22章、285ページ13から286ページ2行目）。

<sup>595</sup> 前掲書『国家（上）』417B（第3巻第22章、286ページ8から9行目）。

<sup>596</sup> 前掲書『国家（上）』417B（第3巻第22章、286ページ9から10行目）。

<sup>597</sup> 前掲書『国家（上）』417B（第3巻第22章、286ページ11から12行目）。

は、丁度一年間の暮らしに過不足のない分だけで生活するのであるから、彼らは私費での旅行もできないし遊女に貢ぐこともできない生活になる。このような生活を連想する人々は、支配者や守護者について「まるで賃銭で傭われた兵隊のように、国のなかで、ほかに何もすることのなしにただ見張りをしながら、座っているだけのように見える」<sup>598</sup>と哀しげに語るであろう。しかし、プラトンは、この条件下にあっても支配者・守護者もまた他の国民も幸福であると語る。

プラトンの言葉に耳を傾けて見よう。プラトンは、国家の一階層だけを切り離し、この特別の国家の階層の幸福を考えるのではなく、「国の全体ができるかぎり幸福になるように」国家を建設することが重要であると断言する。このときに、「幸福な国家」が形成される信じているプラトンは、支配者・守護者に先の条件のもとで幸福な国家が形成され、〈正義〉がその国家に見出されると断言する。国の法を制定する任務を守護者達が放棄すれば、「国家の全体を根底から滅ぼすことになるであろう、逆に国家の善き統治と幸福をもたらす決め手はまた、ただ彼らだけがもっている」<sup>599</sup>と言う。

国の守護者を決まるための目標は、「できるだけ多くの幸福が彼ら守護者たちの内に与えられる」<sup>600</sup>ことではなく、「国家の全体に目を向けて、全体としての国の中に幸福がある」<sup>601</sup>こととし、守護者・支配者は、「自分自身の仕事に対してできるだけすぐれた専門の職人であるように」<sup>602</sup>することがプラトンの意図である。そして、プラトンは、「国家の全体が成長してよく治められている状態のもとでこそ、それぞれの階層をして、自然本来的にそれぞれに与えられる幸福に、あずかるようにさせるべきである」<sup>603</sup>と言う。

国家が善く治められるためには、国家に富と貧乏が生じないことが必要になる。富と貧乏は、職人を怠惰にし、職人の技術による製品を劣悪にするとプラトンは認識している。「守護者たちがあらゆる手段をつくして、国の中に忍びこんでくるのをけっして見逃さないように見張らなければならないもの」<sup>604</sup>は「富と貧乏」<sup>605</sup>であるとプラトンは語る。というのは、富と貧乏は、「一方は贅沢と怠惰と、仕事本来のきまりを改変をつくり出し、他方はそういう改変のほかに、卑しさと劣悪な職人根性をつくりだす」<sup>606</sup>とプラトンは認識しているからで

<sup>598</sup> 前掲書『国家（上）』420A（第4巻第1章、290ページ12から14行目）。

<sup>599</sup> 前掲書『国家（上）』421A（第4巻第1章、294ページ7から8行目）。

<sup>600</sup> 前掲書『国家（上）』421B（第4巻第1章、294ページ15行目）。

<sup>601</sup> 前掲書『国家（上）』421B（第4巻第1章、294ページ16から295ページ1行目）。

<sup>602</sup> 前掲書『国家（上）』421C（第4巻第1章、295ページ3から4行目）。

<sup>603</sup> 前掲書『国家（上）』421C（第4巻第1章、295ページ5から7行目）。

<sup>604</sup> 前掲書『国家（上）』421E（第4巻第2章、297ページ2から3行目）。

<sup>605</sup> 前掲書『国家（上）』422A（第4巻第2章、297ページ6行目）。

<sup>606</sup> 前掲書『国家（上）』422A（第4巻第2章、297ページ6から8行目）。プラトンは、陶工を例に引いて、富

ある。

プラトンの国家は金も銀も保有していないので、他の国と戦争をする際に如何にして国家構成員の生命と財産を護るのであるか。金持ちの国を相手にして戦うのは困難であるかもしれないが、プラトンは、実際には「金持ちの人々を相手に自分たちのほうは戦争について専門の訓練を受けた者として、戦うことになる」<sup>607</sup>ので、「容易に戦うことができるだろう」<sup>608</sup>と語る。また、「二つのそのような国を相手に戦うのは比較的容易」<sup>609</sup>であると言う。プラトンは、彼の国家の戦争技術は他の国よりも優れているので、数の上で勝った相手とも容易に戦えると確信しているのである。プラトンは金持ちな二国を相手に戦うとき、一方の金持ちの国と同盟を結んで、他の金持ちの国と戦うことによって、金も銀も保有していない国が戦争の危険にさらされることはないと考えている。プラトンによると、他の国々は一つの纏まった国家ではなく、「ひとつひとつがそれ自身、たくさんの国々なのであって、けっして一つの国家」<sup>610</sup>ではなく、そこには「すくなくとも、いかなる場合でも二つの互に敵対する国が」<sup>611</sup>あり、「貧乏な人々の国と金持ちの人々の国」<sup>612</sup>であると想定され、そして「たくさんの国々を相手にするつもりで、一方の側の人々の財貨と権力、あるいは身柄そのものを、他方の人々に与えるというやり方をとれば」<sup>613</sup>、たくさんの味方と少数の敵をもつことになるであろう。

## 第7節 4つの徳をもつ国家

### 第1項 国家における4つの徳

4つの徳とは、知恵、勇気、節制、そして勇気である。プラトンは、国家を建設した後に、その国家がこれらの徳を備えた国家か否かを検討している。プラトンは、建設した国家が完全な意味で優れたものであるためには、知恵のある国家、勇気のある国家、節制のある（節制をわきまえた）国家、そして正義のある国家である必要性を置いている。

知恵のある国家かどうか。プラトンが建設した国家が知恵のある国家であるとプラトン自

---

は陶工を怠惰にし、貧乏は「道具やその他、自分の技術のために必要なものを調達できないような場合にも、彼の作る製品は粗悪なものとなるだろうし、また息子その他に自分の技術を教えてやるにしても、より劣悪な職人を育成することになるであろう」と語っている（前掲書『国家（上）』421DからE（第4巻第2章、296ページ3から13行目）参照）。

<sup>607</sup> 前掲書『国家（上）』422B（第4巻第2章、297ページ16から298ページ1行目）。

<sup>608</sup> 前掲書『国家（上）』423B（第4巻第2章、298ページ5から6行目）。

<sup>609</sup> 前掲書『国家（上）』422AからB（第4巻第2章、297ページ13から14行目）。

<sup>610</sup> 前掲書『国家（上）』422E（第4巻第2章、300ページ1から2行目）。

<sup>611</sup> 前掲書『国家（上）』422E（第4巻第2章、300ページ2から3行目）。

<sup>612</sup> 前掲書『国家（上）』422E（第4巻第2章、300ページ3行目）。

<sup>613</sup> 前掲書『国家（上）』423A（第4巻第2章、300ページ6から7行目）。

身は考えている。というのは、プラトンは、「ものごとを考慮することにかけて、すぐれた能力をもっているのだから」<sup>614</sup>と云う。この優れた考慮は、無知ではなく知識であるから、プラトンの建設した国家には様々な知識が存在していた。プラトンの建設した国家には、大工の知識があり、木製の器具についての知識がある<sup>615</sup>。プラトンは、大工の知識（技術）のある国家は「大工の仕事に長じた国家」<sup>616</sup>と呼ぶことがあるが、その知識のゆえに「知恵のある国家」と呼ぶべきではないと言う。なぜだろうか。プラトンは、「国における一部の特定の事柄のためではなく、全体としての国家自身のために、どのようにすれば自国内の問題についても他国との関係においても、最もよく対処できるかを考慮するような知識」<sup>617</sup>があるとき、知恵のある国家と呼ぶことができると考えている。だから、大地から稔りをもたらすことに関する知識によっては、「農業の技術に長じた国家」と呼ぶべきであるとプラトンは言う。プラトンは、国を守るための知識が、国内の問題あるいは対外的な問題関係において最もよく対処できるかを考慮する知識であると考えている。この知識は、プラトンが全き意味での〈守護者〉<sup>618</sup>と呼んでいる支配者のうちにある。プラトンは、すぐれた考慮の能力があるとき、知恵のある国家と呼んでいるが、「みずからの最も小さな階層と部分にはかならない指導者・支配者によってこそ、またその最小部分のうちにある知識によってこそ、全体として〈知恵〉があるということになる」<sup>619</sup>と主張する。

次に、勇気のある国家かどうかを考察する。対話篇『ラケス』199B から C 第二部（2）ニキアスによる定義とその吟味（78 ページ 7 から 79 ページ 4 行目）において、ソクラテスは勇気について「あらゆるあり方における善いことと悪いことについて」理解していると説明している。プラトンは、勇気のある国家か否かについて、国を守って戦い、国のために出征する部分があるかどうかで判断する。よって、国家が勇敢であるかどうか、「国家自身のある一部分による」<sup>620</sup>とプラトンは言う。この部分は、「恐ろしいものとは何でありどのようなものであるかということについて、それを立法者が教育において告げ聞かせたとおりのものとみなす考えを、あらゆる場合を通じて保持しつづけるような力をもっている」<sup>621</sup>とプラトン

<sup>614</sup> 前掲書『国家（上）』428B（第4巻第6章、317ページ2から3行目）。

<sup>615</sup> 前掲書『国家（上）』428C（第4巻第6章、317ページ11から16行目）参照。

<sup>616</sup> 前掲書『国家（上）』428C（第4巻第6章、317ページ14行目）。

<sup>617</sup> 前掲書『国家（上）』428D（第4巻第6章、318ページ10から11行目）。

<sup>618</sup> 全き意味での守護者とは、「外からの敵に対しても、内なる同胞に対しても、後者には害をなそうという気持を起こさせないように、前者にはそれができないように国を守るところの、全き意味での〈守護者〉」である（前掲書『国家（上）』414B（第3巻第20章、278ページ1から3行目））。

<sup>619</sup> 前掲書『国家（上）』428E から 429A（第4巻第6章、319ページ12から14行目）。

<sup>620</sup> 前掲書『国家（上）』429B から C（第4巻第7章、321ページ4から5行目）。

<sup>621</sup> 前掲書『国家（上）』429C（第4巻第7章、321ページ5から8行目）。



は言う。これをプラトンは〈勇氣〉と呼んでいる。プラトンは、さらに詳しく勇氣を「恐ろしいものとそうでないものについての、正しい、法にかなった考えをあらゆる場合を通じて保持することを、〈勇氣〉と呼び、そう規定したい」<sup>622</sup>と説明している。ここで、あらゆる場合を通じてとは「苦痛のうちにあっても、快樂のうちにあっても、欲望のうちにあっても、恐怖のうちにあっても、それを守り抜いて、なげださいこと」<sup>623</sup>という意味である。

次に、節制をわきまえた国家について検討しよう。プラトンは、節制は、一種の秩序であり、一般に『おのれに克つ』と言われる。自分自身の「魂には、すぐれた部分と劣った部分とがあって、すぐれた本性をもつものが劣ったものを制御している場合には、『おのれに克つ』と言っている」<sup>624</sup>とプラトンは説明している。一国の中に、劣った部分とすぐれた部分があるとき、すぐれた部分が劣った部分を制御するとき、国家は節制をわきまえた国家となる。国家として快樂や欲望に打ち克ち、自分自身に打ち克っている<sup>625</sup>国家を、節制をわきまえた国家と呼ぶ。様々な欲望や快樂を制御する国家が、『おのれに克つた』国家で、秩序が保持されている。国家には、一方に「子供たちや女たちや召使たちや、さらに自由人とは名ばかりの多くのつまらぬ人たちのなかに」<sup>626</sup>見出す種々さまざまな欲望や快樂や苦痛と、他方では「単純にして適正な欲望、知性と正しい思わくに助けられ、思惟によって導かれる欲望」<sup>627</sup>とがある。この「少数の、最もすぐれた素質と最もすぐれた教育を与えられた人々のなかにしか、見出せない」<sup>628</sup>国家のうちにおいて、「多数のつまらぬ人たちのいまだく欲望が、それよりも数の少ない、よりすぐれた人々の欲望と思慮の制御のもとに支配されている」<sup>629</sup>国家を、節制をわきまえた国家と説明している。

節制には、もう一つの側面があり、それをプラトンは、調和あるいは協和と言っている。節制をわきまえた国家が、「誰が支配しなければならないかについて、支配している人々と支配されている人々の間に同一の考えが成立しているような国家があるとしたら、そういう状態は、この国家のうちにこそ実現されていることになる」<sup>630</sup>と説明する。たとえば、知恵のある人々とそれが劣る人々、財産の豊富な人々と財産の少ない人々、あるいは多数の人々と

<sup>622</sup> 前掲書『国家(上)』430B(第4巻第7章, 323ページ8から10行目)。

<sup>623</sup> 前掲書『国家(上)』429D(第4巻第7章, 321ページ15から16行目)。

<sup>624</sup> 前掲書『国家(上)』431A(第4巻第8章, 326ページ6から8行目)。

<sup>625</sup> 前掲書『国家(上)』431A(第4巻第8章, 326ページ6から8行目)において、『己に克つ』ことを「その人自身の内なる魂には、すぐれた部分と劣った部分とがあって、すぐれた本性をもつものが劣ったものを制御している場合には、そのこと『己に克つ』」と説明している。

<sup>626</sup> 前掲書『国家(上)』431C(第4巻第8章, 327ページ6から8行目)。

<sup>627</sup> 前掲書『国家(上)』431C(第4巻第8章, 327ページ10から11行目)。

<sup>628</sup> 前掲書『国家(上)』431C(第4巻第8章, 327ページ11から12行目)。

<sup>629</sup> 前掲書『国家(上)』431D(第4巻第8章, 327ページ15から16行目)。

<sup>630</sup> 前掲書『国家(上)』431E(第4巻第9章, 328ページ8から10行目)。

少数の人々から構成されているとき、二つのグループの間で「どちらが支配するかということについて成立する一致協和」<sup>631</sup>していることが〈節制〉である。

最後に、その国家において正義が実現しているか否について検討する。本稿では、国家ではプラトンの基準が達成され、それは、「各人は国におけるさまざまな仕事のうちで、その人の生まれつきが本来それに最も適しているような仕事を、一人が一つずつ行わなければならない」<sup>632</sup>であると説明した。これは、「自分のことだけをして余計なことに手出しをしないことが正義」<sup>633</sup>であることを意味していた。プラトンは、「自分のことだけをする」ことが正義になると何故拘るのか。「もし大工が靴作りの仕事をしようとしたり、靴作りが大工の仕事をしようとしたり、お互いの仕事道具や地位を取り替えたり、あるいは、同じ人間がその両方の仕事をしようとしたり、その他すべてがこうして取り替えられるとした場合、何らかの重大な害を国家に与えることになるだろう」<sup>634</sup>とプラトンは警告する。プラトンは、「生まれつきの素質において職人であるのが本来の人、あるいは何らかの金儲け仕事をするのが本来である人が、富なり、人数なり、体の強さなり、その他これに類する何らかのものによって思い上がったすえに、戦士の階層のなかへ入って行こうとしたり」<sup>635</sup>することが国家を破滅に導くとプラトンは主張する。たとえば、戦士が政務を取り仕切る仕事を兼ねるときにも、国家は危機に瀕するであろう。プラトンは、「戦士に属する者がその素質もないのに、政務を取り計らって国を監視・守護する任につこうとしたりして」<sup>636</sup>戦士の分を超えるとき、国家を破滅させると主張する。また、ある職人が他の職人を真似ることも国家破滅に至らしめる。プラトンは、「これらの人々がお互いの仕事道具や地位を替える場合、あるいはまた、同じ一人の人間がこれらのすべての仕事を兼ねて行なおうとするような場合は、こうした階層どうしのこのような入れ替りとは、国家を滅ぼすものである」<sup>637</sup>と主張する。

プラトンの主張は、三つの種族間での余計な手出しや相互の転換が、国家にとって最悪であるということである。「金儲けを仕事とする種族、補助者の種族、守護者の種族が国家においてそれぞれ自己本来の仕事を守って行なう場合、このような本務への専心は、さきとは反対のものであるから、〈正義〉にはかならないことになり、国家を〈正しい〉国家たらしめるものである」<sup>638</sup>と結論する。

<sup>631</sup> 前掲書『国家（上）』432A（第4巻第9章、329ページ16行目）。

<sup>632</sup> 前掲書『国家（上）』433A（第4巻第10章、333ページ2から3行目）。

<sup>633</sup> 前掲書『国家（上）』433A（第4巻第10章、333ページ5行目）。

<sup>634</sup> 前掲書『国家（上）』434A（第4巻第10章、336ページ4から7行目）。

<sup>635</sup> 前掲書『国家（上）』434AからB（第4巻第10章、336ページ10から13行目）。

<sup>636</sup> 前掲書『国家（上）』434B（第4巻第10章、336ページ13から14行目）。

<sup>637</sup> 前掲書『国家（上）』434B（第4巻第10章、336ページ14から337ページ1行目）。

<sup>638</sup> 前掲書『国家（上）』434C（第4巻第10章、337ページ11から14行目）。

## 第2項 個人における4つの徳

既に述べたように、個人にあっては、その魂（精神）は、三つの部分から構成されるが、それは「理（ことわり）を知るところのもの」としての「理知的部分」、「恋し、飢え、渇き、その他の諸々の欲望を感じ興奮するもの」としての「欲望的部分」、そして「〈理知的部分〉の補助者であることを本性とするもの」としての「気概の部分」から構成されていた。この魂の行為あるいは活動として4つの徳が抑えられる。簡潔に4つの徳を概説する。

第一に、知恵は、魂の理知的部分によって司どられる。この理知的部分は、魂全体のことを配慮するので、支配する仕事が相応しい。この部分は、音楽・文芸と体育による教育と強調することによって育まれる。音楽・文芸と体育は、美しい言葉や教養によって理知的部分を磨き上げる。

第二に、勇氣は、気概の部分によって支配される。様々の苦痛や快樂の只中で、怯むことなく恐れることなく、理性の命じることを守り通すことによって達成される。

第三に、節制とは、支配する部分と支配される二つの部分が〈理知的部分〉が支配すべきであると意見が一致して、支配に対して内乱を起こさない場合である。節制は、支配する部分と支配される部分との相互の間の友愛と協調によって達成される。

そして、最後になるが、正義は、国家の3階層がそれぞれの固有の仕事をすることによって、国家における正義がもたらされるのと同じように、魂の三つの部分はその固有の仕事をすることによって正義が保たれる。たとえば、欲望的部分が魂のなかでその分不相応に支配権を握ろうとして、魂全体に対して叛乱を起こすと、正義ではなく、不正となる。プラトンによると、正義とは、それぞれの魂の部分に「それ自身の仕事でないことを許さず」、また相互に「余計な手出しをすることをゆるさないで、真に自分の固有のことを整え、自分で自分を支配し、秩序付け、自己自身と親しい友となり、三つあるそれらの部分を、いわばちょうど音階の調和をかたちづくる高音・中音・低音の三つの音のように調和させ」、そして、魂が「節制と調和を堅持して完全な意味での一人の人間になりきって」、はじめて行為に出ることであると説明している。

## むすびにかえて

本稿では、正義を実現する国家とはどのような国家像であるのかを考察するために、プラトンの対話編『国家』の正義論ならびに国制（政治体制）論を取り上げて、正義とは、支配とは、統治とは、さらに全国民が幸福になる国制の可能性について考察した。

特に、本稿の第2章では、国制の崩壊の原因が支配者層を構成する人々の間の支配権を巡る抗争であるという想定のもと、支配者間の団結・連帯を実現するための要件ならびにプラトンが最も強く押し出している理知的な支配者と、その支配者を社会において育成するため

の教育プログラムについて考察した。プラトンの成長段階に相応した教育を与えるプログラム

- (1) 幼児から 10 歳頃（教養教育ならびに体育教育（健康管理教育））
- (2) 10 歳頃から 20 歳頃（学術教育）
- (3) 20 歳頃から 30 歳（研修教育（予選された者の教育））
- (4) 30 歳から 35 歳頃（哲学的問答法の教育（言論修練教育））
- (5) 35 歳頃から 50 歳頃（体験教育）
- (6) 50 歳以後（支配者として活躍あるいは哲学に専念）に分けて、支配者（守護者）

の各段階での教育の内容に踏み込んで検討した。理知的でかつ守護者（軍人）としての経験を体験する支配者、すなわち 50 歳超の支配者で教育を受け、そして政務を審議し計画する支配者（政治家）の職位につくことをプラトンは提案している。プラトンの支配者の育成プログラムは、念には念をいれた盤石なプログラムであるが、しかし、プラトンの理想とした国制、すなわち哲人王制国家において全国民が幸福になるかどうかについては、さらに、生産関係に深く立ち入った考察を展開する必要である。

本稿の第 3 章では、正義について、様々な観点から考察した。ギリシャ人の正義、正義の社会的有用性、正義と知者、正義と支配者、正義と利益、正義と分を守る、正義と国家、正義と善、正義と幸福などについて考察し、その中でも、正義と国制（最優秀支配制、寡頭制、民主制、ならびに僭主独裁制）の関係を検討したが、しかし、トラシマコス正義論（強者の利益が正しい）の検討を通して考察した、正義が支配者（現実の国制）にとって何であるかについては、今後さらに検討を要する大きな課題である。そうではあっても、不正者が有利にならない社会の構築は、プラトンの指摘する如く、是非達成させる必要があることは強調しておこう。

本稿の第 4 章では、プラトンが正義とは何かを明らかにするために、新たに建設された国家を取り上げ、その国家は、金儲けする階層（農民や、鍛冶職人、織物職人など）、支配者層（政策を計画し審議する人々）、そして支配者を補助する階層（軍人）から構成されるが、それぞれの階層が自身の職務に専念し、他の階層の職務（仕事）を侵さないことが正義であり、そして、プラトンが新たに建設する国家では、四つの徳、すなわち知恵、勇気、節制、そして正義が実現し、さらに、その国家で生活する各個人においても 4 つの徳が実現することを説明した。しかし、その自由民は生産関係から解放されている国民である。プラトンの場合にも、生活に必要な財やサービスの生産を担う主体は、基本的に、奴隷である。プラトンの場合にも、アリストテレスと同様に、奴隷を道具として扱い、奴隷が生産において効率的に使用されている社会を想定している。プラトンの国家も奴隷が効率的に使用されている国家を前提にされていると推察される。

新しく建設された国家において、プラトンは、生産が効率的になされることが自然であると想定し、生産関係が国制（理想的な国制）に何の影響も与えないと前提している。今日の社会認識では、そのような認識は楽観的すぎるであろう。プラトンの国家では、自由民が生産から解放されて、そして、善く生き、善く生活するとは何かを追求しているが、現代社会では、むしろ生産関係が国制の崩壊の大きな要因である。本稿で示した生産関係（生産の技術的關係）が国制の問題の課題になる。たとえば、第4章の（表-4）の贅沢な国家での職人間での生産依存関係と消費が、効率的になされていると想定されないならば、その生産と消費の関係、さらに生産された製品がどのように配分されるかは、国制（政治体制）の大きな課題になる。これは、今日の経済学では重要にして決定を見ていない課題である。

プラトンやアリストテレスは、生産を奴隷に一任して、そこで生産された財やサービスをどのように使うか（使用する技術）に着目して、国民を幸福にする政治体制の有り様を検討したが、生産を国民（自由民）自身が行う現代社会では、生産体制を如何に組織するかが第一に問題になる。

#### 引用文献

- (1) アリストテレス著（山本光雄訳）『政治学』岩波文庫，1971.
- (2) プラトン著（久保 勉訳）『饗宴』岩波文庫，1971年.
- (3) プラトン著（藤沢令夫訳）『メノン』岩波文庫，2004年.
- (4) プラトン著（加来彰俊訳）『ゴルギアス』岩波文庫，1980年.
- (5) プラトン著（藤沢令夫訳）『国家（上）（下）』岩波文庫，2009年.
- (6) プラトン著（藤沢令夫訳）『パイドロス』岩波文庫，1974年.
- (7) プラトン著（田中美知太郎・池田美恵共訳）『パイドーン』新潮社，1973年.
- (8) プラトン著（藤原令夫訳）『プロタゴラス』岩波文庫，2016年.
- (9) プラトン著（加来彰俊訳）『ゴルギアス』岩波文庫，1980年.
- (10) プラトン著（三嶋輝夫訳）『ラケス—勇気について—』講談社学術文庫，2017年.
- (11) プラトン著（田中美知太郎訳）『パルメニデス』（『プラトン全集』（第4巻）（1ページから162ページ）に収録されている『パルメニデス』を使用）岩波書店，1976年.
- (12) プラトン著（水野有庸訳）『ポリティコス（政治家）』（『プラトン全種』（第3巻）（185ページから431ページ）に収録されている『ポリティコス（政治家）』を使用）岩波書店，1976年.
- (13) プラトン著（森進一・池田美穂・加来彰彦訳）『法律（上）（下）』岩波文庫，1993年.
- (14) マックス・ウェーバー著（脇圭平訳）『職業としての政治』岩波文庫，1993年.
- (15) ホメロス著（松平千秋訳）『イリアス（上）（下）』岩波文庫，2017年.
- (16) ホメロス著（松平千秋訳）『オデュッセイア（上）（下）』岩波文庫，2016年.
- (17) 藤沢令夫著『プラトンの哲学』岩波新書，2017年.
- (18) 高津春繁著『ホメーロスの英雄叙事詩』岩波新書，1974年.
- (19) Hawkins, David, and H. A. Simon, "Note: Some Conditions of Macroeconomic Stability", *Econometrica* Vol. 17 (no. 3-4): 245-248. 1949.



参考文献

- (1) アリストテレス著 (牛田徳子訳) 『政治学』 京都大学学術出版会, 2013 年.
- (2) アリストテレス著 (村川堅太郎訳) 『アテナイ人の国制』 岩波文庫, 1980 年.
- (3) プラトン著 (田中美知太郎・池田美恵共訳) 『ソクラテースの弁明』 新潮文庫, 1973 年.
- (4) プラトン著 (田中美知太郎訳) 『ピレボス』 (『プラトン全集』 (第 4 巻) (163 ページから 336 ページ) に収録されている『ピレボス』を使用) 岩波書店, 1976 年.
- (5) デシデリウス・エラスムス著 (片山英男訳) 『キリスト者の君主の教育』 (1516 年) (『宗教改革著作集』 第 2 巻 (5 ページから 180 ページ) に編集された『キリスト者の君主の教育』を使用) 教文館, 1989 年.
- (6) トマス・モア著 (平井正徳訳) 『ユートピア』 岩波文庫, 1971 年.
- (7) デイオゲネス・ラエルティオス著 (加来彰俊訳) 『ギリシア哲学者列伝 (上) (中)』 岩波文庫, 1989 年.
- (8) トゥーキュディデース著 (久保正彰訳) 『戦史 (上) (中) (下)』 岩波文庫, 2017 年.
- (9) トマス・アクィナス著 (柴田平三郎訳) 『君主の統治について—謹んでキプロス王に捧げる—』 岩波文庫, 2012 年.
- (10) プルタルコス著 (村川堅太郎訳) 『プルタルコス英雄伝 (上) (中)』 ちくま学芸文庫, 1996.
- (11) ジョン・ロック著 (加藤 節訳) 『統治二論』 岩波文庫, 2010 年.
- (12) デカルト著 (榊田啓三郎訳) 『省察』 角川文庫, 1970 年.
- (13) プチャー著 (田中秀央・和辻哲郎・寿岳文章共訳) 『ギリシア精神の様相』 岩波文庫, 1986 年.
- (14) 藤沢令夫著『プラトンの哲学』 岩波新書, 2017 年.
- (15) アダム・スミス著 (大内兵衛・松川七郎訳) 『諸国民の富 (四)』 岩波文庫, 1992 年.
- (16) マックス・ウェーバー著 (濱嶋 朗訳) 『権力と支配』 講談社学術文庫, 2017 年.
- (17) 宇沢弘文著『社会的共通資本』 岩波新書, 2015 年.
- (18) 西村和雄著『経済数学は早わかり』 日本評論社, 1982 年.
- (19) 久保田義弘著「エラスムスの『キリスト者の君主の教育』と君主の社会的役割—知識人の人間観ならびに社会観 (3)—」『経済論集』 (札幌学院大学紀要) 2017 年.
- (20) 久保田義弘著『生産技術の選択と社会的生産関数—異時点間の資源配分の研究 (3)—』 札幌学院商経論集 第 21 巻 3・4 合併号, 2005 年.
- (21) 久保田義弘著『生産可能性集合, 競争経路および消費効率経路—異時点間の資源配分の研究 (4)—』 札幌学院商経論集 第 23 巻 3・4 合併号, 2007 年.
- (22) R. O'Connor and E. W. Henry, *Input-output analysis and its applications*, Griffin Statistical Monographs & Courses no. 36 seris. 1975.
- (23) R. Dorfman, P. A. Samuelson, and R. Solow, *Linear Programings & Economic Analysis*, McGRAW-HiLL KOGAKUSHA, LTD. 1958.
- (24) R. E. Miller and P. D. Blair, *Input-Output Analysis: Foundaitions and Extensions*, Prentice-Hall, 1985.
- (25) T. C. Koopmans (ed), *Activity Analysis of Production and Allocation: Proceedings and Conference*, New Haven and London, Yale University Press, 1951.
- (26) Dennis C. Mueller, *Public Choice*, Cambridge University Press, 1979.
- (27) P. A. Samuelson, *Foudations of Economic Analysis*, Harvard University Studies, 1947.
- (28) P. A. Samuelson, "The Pure Theory of Public Expenditure", *Reviews of Economics and Statistics*, Vol. 36. 1954.
- (29) P. A. Samuelson, "Diagrammatic Exposition of a Theory of Public Expenditure", *Reviews of Economics and Statistics*, Vol. 37. 1955.
- (30) P. A. Samuelson, "Social Indifference Curves", *Quarterly Journal of Economics*, VOL. LXX, NO. 1, 19.
- (31) Aburam Berguson, "A REFOMULATION OF CERTAIN ASPECTS OF WELFARE ECINOMICS", *Quarterly Journal of Economics*, February, 1938. (Selected Essays in Economic Theory のシリーズの

*Welfare, Planning, and Employment* に収められたものを使用する)

(くぼた よしひろ マクロ経済学・金融論)